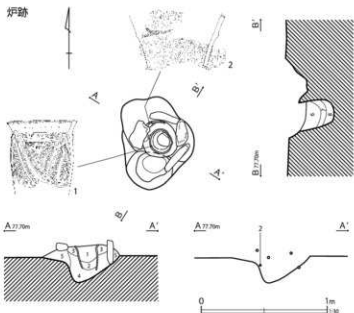


- S J 9・14  
 S J 9  
 1 暗茶褐色土 ローム粒子少量 炭化物粒子微量 しまり良い  
 2 暗茶褐色土 1層をベースにローム粒子多量  
 炭化物・焼土粒子微量  
 3 暗黄褐色土 ソフトローム土に混じる ローム粒子多量  
 炭化物・焼土粒子微量  
 4 暗茶褐色土 3層に近似するが、より黄色みを帯びる
- S J 14  
 5 暗茶褐色土 ローム粒子少量 炭化物粒子微量  
 6 暗茶褐色土 1層をベースにローム粒子多量  
 炭化物粒子微量  
 7 暗茶褐色土 ソフトローム土に混じる ローム粒子多量  
 ロームブロック含む 炭化物粒子微量  
 8 暗茶褐色土 ソフトローム土多量  
 ローム粒子・炭化物粒子少量



- S J 9・14 炉跡  
 1 暗茶褐色土 黒みを帯びる ローム粒子多量 炭化物・焼土粒子少量  
 2 暗茶褐色土 1層に近似するが、ローム粒子の混入多い  
 3 暗茶褐色土 1層より黄色みを帯び、ローム粒子少量  
 ソフトローム土に混じる しまり良い  
 4 暗茶褐色土 3層に近似するが、ソフトローム土多量 炭化物粒子微量  
 5 暗茶褐色土 ソフトローム土に混じる ローム粒子少量  
 6 暗茶褐色土 ソフトローム土に混じる ローム粒子多量 炭化物粒子微量  
 7 暗黄褐色土 ソフトローム土主体 炭化物粒子微量  
 8 暗黄褐色土 2層に近似するが、黄色みを帯びる しまり無し

第136図 第9・14号住居跡(2)

第54表 第9・14号住居跡柱穴計測表(第135図)

ピットNo	長さ(cm)	深さ(cm)	ピットNo	長さ(cm)	深さ(cm)	ピットNo	長さ(cm)	深さ(cm)	ピットNo	長さ(cm)	深さ(cm)	ピットNo	長さ(cm)	深さ(cm)
P 1	34.0	55.0	P 2	31.0	46.0	P 3	50.0	75.0	P 4	48.0	63.0	P 5	35.0	49.0
P 6	54.0	59.0	P 7	49.0	53.0	P 8	51.0	69.0	P 9	49.0	48.0	P 10	32.0	47.0
P 11	57.0	64.0	P 12	40.0	50.0	P 13	53.0	51.0	P 14	(33.0)	61.0	P 15	49.0	66.0
P 16	28.0	81.0	P 17	47.0	54.0	P 18	32.0	38.0	P 19	33.0	20.0	P 20	46.0	65.0

第55表 第9・14号住居跡出土復元土器観察表(第137図)

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備考
137-1	[17.9]	16.8	[18.2]	-	50%
2	[14.5]	-	25.2	-	20%
3	-	-	-	-	-
4	-	-	-	-	-
5	[16.1]	(20.8)	(19.0)	-	20%

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備考
137-6	[18.0]	-	15.8	10.0	30%
7	[18.7]	(24.2)	(18.8)	-	30%
8	[5.3]	-	22.3	-	20%
9	[10.0]	-	18.1	7.0	10%
10	[7.5]	-	19.8	11.8	20%

8は単節R Lを横位施文する胴部、9は燃糸文Lを施文する底部、10は無文の底部である。

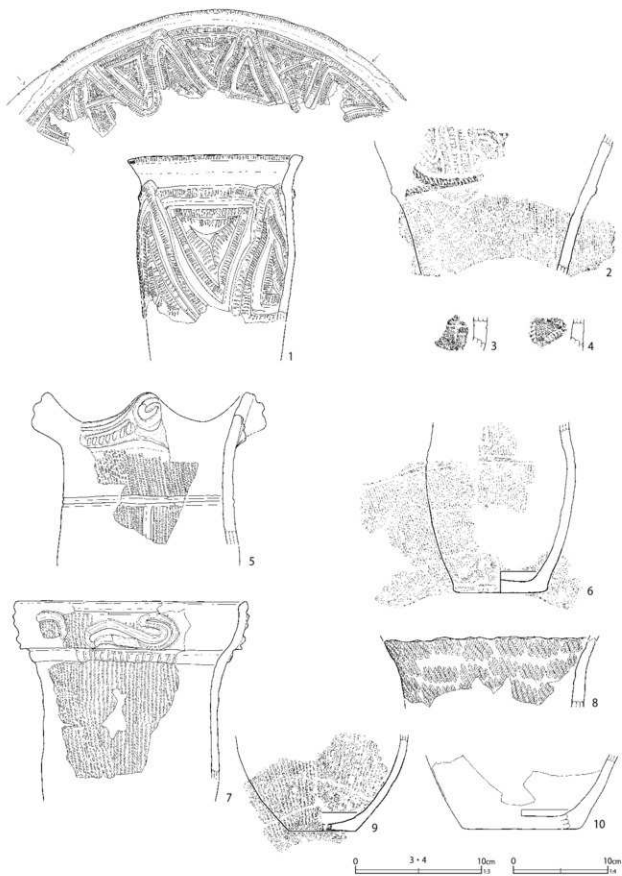
11～15は流れ込みの勝坂式古・中段階の土器群である。11は雲母を含む阿玉台Ⅱ式、12、13は角押文や三角押文で施文する烙沢式から新道式、14、15は中段階の藤内式に比定されよう。

16～26は勝坂式新段階の井戸尻式並行の土器群で、16～21は口縁部破片である。内湾する口

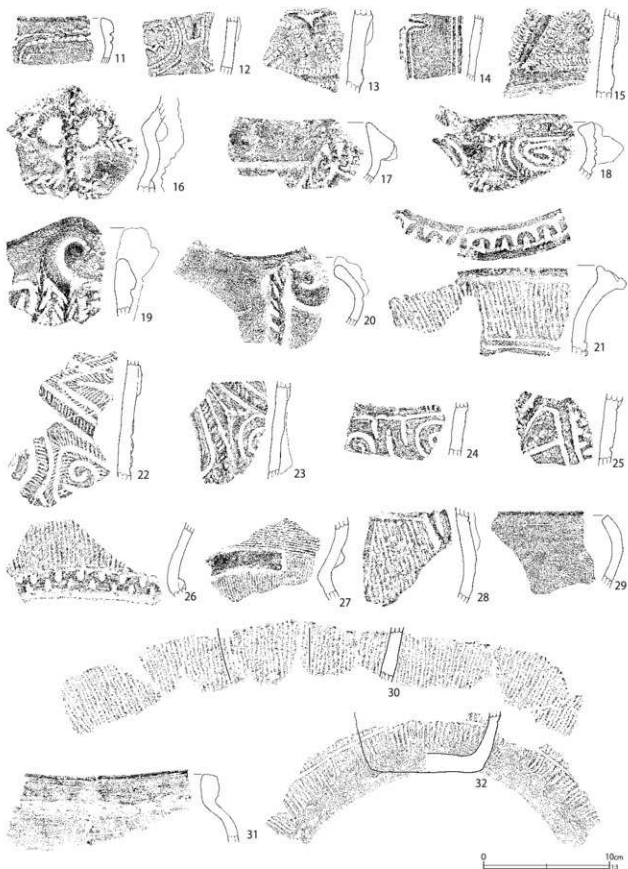
縁部に刻み隆帯で蛇文と思われる渦巻文を基調としたモチーフを描き、胴部に沈線文や爪形文を組み合わせてモチーフを描いている。26は加曾利E式になる可能性もある。

27、28、30、32は加曾利EⅠ式土器で、いずれも地文に燃糸文を施文する。

29、31は無文の浅鉢で、29は口縁部が内湾し、31は口縁部が外反して立つ器形である。



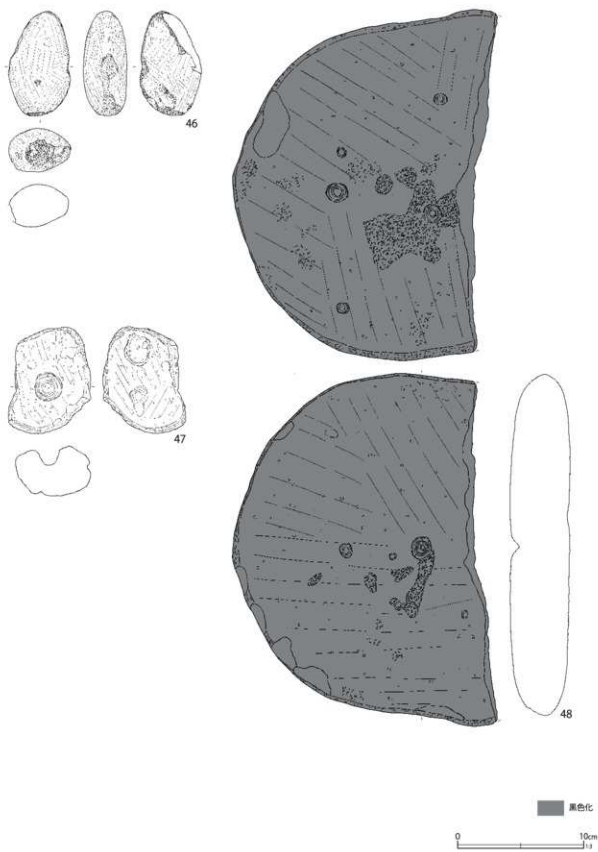
第137图 第9・14号住居跡出土遺物（1）



第138图 第9·14号住居跡出土遺物(2)



第139图 第9・14号住居跡出土遺物(3)



第140図 第9・14号住居跡出土遺物(4)

第56表 第9・14号住居跡出土石器観察表 (第139・140図)

番号	器種	分類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
139 - 33	剥片	II①	黒曜石	2.8	2.6	1.4	7.8	
34	石核	①	チャート	3.9	3.7	1.5	21.7	
35	スクレイパー	II1①イ	ホルンフェルス	4.8	10.6	1.5	70.4	
36	磨製石斧	I②イ	緑色岩	5.4	4.2	3.6	114.6	
37	打製石斧	II2①イ	頁岩	11.3	3.1	1.7	70.4	
38	打製石斧	III2①イ	頁岩	7.8	4.7	1.5	73.5	
39	打製石斧	II1②イ	頁岩	9.4	5.1	1.7	81.2	
40	打製石斧	III2②ア	砂岩	11.0	4.6	1.8	94.1	表裏面一部黒色化
41	打製石斧	V②イ	頁岩	9.6	3.7	1.3	38.0	
42	打製石斧	III2①イ	ホルンフェルス	10.6	7.0	3.0	220.1	
43	打製石斧	III2②イ	頁岩	11.0	4.5	2.3	105.9	
44	打製石斧	III2②イ	砂岩	10.6	6.4	2.5	165.1	
45	打製石斧	III1②イ	頁岩	[9.0]	[6.1]	1.3	54.2	
140 - 46	敲石	II1-3②ア	緑色岩	8.3	4.9	3.5	183.7	
47	軽石類	IV1-2①イ	多孔質軽石	8.5	6.6	4.0	49.9	
48	石皿	II②ア	閃緑岩	[21.0]	[27.9]	4.9	4513.3	炉への転用

石器類は第139図33～第140図48が出土している。

33は剥片、34が石核である。

35はスクレイパーで、縦長剥片素材としている。

36は乳棒状磨製石斧の基部片である。

37～45は打製石斧である。37は短冊形を、38が楕円形を、38～45が楕形を呈する。刃部は、37、38、43、44が両刃、39、40、42、45が片刃である。また、40は被熱により正面及び裏面が黒色化している。

46が敲石、47は軽石類で、正面及び裏面に凹痕を有する。

48は炉に転用された石皿で、下半部を欠いている。正面及び裏面に凹痕を有する。また、被熱の影響で全的に黒色化している。

#### 第10号住居跡 (第141図～第145図)

S-9区に位置する。北側で第11号住居跡と重複するが、本住居跡の方が新しい。確認時は不明瞭であったが、埋甕炉が検出されて、住居跡の存在が明らかになった。住居跡の平面形を明確にし得なかったが、径4.73m程の浅い不整形の掘り込みを検出した。但し、覆土にはローム土の混入が多く、立ち上がりも不鮮明であった。

壁溝は検出できなかった。柱穴5基が検出されたが、P2としたもの以外はいずれも浅く、配置も不明瞭である。主柱穴の深さは、P2=58cmである。

炉は大形の土器を埋設した埋甕炉である。径90cm、深さ10cm程の浅い円形の掘り込みの中央に口径約50cmの深鉢の口頭部が埋設される。また、長期間の使用によるものか、炉底部ばかりでなく土器に接する地山表面も、被熱による硬化及び赤色化が認められる。

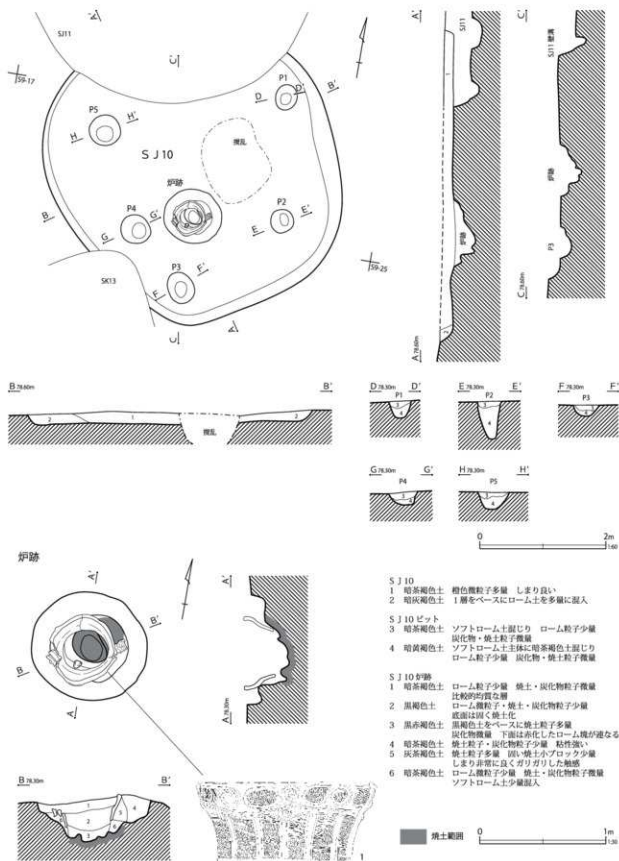
埋甕は検出されなかった。

住居跡は炉体土器から加曽利EⅢ式期の所産である。

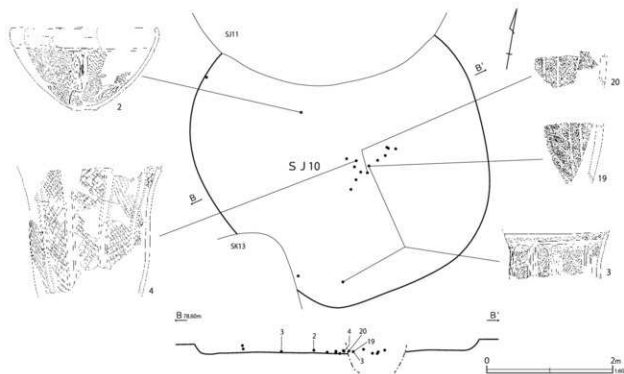
遺物は第143図～第145図の土器類、石器類が出土した。

土器類は1～29である。1は炉体土器で、加曽利E式キャリバー形深鉢の口頭部であり、口縁部に渦巻文と融合した区画文を6単位に、独立した楕円区画文を3単位に施文する。口縁部下端区画文は口縁部渦巻文から続く渦巻文を重層的に入り組ませて施文している。胴部は口縁部モチーフと相関しない磨消懸垂文を横位条線文地上に13本垂下する。

2は口縁部が内湾して開く浅鉢で、無文の口縁



第141図 第10号住居跡



第142図 第10号住居跡遺物出土状況

第57表 第10号住居跡柱穴計測表 (第141図)

ピットNo.	長径 (cm)	深さ (cm)	ピットNo.	長径 (cm)	深さ (cm)	ピットNo.	長径 (cm)	深さ (cm)	ピットNo.	長径 (cm)	深さ (cm)	ピットNo.	長径 (cm)	深さ (cm)
P 1	40.0	27.0	P 2	37.0	58.0	P 3	50.0	16.0	P 4	48.0	20.0	P 5	49.0	27.0

第58表 第10号住居跡出土復元土器観察表 (第143図)

番号	器高 (cm)	口径 (cm)	最大径 (cm)	底径 (cm)	備考	番号	器高 (cm)	口径 (cm)	最大径 (cm)	底径 (cm)	備考
143-1	[25.2]	(54.4)	(56.0)	-	50%	143-3	[9.3]	-	(19.8)	-	20%
2	[20.6]	(36.2)	(37.2)	-	30%	4	[31.8]	-	(29.8)	-	30%

部を沈線で区画し、胴部に条線文を施文する。

3は胴部に上端が連結する逆「U」字状懸垂文を垂下し、地文に単節R L縄文を充填施文する。

4はキャリパー形土器の胴部で、沈線格子目文を地文として無文の懸垂文を垂下する大型深鉢形土器である。

5～7は流れ込みの勝坂式土器で、5が古段階、6は新段階、7は終末段階に比定されよう。

8～18は加曾利E III式キャリパー形深鉢形土器で、8～15は口縁部破片である。8、12、15は平口縁で、9～11は4単位の波状口縁と思われる。10は胴部地文に条線文、14は口縁部区画内に沈線文を施文する。

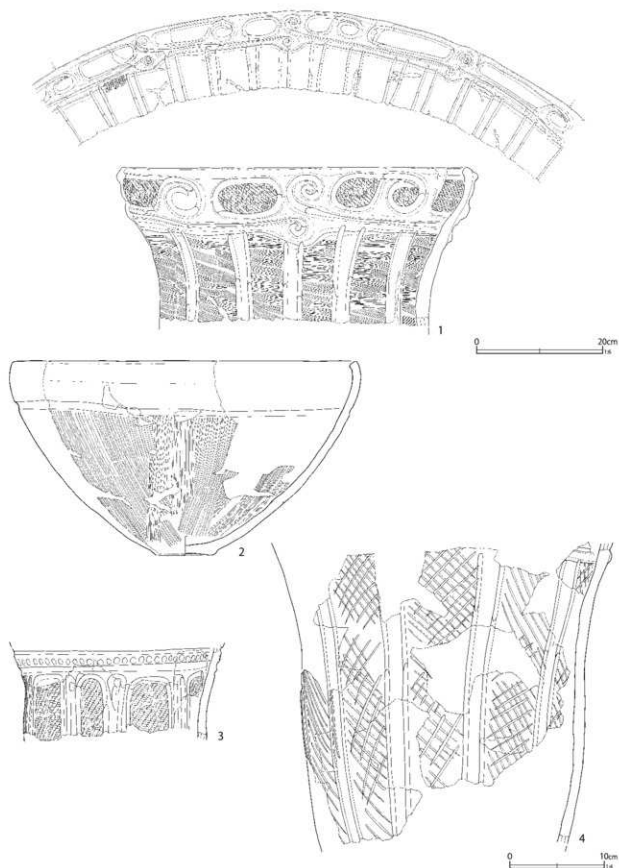
16～18は磨消懸垂文を施文する胴部破片で、16は単節L R縄文、17、18は単節R L縄文を施文する。19、20は4と同一個体と思われ、地文に沈線格子目文を施文する。17は刻み降帯懸垂文を垂下し、地文に沈線状格子目文を施文する曾利式系土器である。24は3と同一個体である。

22は胴部が大きく括れるキャリパー形の深鉢で、2列の円形刺突列で無文の口縁部を区画し、胴部に縦位の単節R L縄文を施文する。

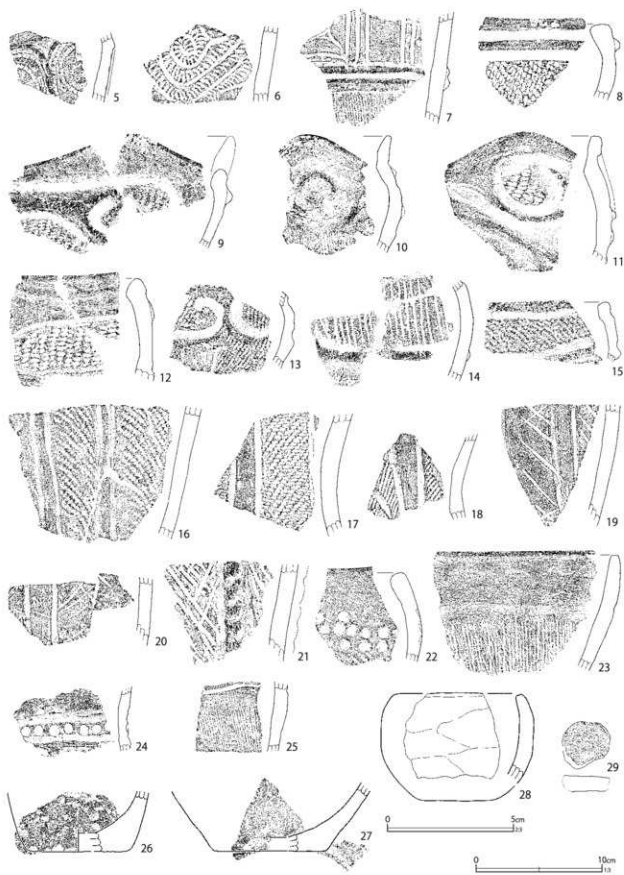
23は無文の口縁部を区画する浅鉢で、胴部に条線文を施文する。25も同様であるが、あるいは連弧文土器の可能性もある。

26、27は無文の底部である。

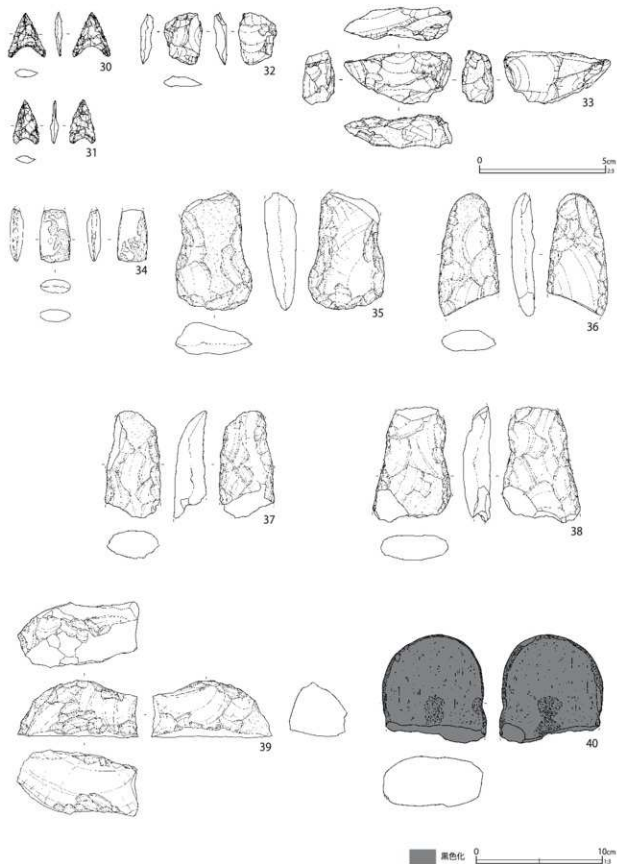




第143図 第10号住居跡出土遺物(1)



第144图 第10号住居跡出土遺物(2)



第145図 第10号住居跡出土遺物(3)

第59表 第10号住居跡出土石器観察表 (第145図)

番号	器種	分類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
145 - 30	石鏃	I 2①	チャート	1.8	1.5	0.3	0.4	
31	石鏃	I 2①	黒曜石	1.7	1.0	0.3	0.3	
32	スクレイパー	III ①	黒曜石	2.1	1.5	0.5	1.4	
33	石核	①	黒曜石	2.1	4.3	1.3	10.1	
34	磨製石斧	II ②イ	緑色岩	3.2	1.8	0.8	7.6	小形
35	打製石斧	III 2②イ	ホルンフェルス	[9.3]	6.0	2.5	154.1	
36	打製石斧	III 2②イ	砂岩	[9.7]	4.8	1.8	96.6	
37	打製石斧	III 2②ア	ホルンフェルス	[8.5]	4.4	2.6	102.2	
38	打製石斧	IV ②ア	ホルンフェルス	[9.2]	6.2	2.1	137.9	
39	礮器	①イ	ホルンフェルス	5.2	9.6	4.5	255.8	
40	磨石	II 1-3②ア	安山岩	[8.6]	8.3	4.0	414.8	表裏面全部黒色化

土製品は28の小形の鉢と、29の土器片を利用した土製円盤が出土した。

石器類は30～40が出土した。

30、31は石鏃で、30は両側縁が鋸歯状である。

32はスクレイパーで、両側縁に刃部を有する。

33は石核である。

34は小型の定角式磨製石斧である。

35～38は打製石斧である。35～37は撥形を、38が分銅形を呈する。35のみ刃部が残存しており、両刃である。

39は礮器である。

40は磨石で、正面及び裏面の中央に2個1対の凹痕を有する。被熱の影響により全面が黒色化している。

#### 第11号住居跡 (第146図～第150図)

S-9区に位置する。南側で第10号住居跡と重複しており、本住居跡の方が古い。

住居跡の平面形は径4.73m程の円形を呈し、確認面から床面まで0.45m程の深い掘り込みとなっている。壁は直線的に立ち上がっており、床面から12～15cmの溝が壁の直下を全周する。

柱穴は17基が検出された。覆土、重複状況、深さ及び配置から、不明瞭ではあるが主柱穴と思われるものは2種に区分が可能である。本遺構の最終段階のもので、壁溝に伴うと思われるのがP1～5の一群で、やや不整の5本柱となる。もう一

つがP6～8の一群でP1～5より古いと思われる。壁溝は伴わないが、P2・4が重複していれば一回り小形の5本柱となる。他の柱穴の組み合わせも考えられ、壁溝を変えずに、少なくとも1回の建て替え、または2回の建て替えが想定される。

主柱穴の深さは、P1=66cm、P2=72cm、P3=89cm、P4=57cm、P5=72cm、P6=60cm、P7=45cm、P8=54cmである。

炉は埋壘炉で、住居跡の中央やや北寄りに存在する。長径1.68m、短径1.50m程の不整形な掘り込みの中央に、深鉢形土器の上半部を埋設したもので、土器に接する地山部分は被熱のため焼土化している。しかし、炉の覆土に炭化物・焼土粒子の混入は少なく、炉底面にも顕著な被熱の痕跡は認められなかった。

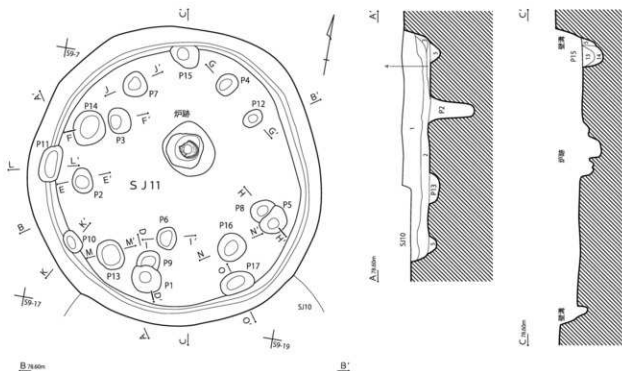
埋壘は検出されなかった。

最新段階の住居跡は、炉体土器から加曽利E I式古段階の所産と考えられる。

遺物は第148図～第150図の石器類、土製品類、石器類が出土した。

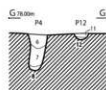
石器類は1～27である。1は炉体土器である。キャリパー形の平縁深鉢で、幅狭の口縁部文様帯を刻み隆帯で区画し、2本隆帯の渦巻文を伴う単独の横「S」字状文を4単位に配し、区画文の間には三叉文や沈線文を施文する。この横「S」字状文はクランク文状に施文される部分がある。

頸部は地文の撚糸文Lを磨り消して無文帯を



B 0.30m

B'



SJ11

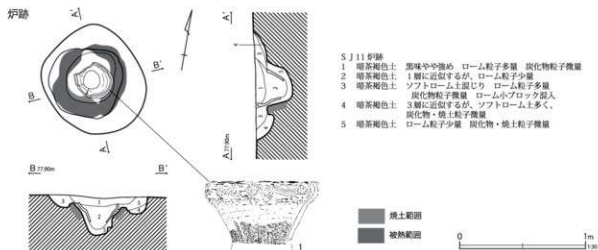
- 1 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物少量 しまり良い
- 2 暗褐色土 ソフトローム混じり ローム粒子多量 炭化物・ローム小ブロック少量 しまり良い
- 3 褐色土 ローム粒子・ソフトローム多量
- 4 褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量
- 5 暗茶褐色土 ソフトローム土・ローム粒子多量 焼土粒子微量

SJ11ピット

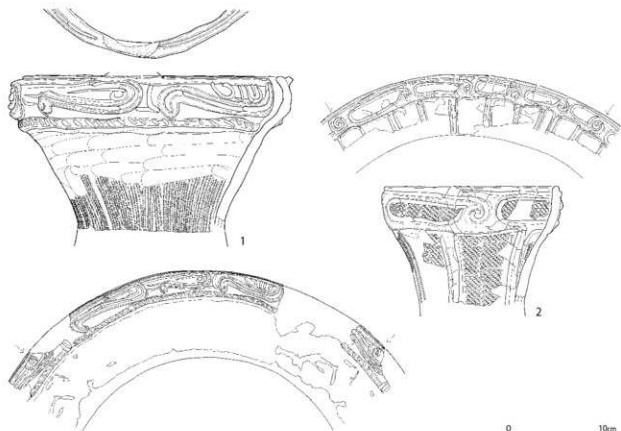
- 6 暗茶褐色土 ローム粒子多量 ソフトローム土・炭化物粒子少量
- 7 暗茶褐色土 ローム粒子・ソフトローム土多量 ローム小ブロック混入
- 8 暗黄褐色土 7層に近似するが、ソフトローム土多く黄色みを帯びる
- 9 暗茶褐色土 ローム粒子多量 炭化物・焼土粒子微量
- 10 暗茶褐色土 9層をベースにローム小ブロック少量含む
- 11 暗茶褐色土 ソフトローム土混じり ローム粒子少量 ローム小ブロックを混入
- 12 暗茶褐色土 11層をベースにローム粒子多量
- 13 暗茶褐色土 ソフトローム土混じり ローム粒子少量 ローム小ブロックを混入
- 14 暗茶褐色土 13層に近似するが、ソフトローム土多く混入
- 15 暗茶褐色土 ソフトローム土混じり 炭化物・焼土粒子微量

0 2m  
1:100

第146図 第11号住居跡(1)



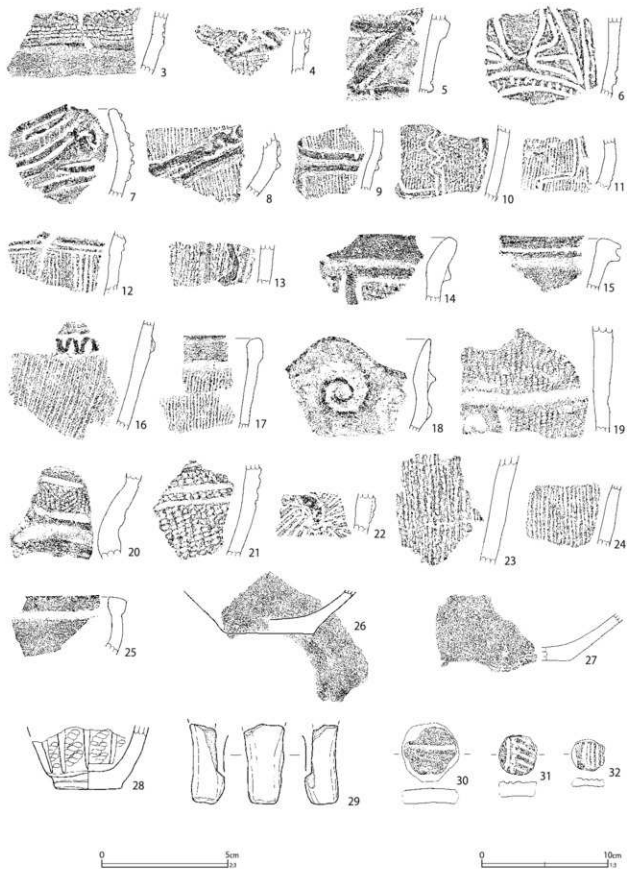
第147図 第11号住居跡(2)



第148図 第11号住居跡出土遺物(1)

第60表 第11号住居跡柱穴計測表(第146図)

ピットNo	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo	長径(cm)	深さ(cm)
P 1	48.0	66.0	P 2	40.0	72.0	P 3	41.0	89.0	P 4	36.0	57.0	P 5	47.0	72.0
P 6	36.0	60.0	P 7	39.0	45.0	P 8	40.0	54.0	P 9	(25.0)	16.0	P 10	(36.0)	21.0
P 11	(55.0)	27.0	P 12	35.0	10.0	P 13	50.0	11.0	P 14	58.0	12.0	P 15	(46.0)	33.0
P 16	46.0	23.0	P 17	56.0	18.0									



第149图 第11号住居跡出土遺物(2)



第150図 第11号住居跡出土遺物(3)

第61表 第11号住居跡出土復元石器観察表(第148図)

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備考
148-1	[16.4]	(27.0)	(29.2)	-	50%
148-2	[12.6]	(18.0)	(19.0)	-	40%

第62表 第11号住居跡出土石器観察表(第150図)

番号	器種	分類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
150-33	磨製石斧	I②イ	緑色岩	13.4	5.6	3.7	361.9	
34	打製石斧	II2②イ	頁岩	[8.8]	4.3	2.7	117.4	
35	打製石斧	II2②ア	ホルンフェルス	[5.7]	4.2	2.2	64.1	
36	打製石斧	V②イ	砂岩	[9.1]	[6.9]	[3.0]	254.4	
37	打製石斧	III2②イ	砂岩	[8.1]	[5.1]	1.8	74.1	
38	スクレイパー	II1①イ	ホルンフェルス	4.8	9.2	1.9	84.4	
39	敲石	III1-3②イ	砂岩	[8.4]	[4.4]	3.1	162.3	

生成している。

2は磨消懸垂文を有する加曾利EⅢ式のキャリバー形深鉢で、口縁部に渦巻文と融合する区画文を5単位に配している。出土位置を明確にできないが、第10号住居跡との重複部分からの出土の可能性が高い。

破片の3～6は流れ込みの勝板式で、3～5は古段階、6は新段階であろう。

7～14は加曾利EⅠ式のキャリバー形深鉢で、8、9は2本隆帯でモチーフを描き、10～12は半截竹管状工具による2本沈線でモチーフを描くものである。地文は全て撫糸文である。13は隆



帯懸垂文を垂下する胴部破片である。14は口唇部が外反する器形で、口縁部に隆帯の区画文を施すものと思われるが、加曾利EⅡ式になる可能性もある。

15は突出する口唇部に沈線を巡らし、17は口縁部を幅狭な段帯部とするものである。16は胴部区画隆帯に交互刺突文を施している。勝坂式終末期のものであろう。

18～20は加曾利EⅢ式土器で、18は4単位波状口縁で波頂部に渦巻文を施文する口縁部破片である。19、20は頸部から胴部にかけての破片である。

21は連弧文土器の胴部破片、22は曾利式系土器の胴部破片である。23、24は撫系地文の胴部破片である。

25は口縁を沈線で区画する浅鉢の口縁部、26、27は底部破片である。

土製品では、28はキャリパー形土器のミニチュアで、底部破片である。

29は土偶の脚部と思われ、右脚部であろうか。

30～32は土器片を利用した土製円盤である。

石器類は第150図33～39が出土した。

33は乳棒状の磨製石斧で、刃部には刃こぼれが認められる。

34～37は打製石斧である。34が短冊形、37が撥形を呈する。36は両側縁の挟り部分に摩耗が認められる。37の刃部は片刃である。

38はスクレイパーで、横長剥片を素材として用いており、素材剥片の末端を刃部に使用している。

39は長楕円形の自然礫を用いた敲石である。

## 第12号住居跡（第151図～第163図）

R-9・10区位置する。南側に第13号住居跡と重複し壁の一部が壊されているが、第13号住居跡の掘り込みが浅いため大きな影響は受けていない。また、北側に僅かに第19号住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。

住居跡の平面形は長径5.30m、短径4.97m、深さ0.5mで、僅かに南北に長い円形を呈する。

壁溝は南東側の壁際で2本検出され、外側の壁溝1の方が新しい。柱穴は12基が検出された。覆土、重複状況、深さ及び配置から主柱穴と思われるものは2種類に区分された。主柱は5本と思われ、近接する柱穴をまとめると、P1とP6、P2とP7、P3とP10、P4とP5、P8とP9とP12が組となる。P8とP9とP12のみが3本となり組み合わせが難しくなる。覆土等から確実に組となり壁溝1に伴うのはP1～4の4基であるが、覆土からでは5本目がP8かP9かを定かたできない。位置から言えば、P9が理想的である。また、古いと思われる柱穴の組はP5～7とP10であるが、5本目がP8となるのが理想的である。

主柱穴の深さは、P1=71cm、P2=70cm、P3=66cm、P4=57cm、P5=63cm、P6=54cm、P7=62cm、P8=53cm、P9=51cm、P10=61cmである。

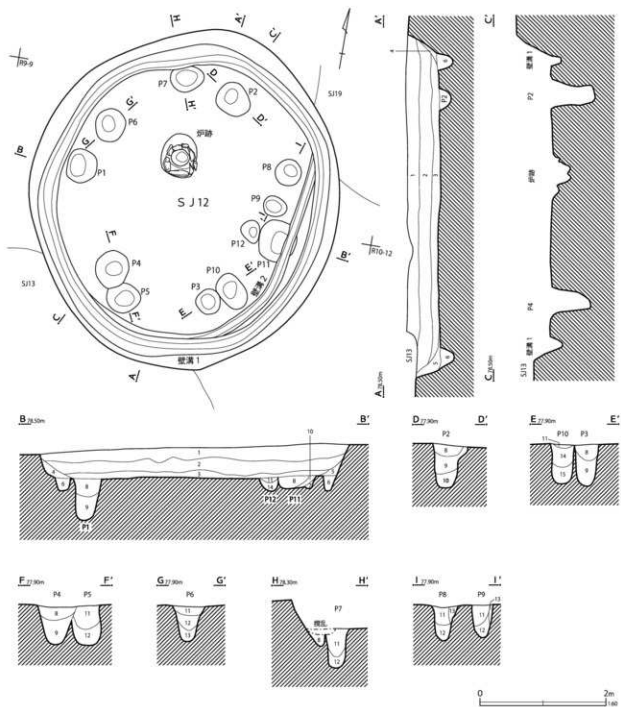
炉は住居跡中央北寄りに位置しており、6個の礫（うち2個は割れた状態で出土）を方形に並べた石囲炉で、下部に深さ25cm程の炉体土器を抜き去ったような掘り込みが存在していた。なお、被熱による焼土が南側に広がっていることから、古い段階の炉の可能性もある。また、炉石には赤や緑など色調の目立つものが多く用いられているようである。

埋甕は検出されなかった。

住居跡は遺構に付属する土器が存在しないため、時期を決定し得ないが、覆土中の土器群からおよそ勝坂式終末期の所産と推定される。

遺物は第156図1～第163図79の土器類、土製品類、石器類が吹上パターン状に出土した。

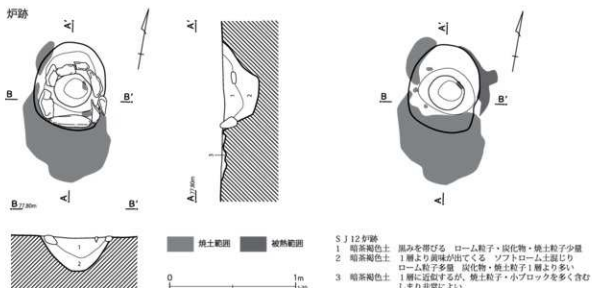
土器類は1～58である。1は塗文の口縁部が開くキャリパー形の深鉢で、刻み隆帯で区画を行うが、胴部の区画内の簡略化した文様を施文する。



- S J 12
- 1 暗茶褐色土 ソフトローム土混じる ローム微粒子・炭化物粒子少量
  - 2 暗茶褐色土 風みを帯びたローム土を多く混入 ローム粒子多量
  - 3 暗茶褐色土 炭化物・焼土粒子少量
  - 4 暗茶褐色土 1・2層より黄色みを帯びる ローム粒子多量 炭化物・焼土粒子少量
  - 5 暗茶褐色土 ソフトローム土・ローム土粒子多量 炭化物粒子微量
  - 6 暗茶褐色土 ローム土を混入し、黄色みを帯びる ローム粒子多量 炭化物粒子微量
  - 7 暗茶褐色土 ソフトローム土混じる ローム微粒子多量 炭化物粒子少量 (層溝 1)
  - 8 暗茶褐色土 6層より黄色みを帯びる ローム微粒子多量 炭化物粒子少量 (層溝 2)

- S J 12 ビット
- 8 暗茶褐色土 ローム粒子多量 炭化物・焼土粒子微量 ソフトローム土混じる
  - 9 暗茶褐色土 8層に近似するが、ソフトローム土の混入多い
  - 10 暗茶褐色土 ソフトローム土主体 ロームブロック多量 炭化物粒子微量
  - 11 暗茶褐色土 やや暗味を帯びる ローム微粒子多量 炭化物粒子微量
  - 12 暗茶褐色土 11層に近似するが、ローム小ブロックも少量含む
  - 13 暗茶褐色土 ソフトローム土を多量 ロームブロック少量
  - 14 暗茶褐色土 ローム土主体 ロームブロック多量 炭化物粒子微量
  - 15 暗茶褐色土 ローム土を主体 しまり良い

第151図 第12号住居跡(1)



第152図 第12号住居跡(2)

第63表 第12号住居跡柱穴計測表(第151図)

ピットNo	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo	長径(cm)	深さ(cm)
P 1	52.0	71.0	P 2	56.0	70.0	P 3	57.0	66.0	P 4	62.0	57.0	P 5	53.0	63.0
P 6	51.0	54.0	P 7	53.0	62.0	P 8	42.0	53.0	P 9	39.0	51.0	P 10	39.0	61.0
P 11	65.0	20.0	P 12	37.0	21.0									

2～5は胴部に燃糸文や縦走縄文を施文する円筒形土器で、2は低い波状口縁を呈し、縦位隆帯で胴部を4分割して、区画内に入組渦巻文と「X」字状文を交互に配し、余白に三叉文を充填施文する。地文は燃糸文Lである。

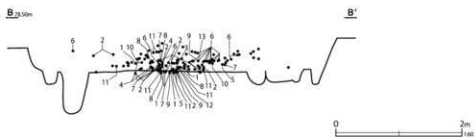
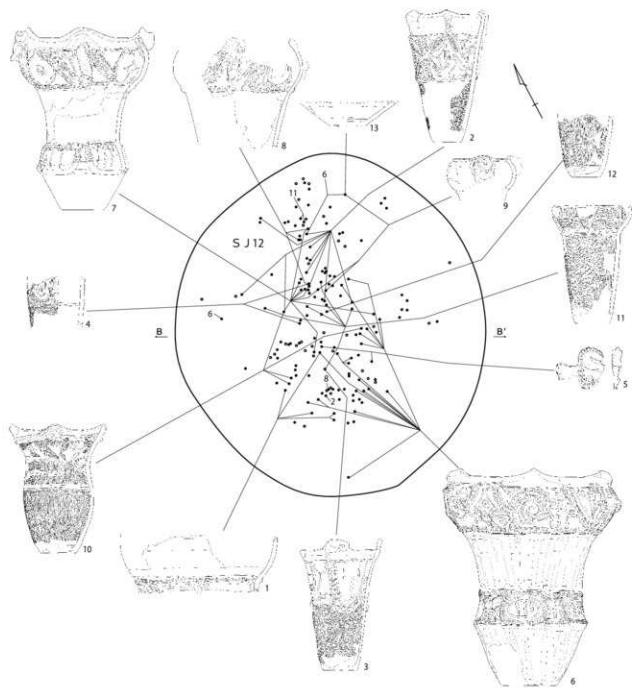
3は口唇上から蛇体文が垂下する構成で、デフォルメした左向き蛇の頭部を口縁部に表現し、尾の先と思われる部分に口を開いたようなモチーフを2単位に表現している。このモチーフは尾の先の表現とは思われず、この文様の基部には目もしくは頭を表現したと思われる隆帯の円形文を配置しており、2匹の蛇を表現したものであろうか。蛇頭表現の対となる反対側の口唇部には、蛇が尾を掛けている様な表現を施している。地文は燃糸文Lである。胴部地文はRLの縦走縄文である。

4も同様な構成と思われ、地文に0段多条RLの縦走縄文を施文する。

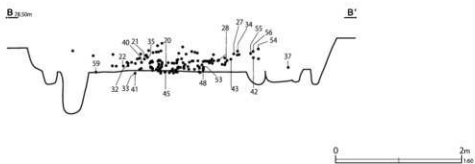
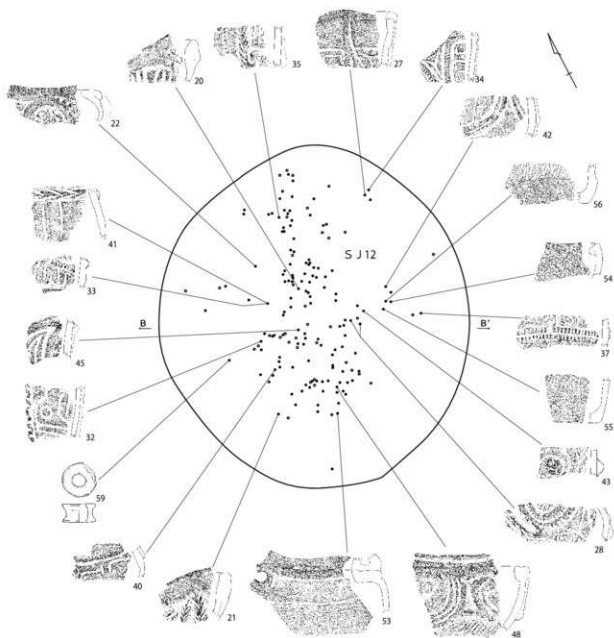
5は3と同様に、口縁部にデフォルメした蛇頭を表現している。

6～8は、内湾する口縁部が開き、無文の胴部が括れ、底部が張り出すキャリパー形の深鉢で、多喜窪タイプ、もしくは加能里タイプと呼ばれる深鉢である。6は非常に大形の土器で、緩い波状高から無文の胴部が括れ、底部の張り出す位置がやや高い器形である。口縁部には刻み隆帯で円形文や渦巻文を連結するモチーフを描き、モチーフ間の余白に三叉文や渦巻文、上下交互の差し切り文を施文する。菱形文の隆帯が合わさる先端に、切れ目を有する口状の表現を施している。底部の張り出し部には楕円区画文を4単位に配している。この4単位の楕円区画文は大きさが異なるが、区画内や区画の間に、差し切り文の本数や渦巻文の有無など、それぞれ異なる沈線モチーフを充填施文して対称性を外している。

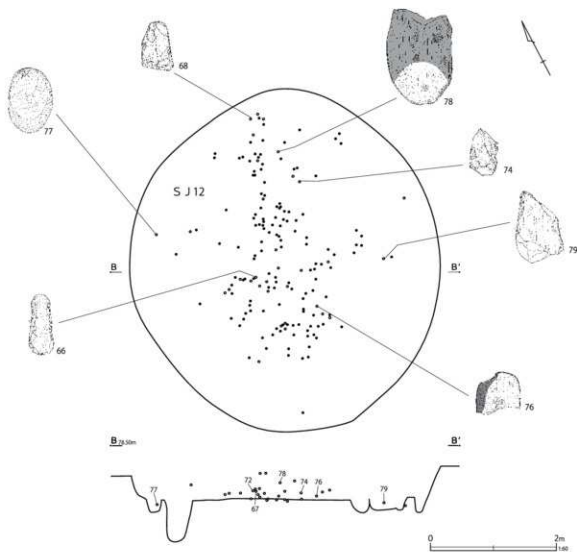
7は接合しない同一個体の復元図である。口縁部は緩やかな4単位の波状を呈し、波底部下に円盤状の低隆帯を配して、2本刻み隆帯で連結するモチーフを構成している。円盤状低隆帯の縁には



第153图 第12号住居跡遺物出土状況(1)



第154图 第12号住居跡遺物出土狀況(2)



第155図 第12号住居跡遺物出土状況(3)

刻みを施し、中央部には円形文や菱形文を施し、対称性を崩している。連結する隆帯には交互刺突と「ハ」字状刻みを施している。底部には背割隆帯で楕形状の区画文を施すものと思われ、区画内に上下差し切りの沈線文を施す。

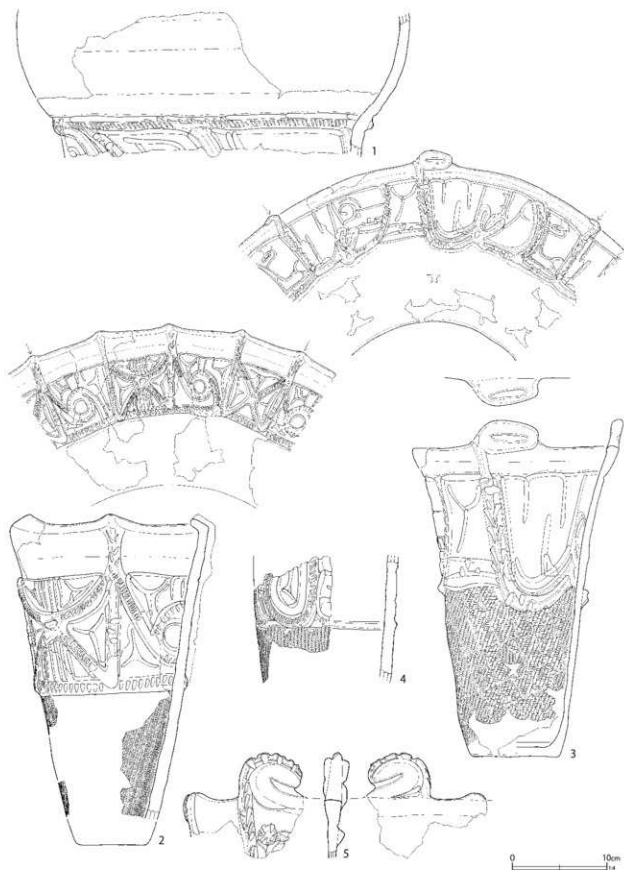
8は7と類似するモチーフを描き、器形等から同一個体になる可能性もある。

9は内湾する無文の口縁部が開く器形で、胴部は不明である。口縁部に大きく渦を巻く隆帯を配し、胴部まで垂下させているようである。

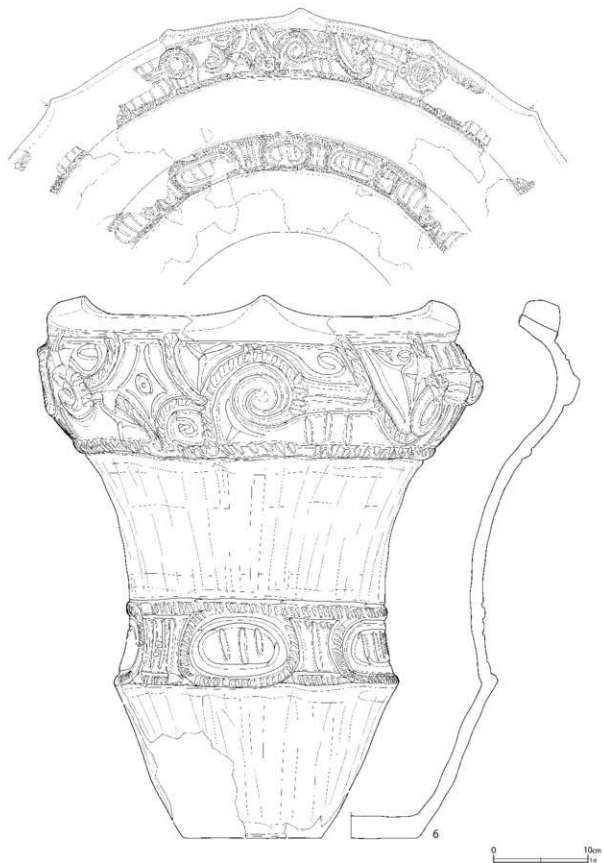
10～12は器面全面に摺糸文を施す土器群である。10は頭部で括れ、4単位の口縁部が開

く器形を呈するもので、波頂部に隆帯の渦巻文を配する。胴部は2本沈線で区画し、上半部に2本沈線の横位のクランク状に垂下する曲線文を描いている。口縁部下には、単沈線の「U」字状モチーフを連ねている。東関東系の要素と大木系の要素が窺われる。

11は内湾する口縁部が開くキャリパー形深鉢で、口縁部にクランク状の区画文を施す。口縁部はこのクランク状隆帯で、文様帯を上下に区画しているようであり、北関東の大木8a式並行期の土器群の口縁部構成に類似する。加曾利EⅠ式古段階に比定される。

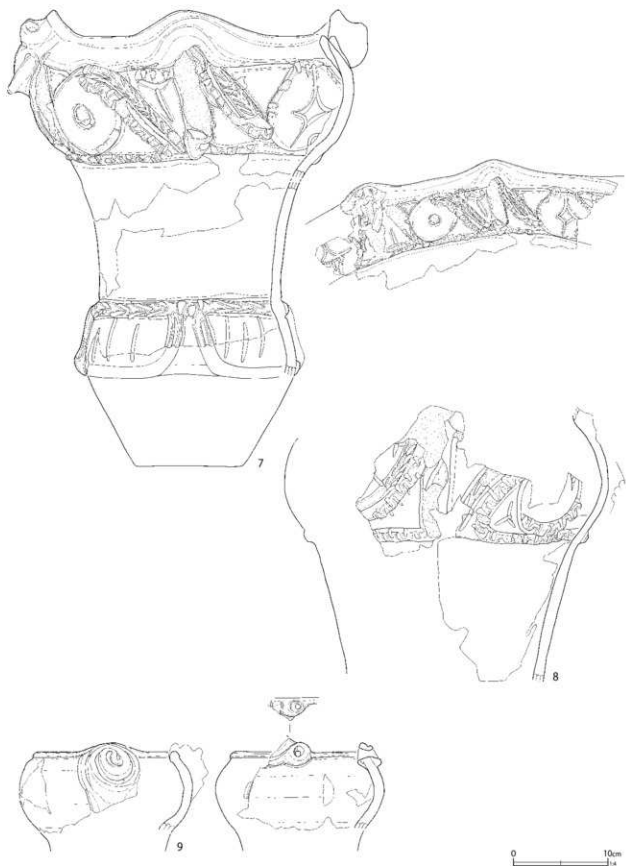


第156図 第12号住居跡出土遺物(1)

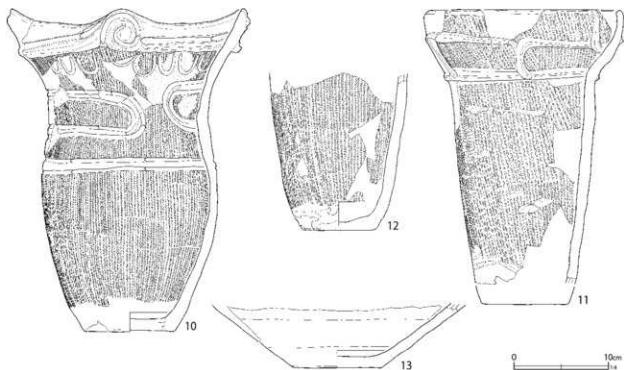


第157图 第12号住居跡出土遺物(2)





第158図 第12号住居跡出土遺物(3)



第159図 第12号住居跡出土遺物(4)

第64表 第12号住居跡出土復元土器観察表(第156～159図)

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備考
156-1	[15.3]	-	(40.8)	-	20%
2	[32.3]	(18.0)	(20.2)	-	80%
3	35.5	(20.4)	(22.0)	9.0	完形
4	[13.2]	-	(14.8)	-	20%
5	[11.6]	-	-	-	10%
157-6	57.3	43.8	-	(14.8)	70%
158-7	[38.2]	(30.0)	(34.2)	-	40%

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備考
158-8	[29.2]	-	34.2	-	30%
9	[9.9]	(14.8)	(18.4)	-	20%
159-10	[34.0]	(24.6)	(24.8)	-	60%
11	[28.9]	(20.4)	(21.2)	-	50%
12	[16.5]	-	[14.6]	7.6	40%
13	[6.6]	-	(27.2)	9.3	20%

12は燃糸文Lを施文する胴部から底部であるが、円筒形土器の可能性もある。

破片では、15、16が勝坂式古～中段階の土器群で、他は大半が勝坂式終末段階に比定される土器群である。

14、18～24、28～30、40は口縁部が内湾するキャリパー形土器の口縁部破片で、交互刻みや「ハ」字状刻みを施した隆帯で区画文を施している。区画内には三叉文をはじめ比較的簡素な充填文を施文している。

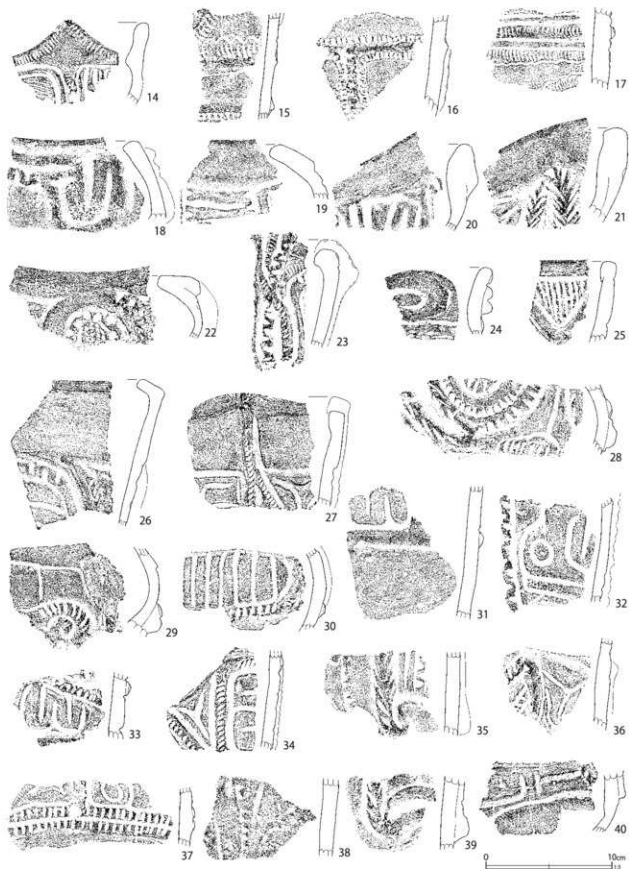
25～27、31～39は円筒形土器と思われ、26、27は口縁部に無文部を区画し、隆帯を垂下するモチーフを施文する。43、45～47は細かな刻みを

施す隆帯でモチーフを描くもので、若干古い要素を有するものと思われる。

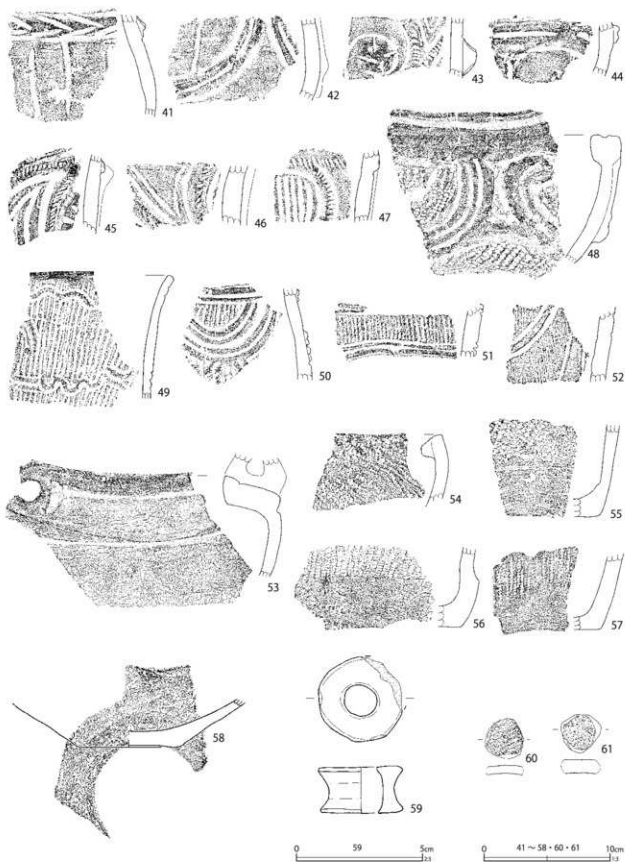
41、42、44は張り出した底部破片である。41は「ハ」字状刻みを施した隆帯で、42は背割隆帯で櫛歯状の区画文を施している。

48～51は加曾利EⅠ式と思われ、52は連弧文土器であろうか。48は口縁部に背割隆帯でモチーフを描き、口唇上に沈線を巡らす。49～51は半截竹管の重複施文による平行沈線で、曲線や波状文、弧線文を描く土器群である。地文は燃糸文である。

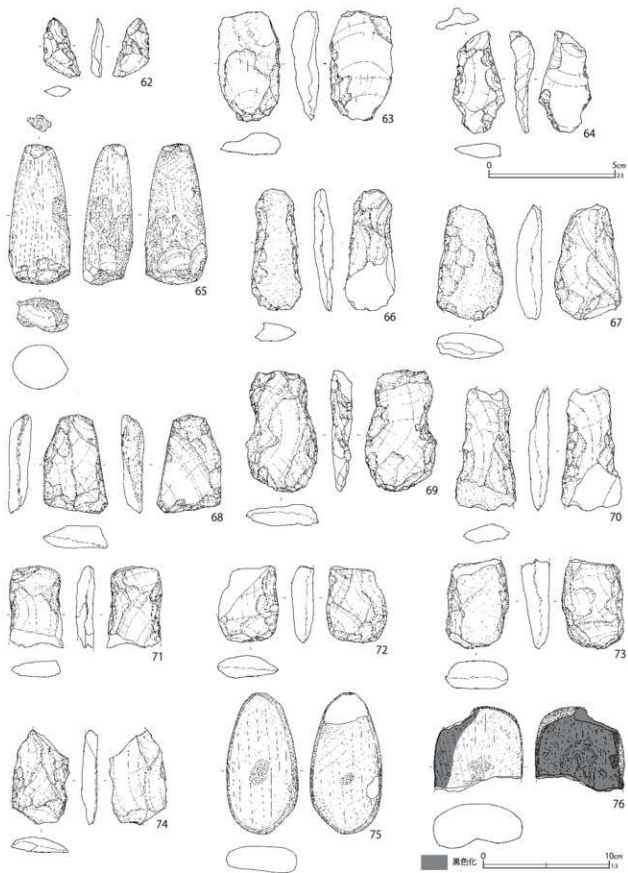
53は橋状把手が付く無文の口縁部で、波状を呈する深鉢の口縁部である。54は口縁部が内面に



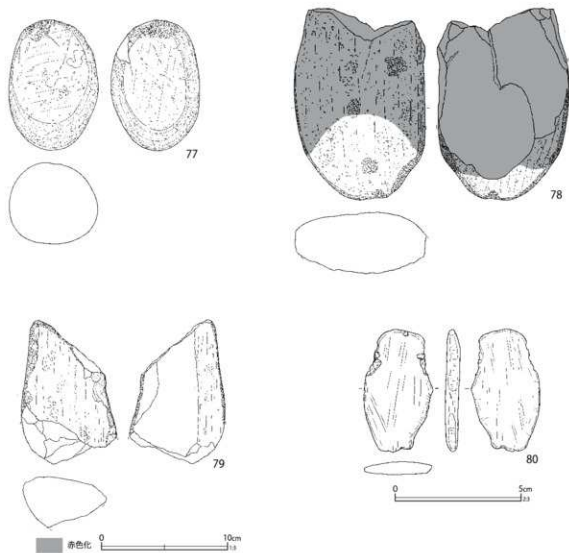
第160图 第12号住居跡出土遺物(5)



第161图 第12号住居跡出土遺物 (6)



第162図 第12号住居跡出土遺物(7)



第163図 第12号住居跡出土遺物(8)

突出する深鉢で、地文は単節RLである。56は底部が小さく張り出し、地文に0段多条RLの縦走縄文を施文する。57も0段多条RLの縦走縄文を施文する底部である。58は浅鉢の底部である。

土製品では、59は鼓形の耳飾りで、中央部に幅広の穴を有する。60、61は土器片利用の土製円盤である。

石器は62～79が出土した。

62は石鏃の未成品である。正面右側縁に両面交互剥離を施すことにより石鏃の側面視と先端部を作り出そうとしていることから、未成品と判断した。

63、64はスクレイパーで、特に64は両側縁に

刃部を有する。ともに裏面に主要剥離面を残し、縦長剥片を素材とする。64には打面が残っている。

65は乳棒状の磨製石斧である。上下端部は、欠損した後、敲石として再利用していたと思われる。

66～74は打製石斧である。66～71は擗形を呈する。このうち、刃部が残存しているのは67～70で、67のみが片刃で、他は両刃である。72、73は刃部片で、72が両刃、73が片刃である。

75～78は磨石である。75は磨面が平坦で、周縁には整形が施されている。76も周縁を整形しており、裏面に凹痕を有する。欠損した後、被熱を受け、正面右側縁及び裏面が赤黒くなっている。

第65表 第12号住居跡出土石器観察表(第162・163図)

番号	器種	分類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
162 - 62	石鏃	Ⅲ①	チャート	2.3	1.5	0.5	1.1	
63	スクレイパー	Ⅱ2①	チャート	4.4	2.5	1.1	11.1	
64	スクレイパー	Ⅱ2①	チャート	4.0	2.1	1.0	5.4	
65	磨製石斧	I①イ	緑色岩	11.2	4.9	4.0	320.5	
66	打製石斧	Ⅲ2②ア	ホルンフェルス	9.7	[3.9]	1.5	57.0	
67	打製石斧	Ⅲ2②イ	ホルンフェルス	[9.1]	[5.2]	2.1	113.0	
68	打製石斧	Ⅲ2①イ	ホルンフェルス	7.8	5.1	1.8	83.7	
69	打製石斧	Ⅲ1①イ	頁岩	9.6	5.7	1.7	96.4	
70	打製石斧	Ⅲ2②イ	ホルンフェルス	[9.8]	4.8	1.6	65.4	
71	打製石斧	Ⅲ2②イ	緑色岩	[6.5]	[4.3]	1.4	57.3	
72	打製石斧	Ⅲ2②イ	ホルンフェルス	[6.1]	[4.8]	[1.8]	55.5	
73	打製石斧	Ⅲ2②ア	ホルンフェルス	[7.2]	5.0	2.2	100.2	
74	打製石斧	V②イ	頁岩	[7.5]	[4.5]	1.2	44.9	
75	磨石	Ⅱ1-3①イ	砂岩	11.2	5.7	2.3	201.5	
76	磨石	Ⅱ1-2-3②ア	閃緑岩	[6.8]	7.1	3.6	226.1	表裏面一部黒色化
163 - 77	磨石	Ⅱ1-3①イ	砂岩	10.3	7.1	6.4	663.8	
78	磨石	Ⅱ1-3②ア	砂岩	[15.2]	[10.5]	[5.2]	1139.6	表裏面一部赤色化
79	石皿	IV②イ	緑泥片岩	[11.4]	[7.6]	[4.2]	407.7	砥石・磨石として転用
80	垂飾	①イ	滑石	4.8	2.7	0.6	11.6	

78も75、76同様、周縁部を整形している。また、裏面の大半が剥落しており、被熱によって生じたものと思われる。

79は石皿の破片で、正面に凹痕を有する。破片となった石皿を砥石や磨石として再利用している。

80は垂飾の未成品である。研磨が粗く、穿孔が認められないことから、未成品と判断した。

### 第13号住居跡(第164図～第169図)

R・S-9区に位置する。北側で第12号住居跡と重複するが、本住居跡の方が新しい。平面形は径5.35m、深さ0.30m程の不整形円形を呈する。

壁溝は検出されなかった。柱穴は8基の掘り込みを検出したが、浅いものが多く主柱穴を特定できない。

なお、炉跡の埋土に近い覆土をもつのはP2であるが、同様の深さを有するP3は覆土が大きく異なる。主柱穴の深さは、P2=57cm、P3=43cm、P6=53cmである。

炉は石囲炉で、住居跡中央部北寄りに検出された。チャート系を主体とする6個の礫を使用し、

1.5m×1.3m程の長方形に並べた大型の石囲炉である。深さ20cm程の浅い掘り込みに設置され、炉底面付近は被熱のため硬化している。なお、第12号住居跡と同様、炉石には赤や緑など色調の目立つ石が選ばれて設置されているようである。

埋甕は検出されなかった。

住居跡は出土遺物から加曾利EⅢ式期の所産と判断される。

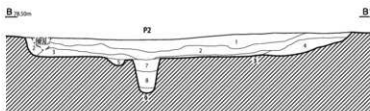
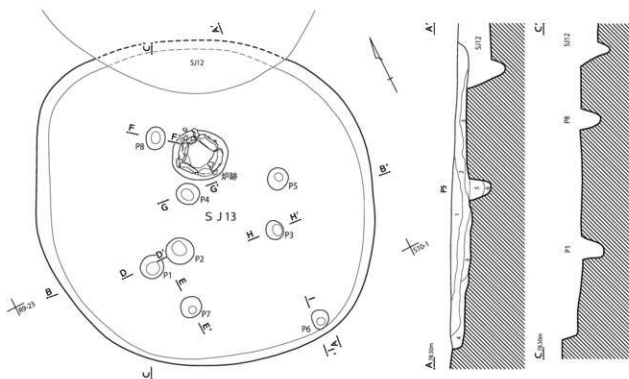
遺物は第165図1、第167図2～第169図36の土器類、石器類が出土した。

土器類は1～27である。1は胴部に磨消懸垂文を有する加曾利EⅢ式キャリパー形深鉢形土器で、覆土より出土した土器である。

破片では1～9が勝版式土器で、2～4は角押文や三角押文を施文する古段階から中段階に比定されよう。

5は口縁部区画内に三叉文と蓮華文を施文するもので、6、7は頸部の楕円区画内に交互刺突を施す並行沈線を充填施文する。

8は刻み隆帯で渦巻文を、9は口縁部の把手から刻みを施した蛇行隆帯を垂下している。5～9



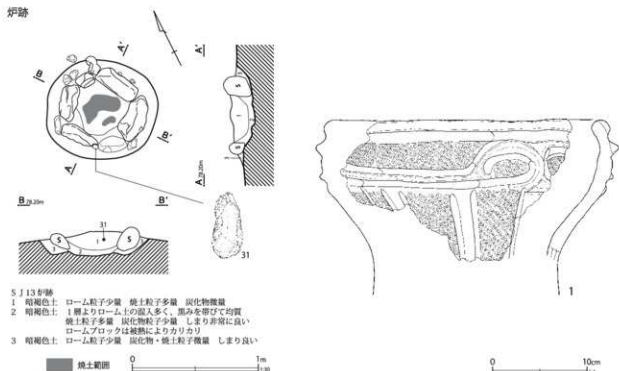
- S J 13
- 1 暗褐色土 ローム粒子・炭化物粒子少量
  - 2 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物粒子少量
  - 3 褐色土 ローム粒子・ソフトローム多量
  - 4 褐色土 ローム小アブロック多量

- S J 13 ビット
- 5 暗茶褐色土 ローム粒子・炭化物粒子少量 しまり悪い
  - 6 暗茶褐色土 5層より黄色みを帯びる ローム粒子・炭化物粒子少量
  - 7 暗茶褐色土 風みを帯びる ローム粒子多量 炭化物粒子微量
  - 8 暗茶褐色土 7層に近似するが、ローム粒子少量
  - 9 暗茶褐色土 ソフトローム土多量
  - 10 風褐色土 ソフトローム土主体に暗茶褐色土を混入 しまり良い
  - 11 暗茶褐色土 ローム粒子多量 炭化物粒子微量
  - 12 暗茶褐色土 ソフトローム土混じる ローム粒子多量 炭化物粒子微量
  - 13 暗茶褐色土 ソフトローム土主体に暗茶褐色土を混入 しまり良い



第164図 第13号住居跡(1)





- 5 J 13 炉跡  
 1 暗褐色土：ローム粒子少量 焼土粒子多量 炭化物微量  
 2 暗褐色土：1層よりローム土の混入多く、黒みを帯びて均質 焼土粒子多量 炭化物粒子少量 しまり非常に良い  
 ロームブロックは融融によりかなり  
 3 暗褐色土：ローム粒子少量 炭化物・焼土粒子微量 しまり良い

第165図 第13号住居跡(2)・出土遺物(1)

第66表 第13号住居跡柱穴計測表(第164図)

ピットNo	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo	長径(cm)	深さ(cm)
P 1	37.0	31.0	P 2	45.0	57.0	P 3	31.0	43.0	P 4	37.0	17.0
P 6	31.0	53.0	P 7	34.0	27.0	P 8	36.0	23.0	P 5	35.0	34.0

第67表 第13号住居跡出土復元土器観察表(第165図)

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備考
165-1	[15.0]	(27.6)	(29.6)	-	20%

は新段階に位置付けられよう。

10～17は磨消懸垂文を有する加曾利EⅢ式のキャリナ形深鉢で、10、11は口縁部、12～14は口縁部から胴部にかけて、15～17は胴部破片である。12、13は比較的幅広の磨消懸垂文を施文する。

18～21は曾利式系土器で、18は頭部で括れ口縁部が開く器形で、口縁部内面が隆帯状に突出し、刻み状の沈線を施文する。口縁部は重弧文を施文し、渦を巻く蛇行沈線を垂下する。

19は重弧文土器であるが、口縁部裏面の突出は少ない。20は唐草文系土器と思われ、地文に沈線を充填施文する。

22、23は条線文を施文する深鉢の胴部破片と思われる。24は連弧文土器の口縁部破片である。

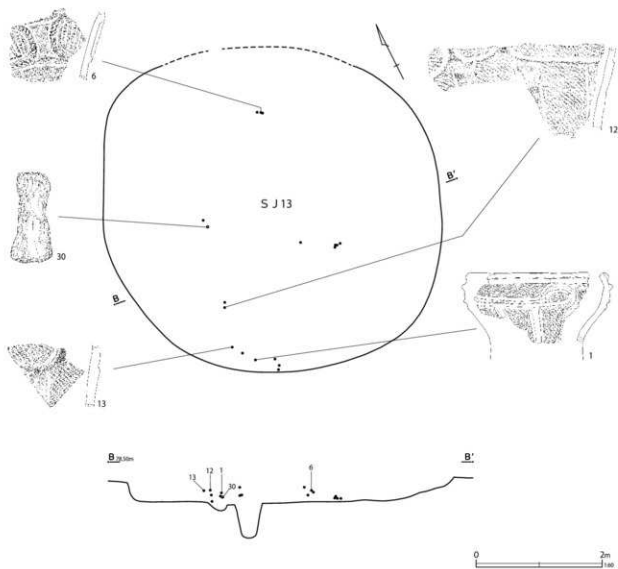
25は無文の口縁部が外反しながら立つ、両耳壺の口縁部であろうか。26は沈線地文上に摘み状の押圧を施した隆帯を垂下させる深鉢の底部である。17は両耳壺の底部であろうか。単節RL縄文を施文する。

石器類は28～36が出土した。

28は石鏃で、平面形は二等辺三角形状を呈する。

29は粗粒石材を素材に用いた大形のスクレイパーである。刃部は両面交互剥離によって作り出されている。

30～34は撥形を呈する打製石斧である。こ



第166図 第13号住居跡(3)

第68表 第13号住居跡出土石器観察表 (第168・169図)

番号	器種	分類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
168 - 28	石織	I 2①	チャート	3.0	1.8	0.4	1.3	
29	スクレイパー	II 1②	砂岩	6.6	[7.8]	2.4	160.7	
30	打製石斧	III 1①イ	ホルンフェルス	14.4	6.6	2.3	249.6	
31	打製石斧	III 2①イ	ホルンフェルス	10.5	4.9	1.4	90.0	
32	打製石斧	III 1②イ	ホルンフェルス	[8.5]	5.5	2.3	122.5	
33	打製石斧	III 2②イ	ホルンフェルス	[9.6]	[8.1]	2.6	189.0	
34	打製石斧	III 2②イ	砂岩	[5.7]	[4.2]	1.4	38.8	
35	三角錐形石器	①イ	ホルンフェルス	15.0	5.4	4.6	358.8	
169 - 36	台石	①イ	砂岩	55.2	18.2	12.9	17000.0	

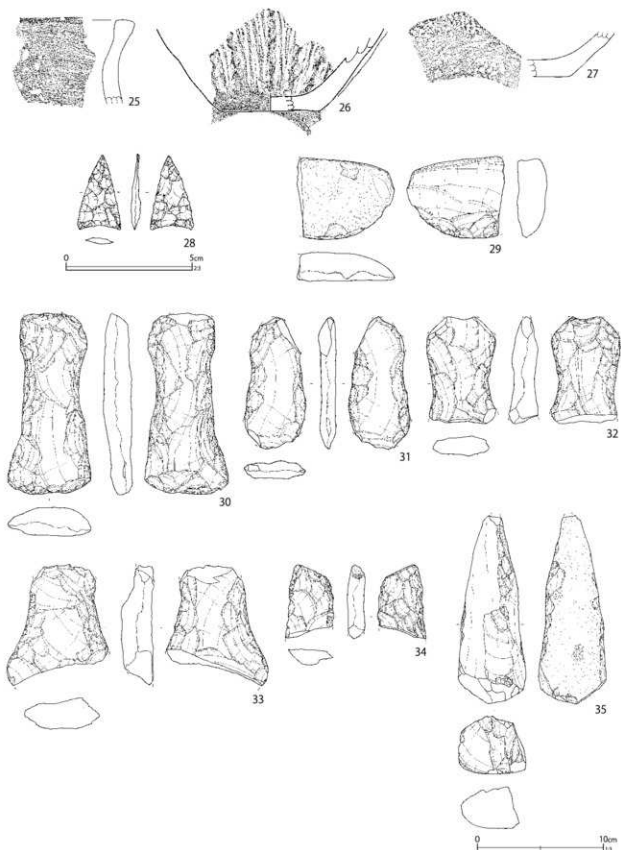
のうち、32、34は基部片、33が基部から刃部にかけての破片である。刃部の残っている

30、31はともに両刃である。

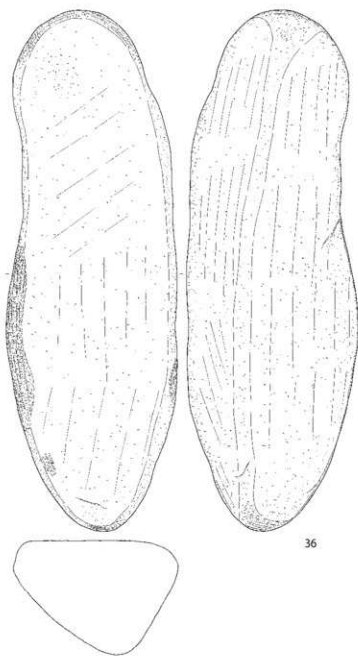
35は三角錐形石器である。両側面とも裏面から



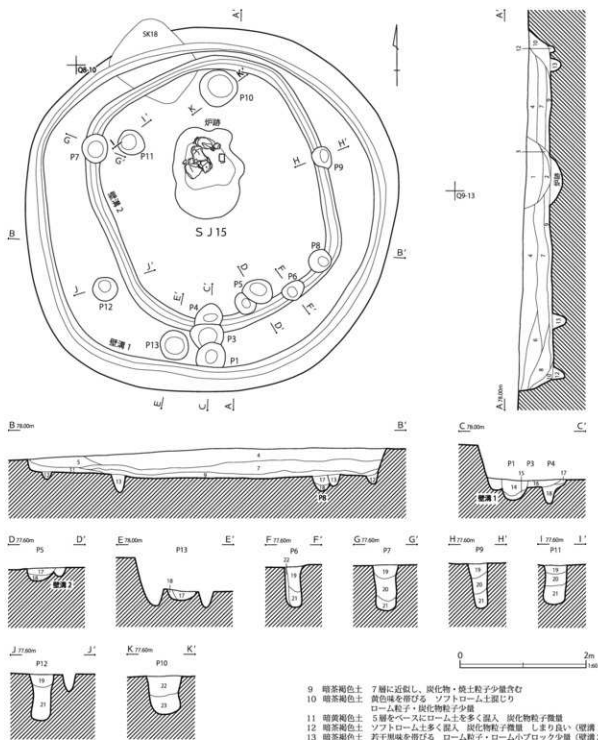
第167图 第13号住居跡出土遺物(2)



第168图 第13号住居跡出土遺物 (3)



第169図 第13号住居跡出土遺物(4)



S J 15

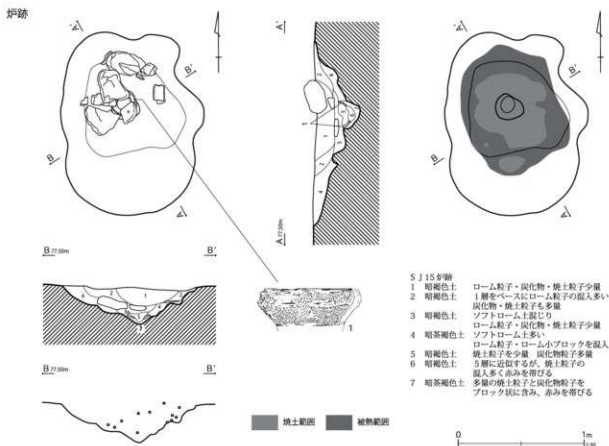
- 1 暗茶褐色土 ソフトローム土混じり ローム粒子・炭化物・焼土粒子少量
- 2 暗茶褐色土 1層に近似するが、ソフトローム土の混入多い
- 3 暗黄褐色土 1層に近似するが、ソフトローム土の混入は2層より多い
- 4 暗茶褐色土 ソフトローム土混じり ローム粒子少量 焼土粒子微量 遺物多く含む
- 5 暗黄褐色土 ローム粒子少量 炭化物粒子微量 しまり良い
- 6 暗茶褐色土 焼土粒子多量 炭化物粒子少量 しまり非常に良い
- 7 暗茶褐色土 4層よりローム土の混入多い 炭化物粒子少量 焼土粒子微量
- 8 暗茶褐色土 7層より黄色みを帯びる ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子少量

- 9 暗茶褐色土 7層に近似し、炭化物・焼土粒子少量含む
- 10 暗茶褐色土 黄色みを帯びる ソフトローム土混じり ローム粒子・炭化物粒子少量
- 11 暗黄褐色土 5層をベースにローム土を多く混入 炭化物粒子微量
- 12 暗茶褐色土 ソフトローム土を多く混入 炭化物粒子微量 しまり良い (破溝 1)
- 13 暗茶褐色土 若干黒味を帯びる ローム粒子・ローム小ブロック少量 (破溝 2)

S J 15 ビット

- 14 暗褐色土 ソフトローム土混じり ローム粒子少量 炭化物微量
- 15 暗褐色土 14層をベースに、ローム小ブロックを多く混入
- 16 暗茶褐色土 ローム粒子多量 ローム小ブロック混入
- 17 暗茶褐色土 16層に近似するが、より黄色みを帯びる
- 18 暗黄褐色土 ソフトローム土中に17層土を混入
- 19 暗褐色土 ソフトローム土混じり ローム粒子多量 炭化物粒子微量
- 20 暗褐色土 19層をベースにソフトローム土を多量に混入 炭化物粒子微量
- 21 暗茶褐色土 19層よりソフトローム土多く、より黄色みを帯びる
- 22 暗茶褐色土 ローム土を多く混入するが、21層よりやや暗く、炭化物粒子微量
- 23 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック少量 炭化物粒子微量

第170図 第15号住居跡(1)



- S J 15 号跡
- 1 暗褐色土 ローム粒子・炭化物・焼土粒子少量
  - 2 暗褐色土 1層をベースにローム粒子の混入多い  
炭化物・焼土粒子も多量
  - 3 暗褐色土 ソフトローム土混じり  
ローム粒子・炭化物・焼土粒子少量
  - 4 暗茶褐色土 ソフトローム土多い  
ローム粒子・ローム小ブロックを混入
  - 5 暗褐色土 焼土粒子を少量 炭化物粒子多量
  - 6 暗褐色土 5層に近似するが、焼土粒子の  
混入多く赤みを帯びる
  - 7 暗茶褐色土 多量の焼土粒子と炭化物粒子を  
ブロック状に含み、赤みを帯びる

第171図 第15号住居跡(2)

第69表 第15号住居跡柱穴調査表(第170図)

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P 1	45.0	31.0	P 2	欠番		P 3	52.0	10.0	P 4	42.0	38.0	P 5	64.0	20.0
P 6	36.0	65.0		P 7	44.0	71.0	P 8	37.0	24.0	P 9	36.0	71.0	P 10	57.0
P 11	42.0	61.0	P 12	40.0	72.0	P 13	47.0	15.0						

剥離を施すことによって整形されている。早期の  
撚糸土器に伴う石器であり、混入と思われる。

36は台石である。上下端部と正面右側縁の一部  
に敲打痕が認められる。特に正面右側縁の敲打痕  
は一定の範囲に集中している。

#### 第15号住居跡(第170図～第181図)

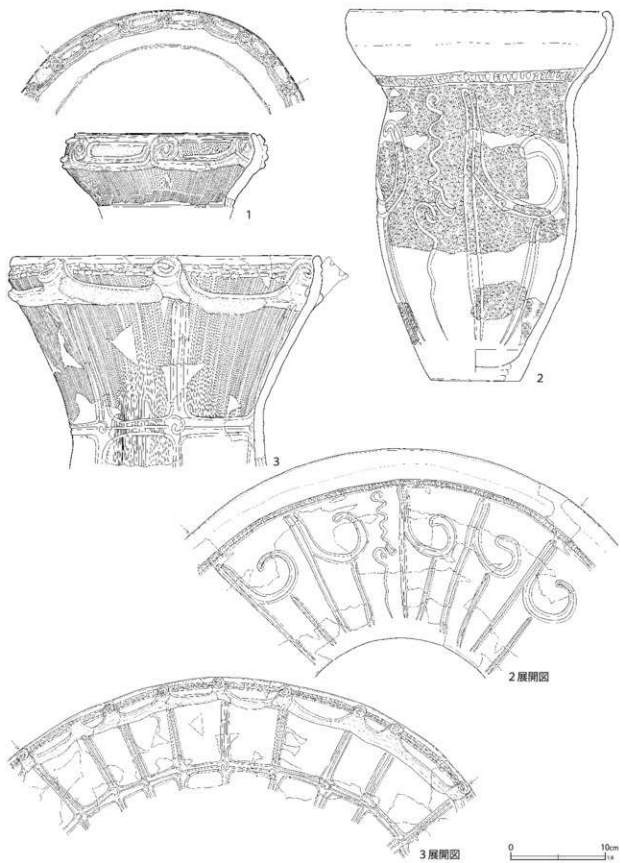
Q-8・9区に位置する。北側の壁の一部を第  
8号土壇によって壊されている。

平面形は径5.76m、深さ0.47m程の不整形  
で、あるいは不整形五角形を呈する可能性もある。

2本の壁溝が二重に検出された。外側の壁溝1  
は壁際を巡るもので、本住居跡の最終段階のもの

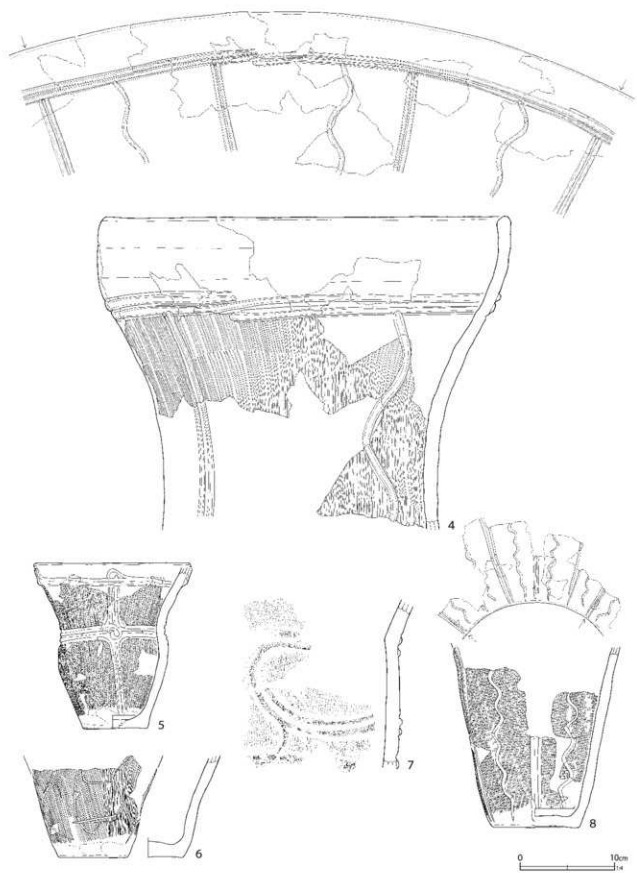
と思われる。内側の壁溝2は、主軸を北東に傾け  
た長方形を呈する。外側の壁溝1より古い段階の  
もので、溝の覆土にロームブロックを含むことか  
ら、埋め戻されたものと判断される。

柱穴は12基検出されたが、覆土、重複状況、深  
さ及び配置から主柱穴と思われるものはP 6、7、  
9～12の6本で、うちP12、7、9、6の4基  
が外側の壁溝に伴うものと思われる。内側の壁溝  
にはP 10、11が対応する可能性があるが、明確  
ではない。プランが隅丸長方形を呈することから、  
4本主柱の可能性が高く、P 10、11に対応する  
柱穴はP 4、8が理想的であるが、壁溝との関係  
で疑問が残る。

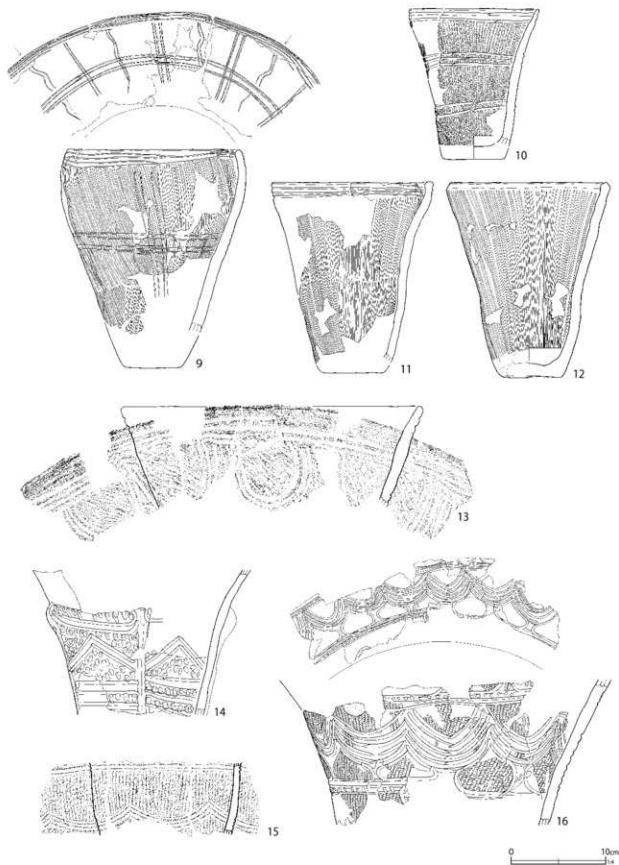


第172図 第15号住居跡出土遺物（1）

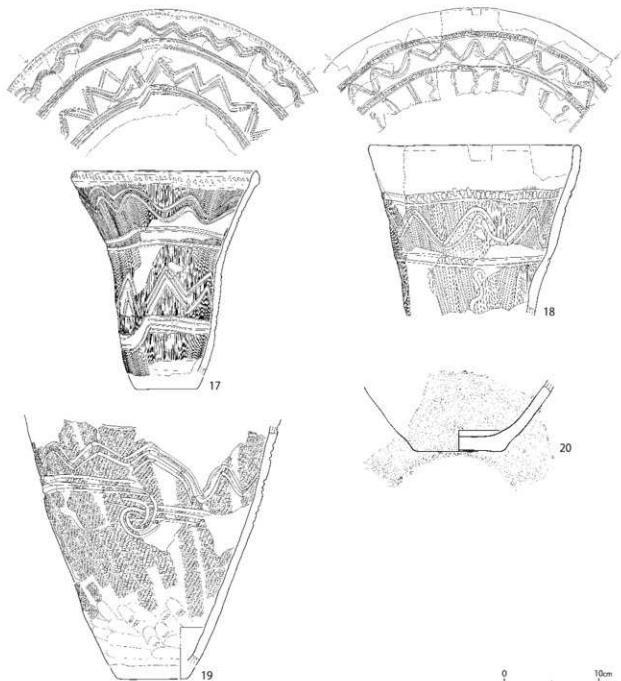




第173図 第15号住居跡出土遺物(2)



第174图 第15号住居跡出土遺物(3)



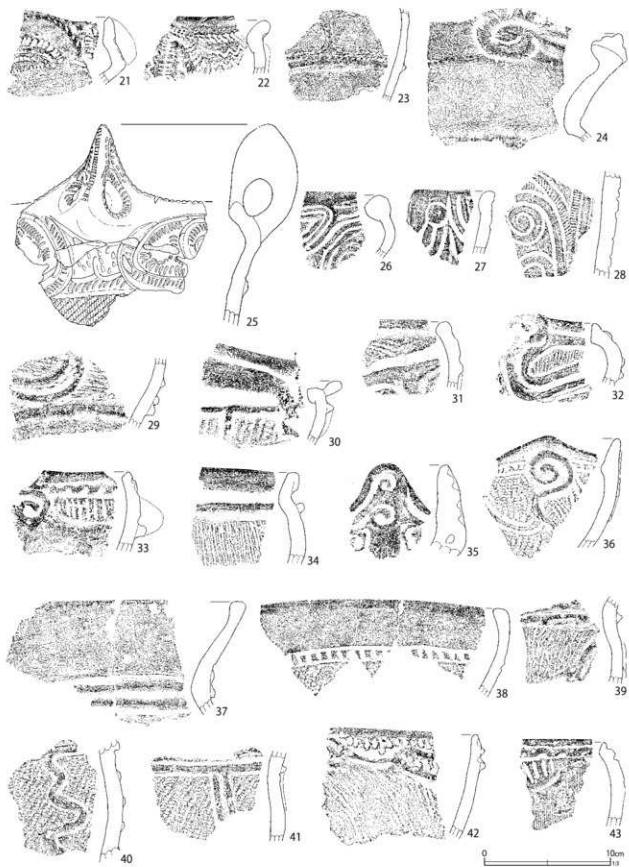
第175図 第15号住居跡出土遺物(4)

主柱穴の深さは、P 6 = 65cm、P 7 = 71cm、P 9 = 71cm、P 10 = 59cm、P 11 = 61cm、P 12 = 72cmである。

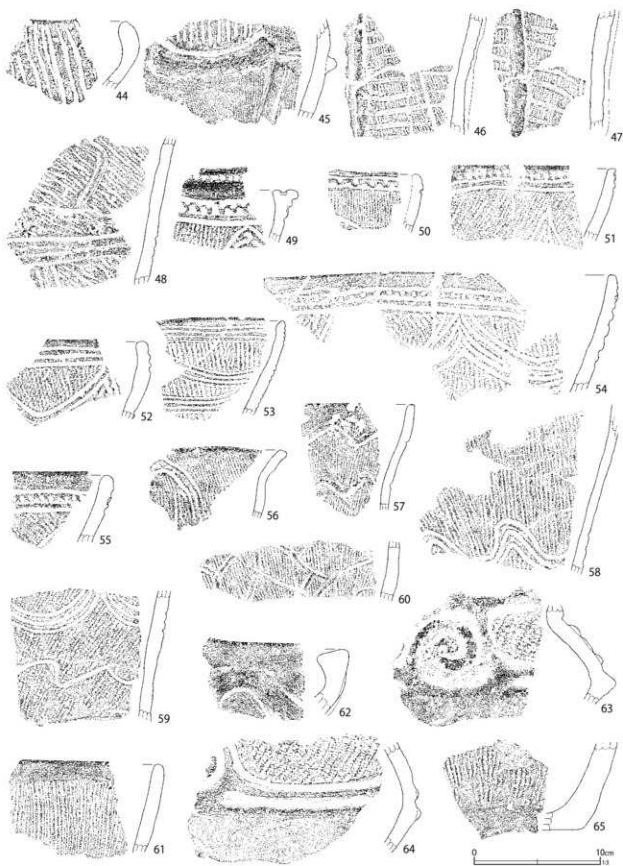
炉は埋甕炉である。中央部やや北寄りの奥壁側に寄った地点に位置する。全体の掘り込みは大きく、1.4m×1.1m程の不整楕円形を呈し、床面から土器上端までの深さも20cm近くある。但し、

被熱による炉底面の硬化範囲は1.0m×0.8m程と一回り小さく、更に土器を中心とした径50cm程の範囲に焼土化が見られ、被熱が顕著である。なお、土器の直上から大形の礫が出土しているが、その出土状況から石囲炉として使われた石ではなく、後から廃棄されたものと判断される。

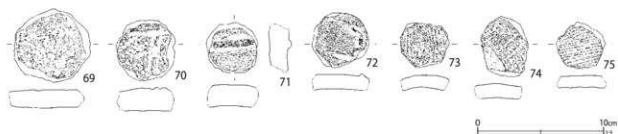
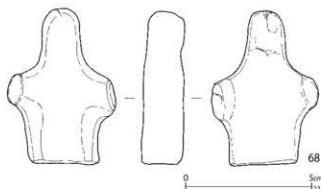
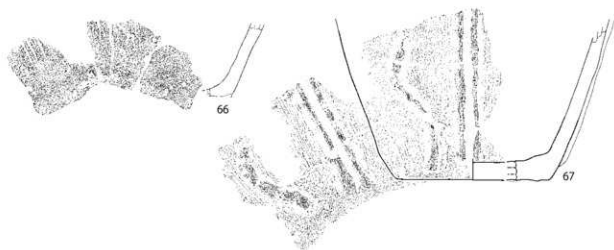
埋甕は検出されなかった。



第176图 第15号住居跡出土遺物(5)



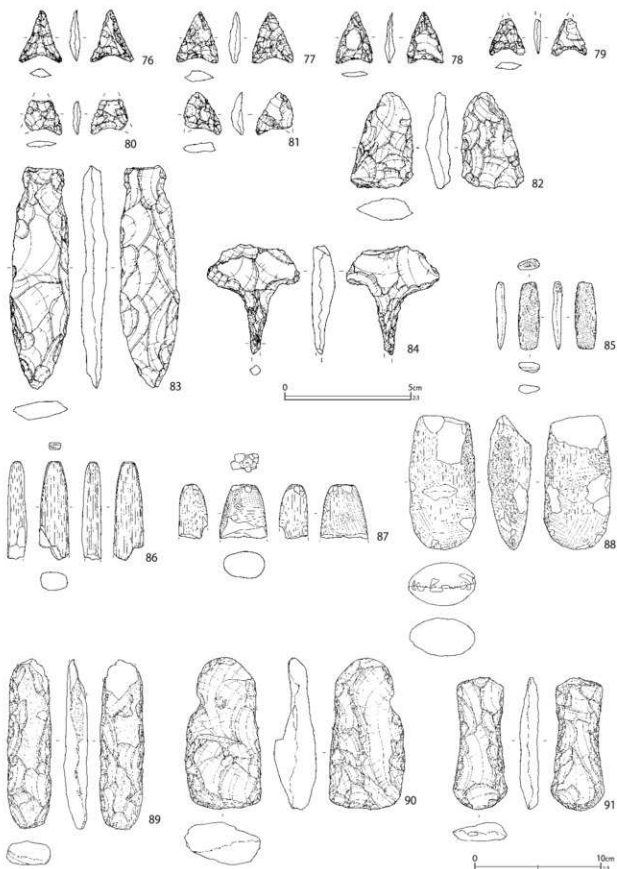
第177图 第15号住居跡出土遺物(6)



第178図 第15号住居跡出土遺物(7)

第70表 第15号住居跡出土復元土器観察表(第172~175図)

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備考	番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備考
172-1	[7.9]	19.0	(20.7)	-	40%	174-11	[19.2]	(15.6)	-	-	60%
2	39.3	27.2	28.0	-	70%	12	20.7	16.4	17.2	-	80%
3	[22.2]	(31.6)	(32.2)	-	40%	13	[10.7]	(32.0)	-	-	30%
173-4	[33.2]	(43.6)	(44.2)	-	40%	14	[15.9]	-	22.9	-	40%
5	[17.0]	-	(16.0)	6.8	60%	15	[7.6]	-	16.0	-	20%
6	[10.7]	-	(15.2)	7.2	30%	16	-	-	(34.8)	-	40%
7	-	-	-	-	10%	175-17	[21.6]	(19.0)	(19.8)	-	80%
8	[19.1]	-	(8.9)	9.0	40%	18	[18.1]	22.5	-	-	50%
174-9	[19.3]	(18.2)	(19.6)	-	70%	19	[26.1]	-	[26.1]	-	40%
10	[14.4]	13.4	[13.6]	-	90%	20	[6.9]	-	20.0	9.2	20%

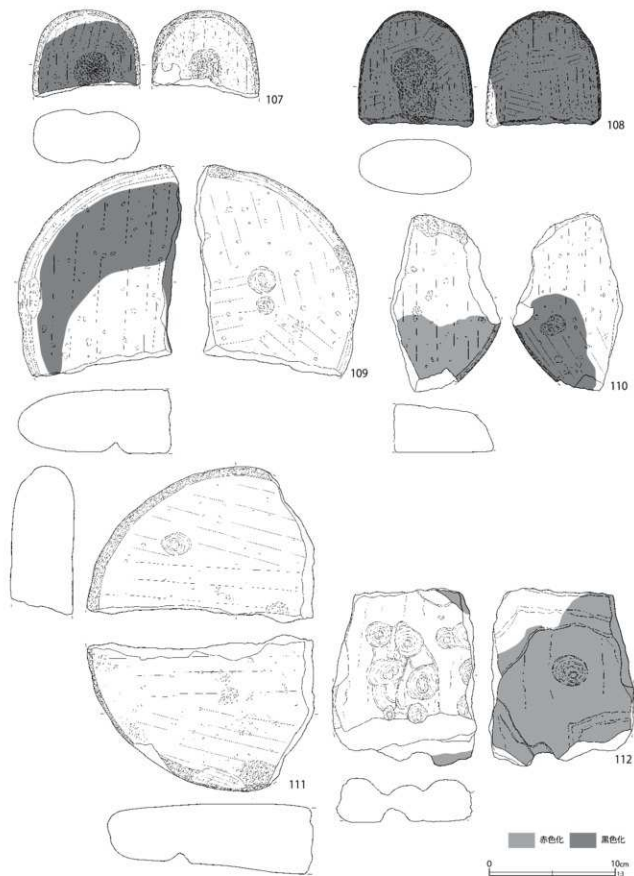


第179図 第15号住居跡出土遺物(8)



第180图 第15号住居跡出土遺物(9)





第181図 第15号住居跡出土遺物(10)

第71表 第15号住居跡出土石器観察表 (第179～181図)

番号	器種	分類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
179 - 76	石鏃	I 2①	チャート	2.1	1.7	0.4	0.7	
77	石鏃	I 2①	黒曜石	2.0	1.7	0.5	0.9	
78	石鏃	I 2①	チャート	2.0	1.5	0.4	0.8	
79	石鏃	I 2②	黒曜石	[1.5]	1.4	0.3	0.4	
80	石鏃	I 2②	チャート	[1.4]	[1.5]	0.3	0.5	
81	石鏃	I 2②	黒曜石	1.7	[1.5]	0.5	0.9	
82	石鏃	III ①	チャート	3.8	2.5	1.0	7.9	
83	石鏃	I 2①	安山岩	8.8	2.4	1.1	22.6	
84	石鏃	I ②	頁岩	[4.3]	3.7	0.9	8.3	
85	磨製石斧	II ①イ	緑色岩	5.3	1.7	0.8	10.0	小形
86	磨製石斧	II ②ア	結晶片岩	[7.8]	2.4	1.5	37.8	
87	磨製石斧	I ②イ	緑色岩	[4.4]	3.7	2.3	57.0	
88	磨製石斧	I ②イ	緑色岩	[10.7]	5.3	3.4	280.3	
89	打製石斧	II 2②イ	緑色岩	[13.4]	3.5	1.9	124.6	
90	打製石斧	III 1①ア	ホルンフェルス	12.1	6.1	3.4	208.9	
91	打製石斧	III 1①イ	頁岩	10.5	4.3	1.5	80.4	
180 - 92	打製石斧	III 2②ア	砂岩	[10.7]	5.8	1.4	100.3	
93	打製石斧	III 1①イ	ホルンフェルス	8.2	4.5	1.6	64.0	
94	打製石斧	III 1②イ	頁岩	[10.0]	5.9	2.2	98.5	
95	打製石斧	III 2②イ	砂岩	10.6	5.1	1.4	79.2	
96	打製石斧	III 1②イ	頁岩	[9.5]	[4.8]	1.1	57.2	
97	打製石斧	III 1②イ	砂岩	[10.0]	4.6	2.0	117.8	
98	打製石斧	III 2②イ	ホルンフェルス	[11.4]	5.9	1.2	89.6	
99	打製石斧	III 1②イ	砂岩	[6.9]	[5.2]	1.3	54.5	
100	打製石斧	III 1②イ	ホルンフェルス	[9.7]	[5.5]	2.9	179.3	
101	打製石斧	III 2②ア	ホルンフェルス	[8.3]	5.0	1.4	56.7	
102	打製石斧	III 1②イ	ホルンフェルス	[7.8]	6.8	2.2	120.6	
103	打製石斧	III 1②イ	ホルンフェルス	[8.1]	[5.5]	0.8	38.7	
104	スクレイパー	II 2②イ	ホルンフェルス	8.4	[6.8]	2.1	109.3	
105	磨石	IV 1②ア	安山岩	[9.5]	[6.0]	2.3	220.3	
106	磨石	I 1-3①イ	砂岩	8.3	7.5	3.3	247.1	
181 - 107	磨石	I 1-2②ア	閃緑岩	[6.9]	8.5	4.3	346.9	表面一部黒色化
108	磨石	II 1-3②ア	安山岩	9.2	9.2	4.5	590.6	蔵石として再利用
109	石皿	I 2②ア	閃緑岩	[16.8]	[13.0]	[5.6]	1777.2	表面一部黒色化
110	石皿	I ②ア	閃緑岩	[14.0]	8.7	[3.9]	596.9	表面一部赤色化 裏面一部黒色化
111	石皿	I 2②イ	閃緑岩	[18.1]	[12.4]	5.7	1758.9	
112	石皿	III 2②ア	雲母片岩	[14.1]	[11.5]	3.5	793.2	表裏面一部赤色化

数多くの遺物や礫が出土しているが、そのほとんどは覆土の上層(4～6層)に含まれる。

住居跡は炉体土器から加曾利EⅡ式前半期段階の所産と判断される。

遺物は第172図1～第181図112の土器類、石器類が出土した。

土器類は1～67である。1は炉体土器で、胴部で強く括れ、内湾して開く短い口縁部に楕円区画文を囲む2本隆帯の渦巻文を連結している。地

文は条線文である。

2は内湾して開く無文の口縁部を、交互刺突を有する隆帯で区画し、胴部に渦巻文を派生する2本沈線の懸垂文を垂下させている。渦巻文を有する懸垂文は4単位であるが、1箇所だけ1本の蛇行沈線を垂下する部分があり、全体では5本となる。また、渦巻文からも懸垂文が垂下する。地文には、複節RLR縄文を施文する。

3は胴部で括れ、緩く内湾する口縁部が開く器

形で、胴部に3本沈線の「田」字状区画文を施している。「田」字状区画文の交点部には、沈線の渦巻文を施文する。口縁部は区画線に交互刺突を施し、上向きの渦巻文を連結する繫弧文を展開する。渦巻文は8単位に施文され、それぞれ規則的に懸垂文を垂下する。地文は条線文である。

4は2と同様に無文の口縁部が開く器形で、2本隆帯で頸部の区画を行う。胴部には2本隆帯の懸垂文と1本の蛇行隆帯懸垂文を3単位の交互に配している。

5は口縁部文様帯を有し、括れる胴部に「田」字状区画文を施文するもので、区画交点に渦巻文を施文する。地文は燃糸文Lである。

6～8は深鉢形土器の胴部破片で、6は条線地文上に細沈線でランダムなモチーフを描いている。7は2本隆帯で渦巻き状のモチーフを描き、8は磨消懸垂文と、蛇行沈線懸垂文を施文している。地文は複節RLR縄文である。

9は口縁部が内湾して開く樽形の器形で、胴部を並行沈線2対で区画し、口縁部から同様に並行沈線2対を垂下施文する。地文は条線文である。

10～12は口縁部が直線的に開く植木鉢形の器形で、10は地文に燃糸文Lを施文し、頸部を3本沈線、胴部を2本沈線で横位区画している。11、12は胴部区画を行わず、地文に条線を施文し、11は口縁部を沈線区画数している。

13～19は各種の連弧文土器である。13は半截竹管状工具の合わせ施文による3～4本の平行沈線で半円状の弧線文を連結するモチーフを描いている。14は口縁部を欠損するが、胴部に垂下する隆帯を鋸歯状沈線と横位沈線で連結するモチーフを描いている。余白には刺突文を充填施文している。曾利式系の要素と連弧文の要素が折衷している。

15は燃糸文Lを施文する胴下半部に、4本の沈線で整然とした連弧文を描いている。

16は胴部上段に多条沈線で連弧文を描き、胴部

区画線との間に杵状区画を施している。この多条連弧文は、重弧文を祖形とするものであろう。口縁部にも区画文が見られる。地文は単節RLの縦走縄文風である。

17は胴部と底部を横位沈線で区画して、3帯構成の文様帯に分割し、上半部に2対の平行沈線で緩い波状連弧文を描き、下半部に鋸歯状の連弧文を描いている。10と器形及び文様帯構成が類似する。地文に条線文を施文する。

18は頸部と胴部を横位区画し、文様帯構成は17に類似するが、幅広の口縁部を無文とし、胴上半部に連弧文、下半部に沈線及び蛇行沈線懸垂文を施文する。地文は条線文である。曾利系、加曾利E式系、連弧文系要素が折衷した例であらう。

19は胴部に連弧文を描き、横帯区画線が一周してずれた部分に渦巻文を施文している。地文は単節RLである。20は無文の底部である。

破片では21～28は流れ込みの勝坂式土器で、21は古段階、22、23は中段階のものと思われる。22、23は雲母を含む。24～28は新段階であらう。21は浅鉢の口縁部、22は深鉢の口縁部、23は膨らむ胴部破片である。いずれも角押文や押引連続刺突文等を施文するものである。

25は山形の眼鏡状把手を有し、刻み隆帯の区画内に爪形文や蓮華文を施文する。26、27は沈線のみでモチーフを描くもので、最新段階の可能性もある。

29～35は加曾利E式キャリバー形深鉢である。29は燃糸文L地文上に2本隆帯の渦巻文を施文するものであり、加曾利EⅠ式前半に比定されよう。30は口唇部外端に隆帯を貼付し、口縁部文様帯内にまで垂下させて文様帯を区画する。地文に0段多条RL縄文を施文する、加曾利EⅠ式古段階に並行する勝坂式終末期の可能性がある。32、34は地文に条線を施文する加曾利EⅠ式後半段階の土器であらう。31、33、35はモチーフの崩れ等から加曾利EⅡ式に比定されよう。

37～43は各種の系統的要素を有する深鉢形土器である。37は無文の口縁部が開き、胴部に40、41のような隆帯懸垂文を垂下するものと思われる。38は内湾して開く無文の口縁部に刻みを施した沈線で区画しており、地文に縄文を施文する。連弧文系土器であろうか。39は胴の括れ部を隆帯で区画し、胴部にも隆帯のモチーフを描くものである。地文は燃糸文Rである。42、43は口縁部区画線に交互刺突文を施す深鉢で、42は燃糸文L、43は条線文を施文する。43は渦巻文の繫弧文であろうか、隆帯の剥落が認められる。

44～47は曾利式系の土器群である。44は重弧文系土器、45～47は口縁部文様帯を有するキャリパー形深鉢形土器と思われる。地文に条線を施文し、46、47は隆帯懸垂文と横位連結する沈線文を施文する。

48～59は連弧文土器である。48は胴部区画線の上下に懸垂文を施文する連弧文系土器である。

49～57は口縁部破片で、49～51、54、55は交互刺突文で、52、53は沈線文で口縁部を区画し、56、57は口縁部区画のないものである。地文は49、50、52が燃糸文L、51、54、55が単節RL、56、57が条線文である。胴部では、58が燃糸文L、59が単節RL、60が条線文である。56～59は緩い波状文様の連弧文を描き、60は波状が交差した網目状のモチーフとなっている。

61は条線文のみ施文する深鉢の口縁部である。

62～64は胴部が屈曲する浅鉢で、65～67は底部破片である。65は0段多条RLの縦走縄文、66は沈線懸垂文、67は条線文の上に隆帯懸垂文を垂下するものである。

土製品では土偶と、土製円盤が出土した。

68は土偶で上半身が現存する。頭部と両腕が表現されているが、顔は表現されていない。後頭部と思われるところに手捏ねの痕があり、顎の表現であるとすれば、実測図は表裏逆になる。

69から75は土器片を利用した土製円盤である。

石器類は76～112が出土した。

76～81は石鏃である。76、78は裏面に主要剥離面が残る。79は先端を、80が先端及び脚部の片方を、81が片方の脚部を欠いている。80は両側縁が鋸歯状である。82は石鏃の未成品である。平面形は三角形を呈しており、石鏃に比べて一回りほど大きく、厚みがあることから未成品と判断した。

83は縦型の石匙で、身部の平面形は柳葉形を呈する。

84は摘まみ部を有する石錐である。裏面に主要剥離面を残す。錐部の先端が欠けている。

85は小型の磨製石斧である。86は刃部が欠けた定角式の磨製石斧である。87、88は乳棒状の磨製石斧である。88の刃部には刃こぼれが認められる。

89～103は打製石斧である。89が短冊形を、その他は撥形を呈する。刃部の様相がわかる資料のうち、89が片刃、90～96、102は両刃である。90は被熱によって正面上半の一部が灰色化し、発泡している。

104は粗粒の石材を素材に用いた大形のスクレイパーである。

105～108は磨石である。107、108は周縁に整形を施している。107は正面及び裏面の中央に、108が正面中央に集中して敲打痕が認められる。また、ともに被熱の影響を受けている。107正面がやや黒みを帯び、108が全面的に黒色化している。107は欠損部である下面を使用面として敲石に再利用している。

109～112は石皿の破片で、109、111、112には凹痕が認められる。特に112の正面には多くの凹痕を観察することができる。109、110、112には被熱による影響が見られる。109は正面の周縁部が黒色化し、112は裏面が赤色化している。110は正面の一部が赤色化し、裏面の一部が黒色化している。

## 第16号住居跡（第182図～第186図）

P-9区に位置する。住居跡西側で第19号土城、東側で第20号土城と重複するが、本住居跡の方が古い。平面形は長径5.21m、短径4.87mと北西方向に僅かに長い円形を呈し、深さは約0.3mと比較的浅い。

壁際に1本の壁溝1が検出された。柱穴は11基検出されたが、覆土、深さ等から主柱穴と思われるものはP1、3、5～8の6基であるが、配置的にはP1、3、6～8の5本柱穴になるものと思われる。また、P2、12は浅いが、覆土にローム土を多量に含んでおり、埋め戻された可能性がある。P9、10と住居跡の関係は不明で、P11は上部の大形礫との関係を考えてが、詳細は不明である。

主柱穴の深さは、P1=38cm、P3=(45)cm、P5=42cm、P6=53cm、P7=58cm、P8=(72)cmである。

炉は住居跡中央部北西寄りに検出された。石囲炉で、住居跡の長軸方向に細長い長方形で、80cm×60cmを測る。チャート系を主体とする礫が用いられているが、南辺には石皿の大形破片が転用されている。掘り込みはほとんどなく、炉床面は被熱のため硬化及び焼土化していた。

埋嚢は検出されなかった。

南東壁近くの床面から大形の礫が出土した。長さ59cm、幅30cm、高さ28cm程の大きさで重さは70.6kgを測り、床面と間層を挟まないことから、後からの廃棄というよりも床面に設置されていたものと考えられる。

住居跡は出土土器から加曽利EⅡ式古段階の所産と推定される。

遺物は第183図1～第186図41の土器類、石器類が出土した。

土器は1～27が出土した。1は加曽利E式キャリバー形深鉢で、胴部から上が現存する。幅狭な頸部無文帯を有し、口縁部と胴部の地文に燃糸文

Lを施文する。口縁部は2本隆帯で渦巻文を弧状に連結する繫乳文を施文する。

2～10は流れ込みの勝坂式土器で、2は角押文を施文する古段階、3～7は爪形文に波状沈線に沿わせるものや複列の押引文を施文する中段階、8～10は刻み隆帯や交互刺突隆帯でモチーフを描く新段階から終末段階に比定される。

11～15は加曽利E式キャリバー形深鉢である。11は口縁部破片で、1と同一個体の可能性がある。12～15は胴部破片で地文燃糸文上に、12は2本隆帯で、13は半截竹管状の平行沈線で、文様を描き、14は2本沈線懸垂文を施文し、15は連弧文とは異なる小波状文を描いている。加曽利EⅠ式からEⅡ式にかけてのものと思われる。16は曽利系の胴部破片であろうか。

17～24は連弧文土器である。17～19は同一個体で、口縁部区画線に交互刺突を施している。地文は燃糸文Lである。20～24も同一個体と思われる。条線地文上に半截竹管状工具の平行沈線で連弧文を描いている。25は燃糸文Lを施文する口縁部破片である。

27は緩い波状を呈する浅鉢で、口縁部に2列の円形刺突列を巡らし、波頂部から内外面に2列の円形刺突文列を垂下させている。

26は台形土器の基部である。

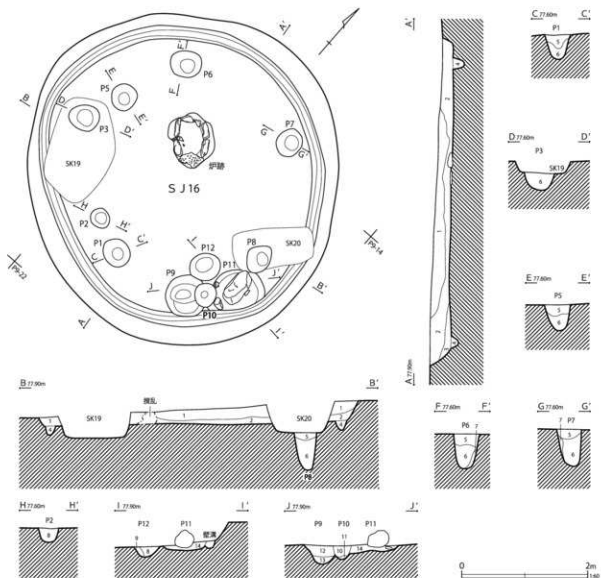
土製品としては、28の耳飾りが出土した。28は半分程欠損するが、鼓形である。

石器類は29～41が出土した。

29は乳棒状磨製石斧の基部片である。

30は柳葉形を呈する尖頭器である。横長剥片を素材剥片として使用しており、裏面には主要剥離面が残る。

31～38は打製石斧である。31は楕円形を呈している。自然礫の周縁部にのみ加工が施されているため、礫器とも思われるが、両側縁、正面及び裏面の中央に擦痕が認められることから打製石斧と判断した。32～37は撥形を呈する。このうち、



- S J 16
- 1 暗茶褐色土 ローム粒子多量で比較的均質 しまり良い
  - 2 茶褐色土 1層に近接するが、ローム土の混入が多い
  - 3 黄褐色土 ローム土主体 しまり強く粘性強い
  - 4 灰茶褐色土 ローム土を多く含む 粘性非常に強い(硬塊)
- S J 16 ビット
- 5 茶褐色土 非常に均質な層で粘粒子は殆ど含まない
  - 6 明茶褐色土 5層と同様の土をベースにローム小ブロックを混入
  - 7 黄褐色土 ローム土主体 壁の崩壊によると思われる

- 8 黄褐色土 ローム土多量 粘粒子は含まれず均質な層 しまり非常に良い
- 9 黄褐色土 ローム土主体 壁の崩壊によると思われる
- 10 暗茶褐色土 ローム土多量 炭化物微量
- 11 黄褐色土 ローム土を主体に 10層を混入
- 12 暗茶褐色土 10層に近接するがローム粒子の混入少なく炭化物多い 部分的に灰褐色土を含む 罫り非常によい
- 13 黄褐色土 12層をベースにローム土をブロック状に混入
- 14 茶褐色土 ローム粒子少量 樹根による間欠多い

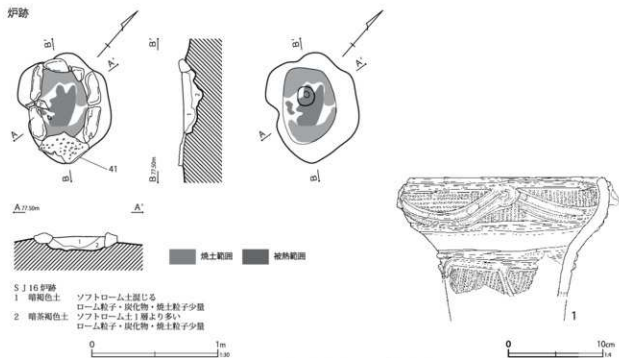
第182図 第16号住居跡 (1)

第72表 第16住居跡柱穴計測表 (第182図)

ビットNo.	長径 (cm)	深さ (cm)	ビットNo.	長径 (cm)	深さ (cm)	ビットNo.	長径 (cm)	深さ (cm)	ビットNo.	長径 (cm)	深さ (cm)
P 1	46.0	38.0	P 2	33.0	22.0	P 3	(48.0)	(28.0)	P 4	穴番	
P 6	50.0	53.0	P 7	43.0	58.0	P 8	(48.0)	(57.0)	P 9	(65.0)	28.0
P 11	95.0	11.0	P 12	(48.0)	16.0				P 10	(38.0)	21.0

第73表 第16号住居跡出土復元土器観察表 (第183図)

番号	器高 (cm)	口径 (cm)	最大径 (cm)	底径 (cm)	備考
183-1	[12.6]	20.5	(21.4)	-	40%



第183図 第16号住居跡(2)・出土遺物(1)

第74表 第16号住居跡出土石器観察表(第185・186図)

番号	器種	分類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
185 - 29	磨製石斧	I㊟イ	砂岩	[8.1]	[4.9]	[3.9]	210.5	
30	尖頭器	㊟イ	ホルンフェルス	[8.8]	3.5	1.7	62.9	
31	打製石斧	II 1㊟イ	ホルンフェルス	7.9	5.2	3.6	187.5	
32	打製石斧	III 2㊟イ	ホルンフェルス	[10.6]	6.4	1.9	107.4	
33	打製石斧	III 1㊟イ	ホルンフェルス	[10.0]	6.9	3.3	212.2	
34	打製石斧	III 2㊟イ	ホルンフェルス	[8.6]	4.3	1.7	71.3	
35	打製石斧	III 2㊟イ	ホルンフェルス	[6.6]	[4.5]	1.5	53.7	
36	打製石斧	III 2㊟イ	砂岩	[6.9]	4.4	2.1	66.2	
37	打製石斧	II 2㊟イ	ホルンフェルス	[5.1]	4.5	1.7	48.8	
38	打製石斧	II 2㊟イ	ホルンフェルス	[6.4]	[3.4]	0.8	19.7	
39	磨石	II 1-3㊟イ	砂岩	12.5	(6.0)	(3.7)	273.0	
40	軽石類	II 1-2㊟イ	軽石	7.4	5.5	3.4	31.3	
186 - 41	石皿	II 2㊟ア	緑泥片岩	[37.5]	27.9	4.6	5022.5	イへの転用

刃部の様相がわかる32は片刃、33が両刃である。38は短冊形を呈し、両刃である。39は粗粒の石材を用いたスクレイパーで、横長剥片を素材としている。右側縁が欠損しているため、詳細は不明であるが、両側縁に刃部を有していたと思われる。正面左側縁の刃部は両面からの剥離によって作出されている。

39は磨石の破片である。

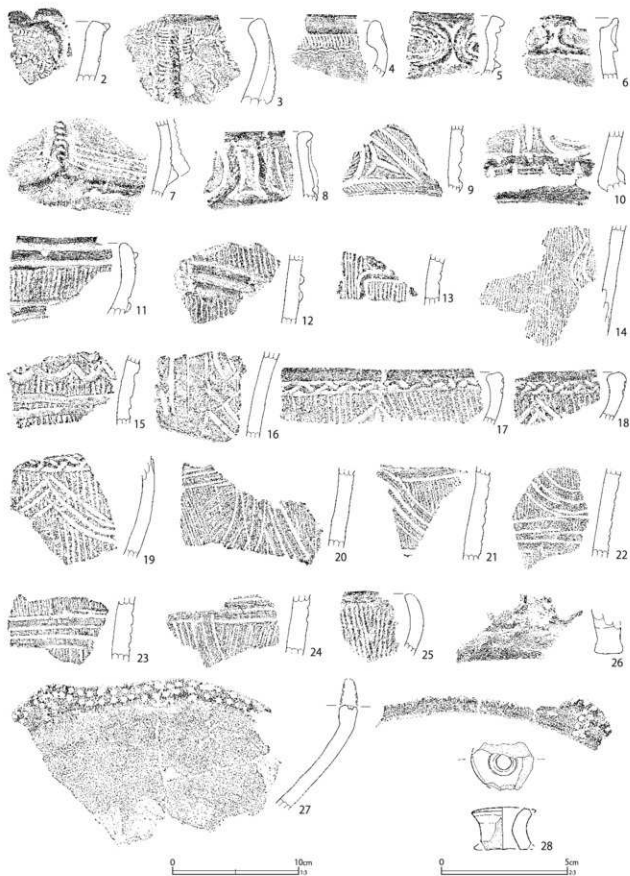
40は軽石類で、裏面に凹痕を有する。

41は石皿の破片である。炉から出土しており、

残存部分の周縁部が被熱によって赤色化している。正面及び裏面に凹痕を有し、特に裏面は密集している。皿部は著しく摩耗している。また、皿部の欠損面は故意に打ち欠かれた可能性がある。

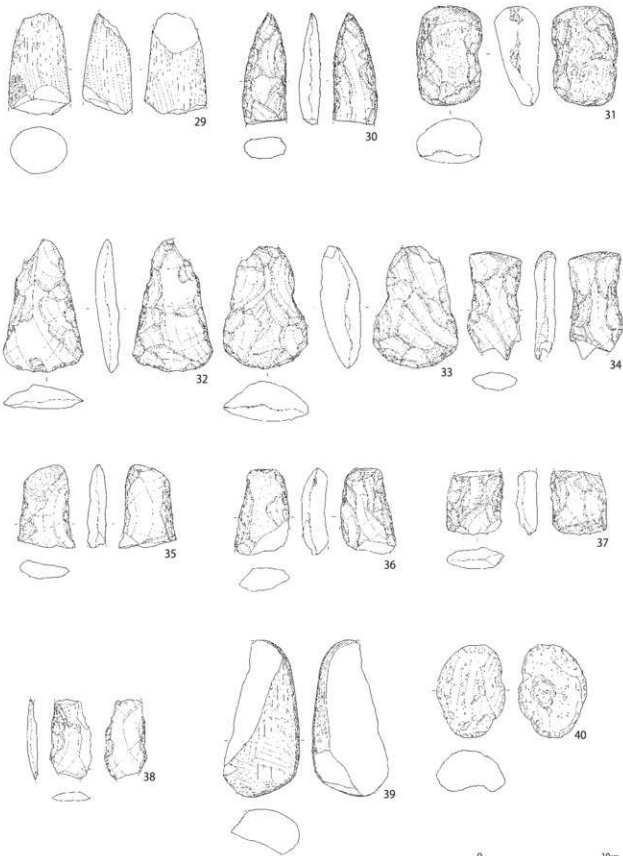
#### 第17・18・19号住居跡(第187図～第195図)

Q・R-10区に位置する。3軒の住居跡の重複で、土層の観察から最も古いのが第19号住居跡で、次に第17号住居跡、第18号住居跡が最も新しい。

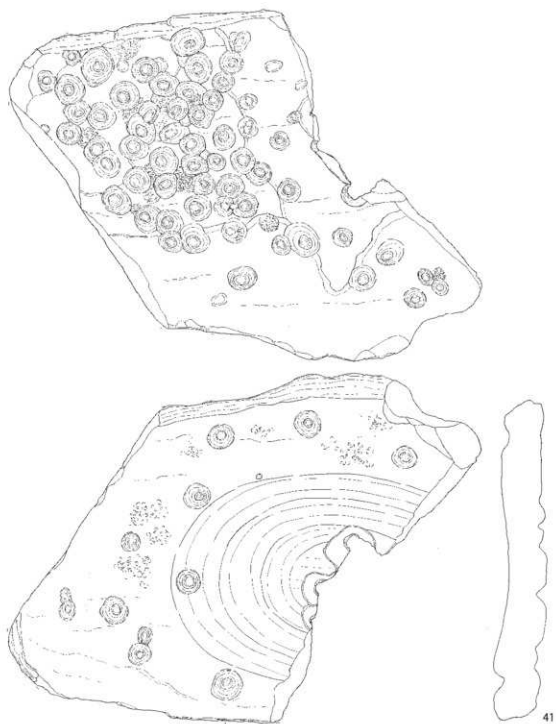


第184图 第16号住居跡出土遺物(2)





第185図 第16号住居跡出土遺物(3)



第186图 第16号住居跡出土遺物(4)

第17号住居跡は、そのほとんどを第18号住居跡によって壊されており、形状・規模とも不明である。

第18号住居跡は第17号住居跡と覆土が近似しており、平面形は明瞭ではないが、およそ径5.48m程の円形を呈するものと思われる。

第19号住居跡は一辺6.25m程の隅丸方形を呈し、確認面からの深さも40cm程で3軒のうち最も深い掘り込みを有する。

壁溝は第19号住居跡のみで2本検出された。外側の壁溝1は壁直下を全周するもので、本住居跡の最終段階のものと思われる。内側の壁溝2は、床面精査の段階で検出されたもので、外側の壁溝に伴う主柱穴によって壊されている。また、覆土にローム土を多く含んでいることから、埋め戻されたものと判断される。

柱穴は第17号住居跡と第18号住居跡で合わせて13基検出されたが、いずれも浅く主柱穴を特定できない。強いて配置すれば、P2、3、6、12、13が第17号住居跡、P4、7、8、9、11が第18号住居跡に伴う柱穴と思われるが、明瞭ではない。柱穴の深さは、P2=25cm、P3=19cm、P12=16cm、P7=21cm、P8=15cm、P9=14cmである。

第19号住居跡は柱穴が14基検出された。覆土、深さ及び配置から主柱穴と思われるものはP1～5で、ほぼ均等な5本柱穴となる。ただし、その他の柱穴はいずれも浅く、内側の壁溝2に伴う主柱穴は特定できない。なお、P8は深い掘り込みを有するが、覆土にローム土を多く含むことから埋め戻されている可能性がある。柱穴の深さは、P1=62cm、P2=50cm、P3=79cm、P4=69cm、P5=74cm、P8=81cmである。

第18号住居跡の炉は、中央部東寄りに埋甕炉が検出された。径約90cm、深さ約30cmの掘り込みの中央に大形の深鉢の上半部を埋設したもので、土器の外側には被熱のため焼土化した層が認めら

れた。また、土器の下部やや北東寄りに被熱のため焼土化したローム土が検出され、その中央部に径15cm程の掘り込みがあることから、古い段階の埋甕炉が抜かれている可能性がある。

第19号住居跡の炉は、中央部で検出され、径1.3m程の不整形な掘り込みを呈する。東側に4個の大形礫が残されていることから、石囲炉であったと思われる。また、掘り込み中央部には円形の落ち込みがあり、床面からおおよそ35cmと深いことから、土器が埋設されていた可能性がある。炉底面は被熱のための焼土化が著しい。なお、被熱による硬化部分は更に外側に広がっており、断面観察からも古い段階の炉跡であった可能性がある。

第18号住居跡において、炉跡の東側1.2m程のところで埋甕が検出された。76cm×65cmの掘り込みに、土器が逆位に埋設されたものである。住居跡の覆土掘削時には検出できなかったが、位置からしても本住居跡に伴わない可能性が高い。

第19号住居跡の埋甕は、南壁直下で検出された。径60cm程の掘り込みに無文の浅鉢が正位に埋設されたもので、壁溝1を切って作られているようである。

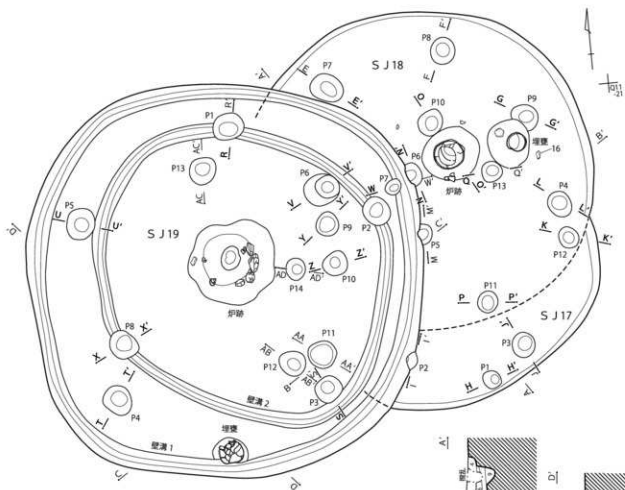
いずれの住居跡も、加曾利EⅢ式期内での重複であると思われる。

#### 第17号住居跡出土遺物

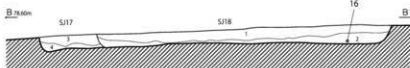
第17号住居跡からは第190図1～第191図30の土器類、石器類が出土した。

土器は1～24である。いずれも流れ込みの破片で、1、3は阿玉台式土器で、1は口縁部の隆帯に沿って2列の押し連続刺突文を施文する。雲母を含む。3は角押文で鋸歯文を施文しており、器表に鬚状整形痕を残している。阿玉台式に比定されよう。

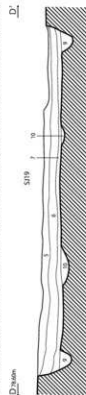
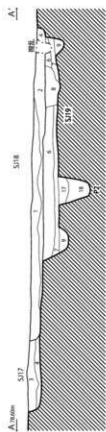
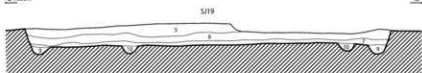
2は幅広のキャタピラ文を施文する勝坂式中段階の藤内式段階に、4、5は勝坂式新段階に位置付けられよう。6、7は勝坂式終末期の破片と思われる。地文に0段多条R1の縦走縄文を施文する。



10-11

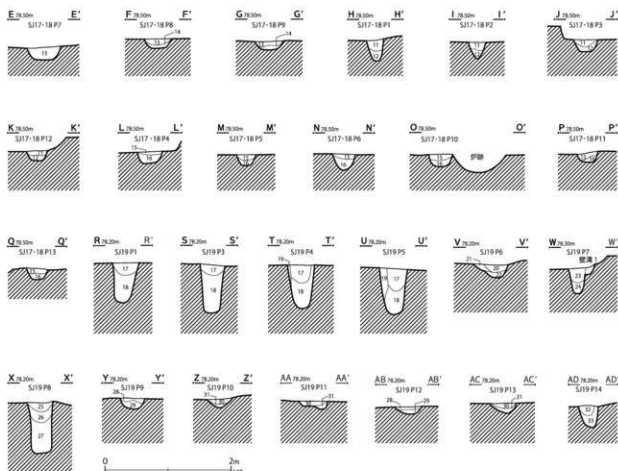


C



0 2m 1:60

第187图 第17·18·19号住居跡(1)



S J 17・18・19

- 1 灰褐色土 ローム顆粒土を少量含むのみで比較的均質な層
  - 2 暗茶褐色土 1層をベースにローム土多量
  - 3 暗灰褐色土 ローム粒子少量
  - 4 暗茶褐色土 3層をベースにローム土を混入
  - 5 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物・粘土粒子微量 均質な層
  - 6 暗茶褐色土 ローム粒子多量 炭化物粒子少量
  - 7 暗茶褐色土 ソフトローム土混じりで緻密な層
  - 8 暗褐色土 ローム粒子少量 炭化物・粘土粒子少量 ソフトローム土混じり ローム粒子少量 粘性非常に弱い(土壁か)
  - 9 暗茶褐色土 ソフトローム土混じる 7層土を多く含む ローム粒子少量(硬質1)
  - 10 暗黄褐色土 ローム土を主体(しまり良い(硬質2))
- S J 17・18・19 ビット
- 11 灰褐色土 ローム土を小ブロック状に混ざる
  - 12 暗灰褐色土 10層をベースにローム土を多量に混入 粘性非常に強い
  - 13 黄褐色土 炭化物少量 粘性非常に強い
  - 14 暗灰褐色土 12層をベースにローム土を混入
  - 15 暗灰褐色土 粒子類は殆ど含まれず、比較的均質な層

- 16 黄褐色土 ローム土主体 粘性強い
- 17 暗褐色土 ローム土多量 炭化物粒子・ロームブロック少量
- 18 暗褐色土 16層に近似するが、ロームブロックは含まない
- 19 暗茶褐色土 ソフトローム土や中多量混入、ローム粒少量
- 20 暗茶褐色土 16層に近似するが、全体的に明るい色調
- 21 暗茶褐色土 19層に近似するが、
- 22 暗茶褐色土 19層に比べてロームブロック多量
- 23 暗褐色土 ローム粒子多量 ソフトローム土少量 炭化物粒子微量
- 24 暗褐色土 16層に近似するが、ソフトローム土の混入多い
- 25 暗茶褐色土 ソフトローム土の混入多い ローム粒子少量
- 26 暗黄褐色土 ソフトローム土主体 ロームブロック少量
- 27 暗黄褐色土 19層に近似し、均質でしまり良い
- 28 暗褐色土 ソフトローム土多量 ローム粒子含む
- 29 暗黄褐色土 27層を混入し少量 しまり良い
- 30 暗茶褐色土 ソフトローム土混じる ローム粒子少量
- 31 暗茶褐色土 ソフトローム土多量 ローム粒子少量
- 32 暗褐色土 炭化物粒子微量 ローム土を小ブロック状に含む
- 33 黄褐色土 11層をベースにローム土を多量に混入、粘性非常に強い

第188図 第17・18・19号住居跡(2)

8～13は加曾利EⅢ式のキャリバー形土器で、8、9は口縁部破片、10～12は胴部破片である。10は地文条線文上に半截竹管状工具による蛇行平行沈線を垂下する。11は単節LR上に蛇行沈線を垂下する。12は幅広の磨消懸垂文を施文する。13、14、16は曾利式系の土器で、13、14は口

縁部区画内に沈線文を充填施文する。15は頭部で括れ、無文の口縁部が開く器形の深鉢と思われる。17、18は連弧文土器で、地文条線文上に、17は連弧文と口縁部下に渦巻文を施文する。19は両耳壺の橋状把手部分である。20は沈線で口縁部の無文部を区画する浅鉢で、胴部に条線

第75表 第17・18号住居跡柱穴計測表 (第187・188図)

ビットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ビットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ビットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ビットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ビットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P 1	28.0	35.0	P 2	(30.0)	25.0	P 3	40.0	19.0	P 4	43.0	19.0	P 5	32.0	18.0
P 6	38.0	25.0	P 7	54.0	21.0	P 8	43.0	15.0	P 9	44.0	14.0	P 10	44.0	21.0
P 11	34.0	17.0	P 12	35.0	16.0	P 13	33.0	20.0						

第76表 第19号住居跡柱穴計測表 (第187・188図)

ビットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ビットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ビットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ビットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ビットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P 1	49.0	62.0	P 2	46.0	50.0	P 3	41.0	79.0	P 4	49.0	69.0	P 5	50.0	74.0
P 6	56.0	23.0	P 7	27.0	40.0	P 8	46.0	81.0	P 9	37.0	17.0	P 10	40.0	15.0
P 11	44.0	13.0	P 12	43.0	12.0	P 13	43.0	16.0	P 14	35.0	35.0			

文を施文する。21も浅鉢の胴部であろうか。

22は縄文のみ施文する深鉢の口縁部破片で、23は捺糸文を施文する底部破片、24は浅鉢の底部破片である。

石器は25～30が出土した。

25、26はスクレイパーである。25は正面右側縁に、26が末端に、それぞれ刃部を有する。

27～30は打製石斧である。27、28は撥形を呈し、ともに刃部が両刃である。29は打製石斧の刃部片、30が基部片である。

#### 第18号住居跡出土遺物

第18号住居跡からは第192図1～第193図17の土器類、石器類が出土した。

土器は1～13である。

1は炉体土器である。4単位の波状口縁を呈する大きな鉢形の土器である。口縁部に無文部を区画して、S地文を起点にして胴部に逆「U」字状磨消懸垂文を10単位に施文するもので、区画内に単節RLを充填施文する。

2は埋甕である。直線的な器形の深鉢の口縁部に、単節RLを1段横位施文し、そこから縦位の磨消懸垂文を垂下している、懸垂文間に単節RLを縦位に充填施文する。

3は磨消懸垂文の垂下する底部である。

破片では、4、5は曽利式系土器、8が加曽利EⅢ式土器、7、9、10は連丸文系土器である。6は内湾する口縁部の口唇端部に押圧状の刺突を施している。単節RLの縦位施文である。

11は条線文、12は蛇行条線文を施文するもので、12は浅鉢の可能性もある。

13は沈線懸垂文を垂下する底部破片である。

石器は14～17が出土した。

14は石鏃で、裏面には主要剥離面が残る。先端を僅かに欠いている。

15はスクレイパーで、両側縁に刃部を有する。

16は楕円形の礫を利用した敲石で、下端部に敲打痕が集中する。

17は長楕円形の礫を用いた磨石である。

#### 第19号住居跡出土遺物

第19号住居跡からは第194図1～第195図42の土器類、石器類が出土した。

土器は1～35である。

1は埋甕で、小さな底部から直線的に開く鉢形の無文浅鉢である。

2は4単位の緩い波状口縁を呈し、波頂部に渦巻文を施文し、波頂部下と波底部下に2本沈線を胴部区画まで垂下する構成をとっている。地文は無文である。

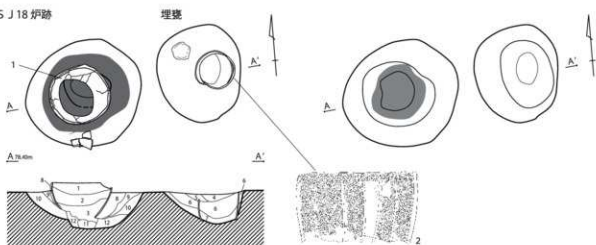
3は胴部で括れ、口縁部が直線的に開く器形を呈し、口縁部に隆帯の楕円区画文、胴部に逆「U」字状懸垂文を垂下する。地文は捺糸文Lである。

4は単節RL縄文上に、2本対隆帯と蛇行隆帯懸垂文を垂下する。

破片では、5～9は流れ込みの勝坂式で中段階から新段階のものである。

10～14、19、20は加曽利E式キャリパー形

S J 18 炉跡

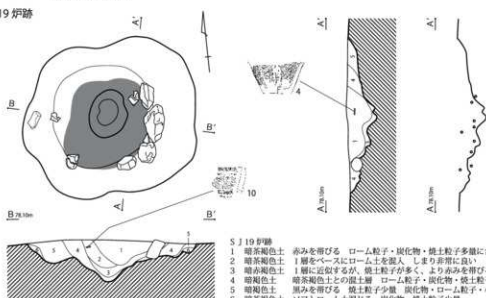


S J 18 炉跡・埋燧

- 1 暗茶褐色土 茶色みを帯びる ソフトローム土混じり  
ローム粒子・炭化物・焼土粒子少量
- 2 暗褐色土 1層に近似するが、炭化物・焼土粒子が少ない
- 3 暗茶褐色土 ソフトローム土・ローム粒子多量 焼土粒子少量
- 4 暗褐色土 黒味を帯びる ソフトローム土混じる  
ローム粒子・炭化物・焼土粒子少量
- 5 暗茶褐色土 ソフトローム土多量 ローム粒子・炭化物粒子少量
- 6 暗褐色土 黒味を帯びる ソフトローム土混じる ローム粒子多量  
炭化物・焼土粒子少量

- 7 暗褐色土 6層よりソフトローム土多い ローム粒子多量
- 8 暗茶褐色土 炭化物・焼土粒子少量
- 9 暗褐色土 赤みを帯びる ローム土少量 焼土粒子多量 しまり良い
- 10 暗茶褐色土 9層との境は部分的に焼熟のため赤化
- 11 暗茶褐色土 黒みを帯びる ローム粒子・焼土粒子少量
- 12 暗茶褐色土 ソフトローム土混じる ローム粒子や多量
- 13 暗茶褐色土 赤みを帯びる 均質で焼土粒子多量 しまり非常に良い
- 14 暗褐色土 焼熟したローム土

S J 19 炉跡

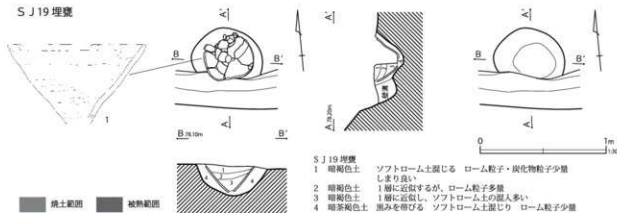


S J 19 炉跡

- 1 暗茶褐色土 赤みを帯びる ローム粒子・炭化物・焼土粒子多量に含み均質 しまり非常に良い
- 2 暗茶褐色土 1層をベースにローム土を混入 しまり非常に良い
- 3 暗茶褐色土 1層に近似するが、焼土粒子が多く、より赤みを帯びる
- 4 暗茶褐色土 暗茶褐色土との混土層 ローム粒子・炭化物・焼土粒子多量
- 5 暗褐色土 黒みを帯びる 焼土粒子少量 炭化物・ローム粒子・小ブロック多量
- 6 暗茶褐色土 ソフトローム土混じる 炭化物・焼土粒子少量

- 7 暗茶褐色土 赤みを帯びる ローム粒子・炭化物・焼土粒子多量に含み均質 しまり非常に良い
- 8 暗茶褐色土 1層をベースにローム土を混入 しまり非常に良い
- 9 暗茶褐色土 1層に近似するが、焼土粒子が多く、より赤みを帯びる
- 10 暗茶褐色土 暗茶褐色土との混土層 ローム粒子・炭化物・焼土粒子多量
- 11 暗褐色土 黒みを帯びる 焼土粒子少量 炭化物・ローム粒子・小ブロック多量
- 12 暗茶褐色土 ソフトローム土混じる 炭化物・焼土粒子少量

S J 19 埋燧



S J 19 埋燧

- 1 暗褐色土 ソフトローム土混じる ローム粒子・炭化物粒子少量
- 2 暗褐色土 1層に近似するが、ローム粒子多量
- 3 暗褐色土 1層に近似し、ソフトローム土の混入多い
- 4 暗茶褐色土 黒みを帯びる ソフトローム土混じり ローム粒子少量

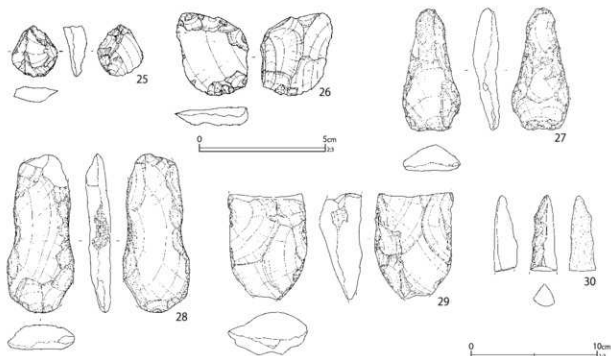
■ 焼土範囲 ■ 焼熟範囲

第189図 第17・18・19号住居跡(3)



第190图 第17号住居跡出土遺物(1)





第191図 第17号住居跡出土遺物(2)

第77表 第17号住居跡出土石器観察表(第191図)

番号	器種	分類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
191-25	スクレイパー	Ⅱ 2	黒曜石	2.0	1.8	0.9	2.1	
26	スクレイパー	Ⅱ 1①	チャート	3.3	2.9	0.7	7.2	
27	打製石斧	Ⅲ 2①ア	ホルンフェルス	9.7	4.5	2.1	76.2	
28	打製石斧	Ⅲ 1②イ	砂岩	[12.6]	5.3	1.9	153.7	
29	打製石斧	V②ア	砂岩	[8.4]	6.3	3.4	168.9	
30	打製石斧	1②イ	ホルンフェルス	[6.0]	[2.2]	1.9	22.8	

深鉢である。10、11は地文に燃糸文を施し、12は口縁部に突起から巻き下がる渦巻文を施文する。13、14は口縁部が直線的な器形を呈する。19は14と同一個体か。20は幅広の磨消懸垂文を施文する。いずれも、加曾利EⅢ式段階と思われる。15～18は口縁部文様帯のない土器群で、15は口縁部から懸垂文を垂下する。16～18は連弧文系土器の可能性ある。

21～25は連弧文土器で、21～23は不明瞭なモチーフを施文する。

26は条線文を、27は燃糸文を施文する深鉢の胴部破片である。

28～31は曾利式系土器で、28、30は口縁部裏面に突出があり、沈線を施文する。重弧文系の土

器群である。

32は沈線懸垂文を施文する底部、33は胴部が屈曲する浅鉢の胴部破片、34は口縁部が内湾する浅鉢の口縁部である。

35は台形土器である。

石器類は36～42である。

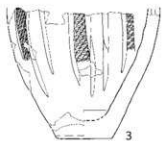
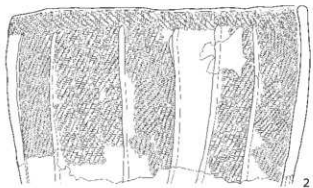
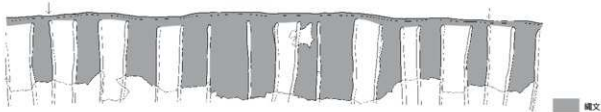
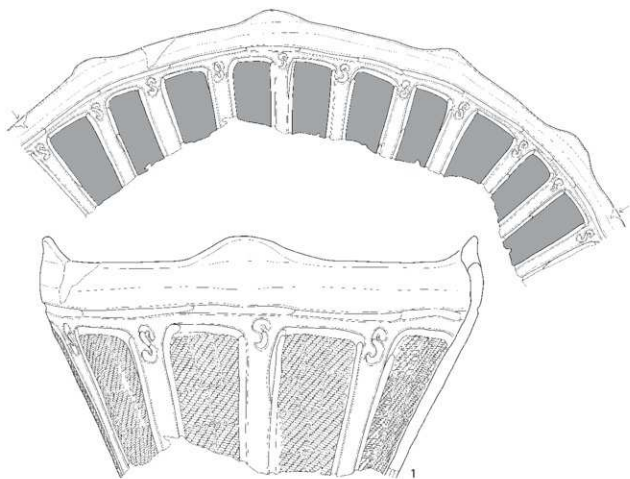
36は摘み部を有する石錐で、錐部を欠く。

37は定角式の小型磨製石斧で、下半部を欠く。

38～40は打製石斧で、38が楕形、39、40が分銅形である。刃部は38、40が両刃、39が片刃である。

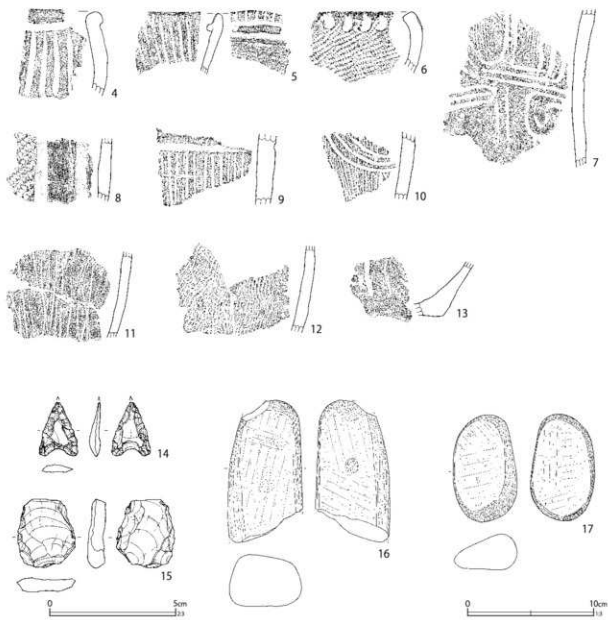
41は粗粒の石材を素材として用いたスクレイパーである。横長剥片の末端を刃部としている。

42は磨石である。正面及び裏面の中央に密集して敲打痕が認められる。



0 10cm

第192図 第18号住居跡出土遺物（1）



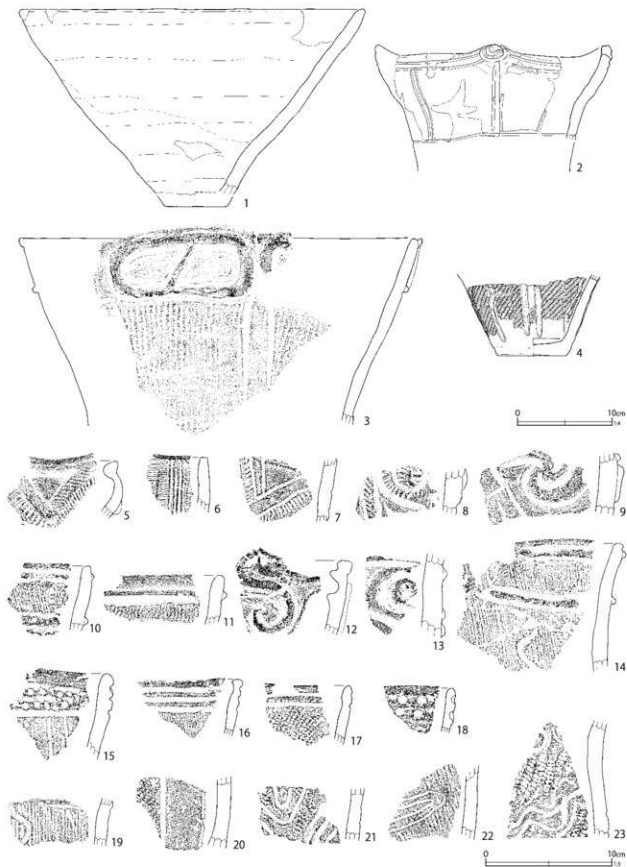
第193図 第18号住居跡出土遺物(2)

第78表 第18号住居跡出土復元土器観察表(第192図)

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備考	番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備考
192-1	[25.5]	45.2	46.6	-	50%	192-3	[14.4]	-	(16.2)	5.8	30%
2	[18.7]	30.3	31.8	-	50%						

第79表 第18号住居跡出土石器観察表(第193図)

番号	器種	分類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
193-14	石鏃	I 2①	チャート	[2.1]	1.5	0.4	1.1	
15	スクレイパー	II 2①	チャート	2.7	2.3	0.7	4.8	
16	敲石	III 1-3②イ	砂岩	[11.3]	5.9	4.7	429.6	
17	磨石	II 1-3①イ	砂岩	8.5	5.1	2.9	159.0	



第194图 第19号住居跡出土遺物(1)



第195图 第19号住居跡出土遺物(2)

第80表 第19号住居跡出土復元土器観察表 (第194図)

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備考	番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備考
194-1	[19.8]	(35.4)	-	-	80%	194-3	[19.8]	(42.6)	-	-	20%
2	[10.1]	(24.4)	-	-	30%	4	[8.3]	-	(14.2)	7.3	30%

第81表 第19号住居跡出土土器観察表 (第195図)

番号	器種	分類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
195-36	石鏝	I②	チャート	[2.9]	2.3	1.0	5.3	
37	磨製石斧	II②イ	蛇紋岩	[3.7]	1.7	0.8	8.9	
38	打製石斧	III①イ	ホルンフェルス	11.6	5.9	2.8	165.4	
39	打製石斧	IV①イ	ホルンフェルス	7.5	6.0	2.0	92.7	
40	打製石斧	IV②イ	ホルンフェルス	8.5	6.2	1.6	91.1	
41	スクレイパー	II①イ	ホルンフェルス	6.7	9.1	1.7	95.1	
42	磨石	III-3①イ	安山岩	15.7	5.6	3.8	447.1	

## 第24号住居跡 (第196・197図)

R・S-9区に位置する。北東側で第13号住居跡と重複するが、本住居跡の方が古い。南西側では第11号重複するが、新旧関係は不明である。第11号住居跡と第13号住居跡の間を精査中に炉跡が検出されたものであり、周囲にはほとんど覆土が残されておらず、規模、形状とも不明である。遺構図に示した破線は、覆土とした暗茶褐色土のおよその範囲を推定したものである。

炉跡は90cm×60cm程の不整形な掘り込みで、炉床面は被熱のため広範囲に硬化が認められ、特に中央部は焼土化が著しい。炉跡の上部から大形の土器片や礫が出土したが、これらは1層に属するもので、廃棄に伴うものと思われる。なお、炉内から2点の礫が出土しており、石囲炉であった可能性もある。

柱穴、壁溝、埋甕などの付属施設は未検出で、不明である。

出土遺物は第197図1～5である。

1は炉の上部から出土した大形の土器片で、2本隆帯の渦巻文を横位連結するモチーフを描き、連結部分等に小さな渦巻文を派生させている。地文は単節LRの充填縄文である。

2は加曾利E式キャリパー形深鉢の口縁部破片で、口縁部は隆帯の渦巻文と沈線の楕円区画文から構成されている。口縁部の区画内の地文は単節RLの縦位施文である。1は2と共伴とみると、

大木9a式初頭併行の、加曾利EⅢ式に比定されるものと思われる。

石器類は3～5である。

3、4は打製石斧である。3は撥形を、4が短冊形を呈する。刃部は4が片刃である。

5は石皿の破片で、裏面に凹穴を有する。

住居跡は出土遺物から加曾利EⅢ式期の所産と推定される。

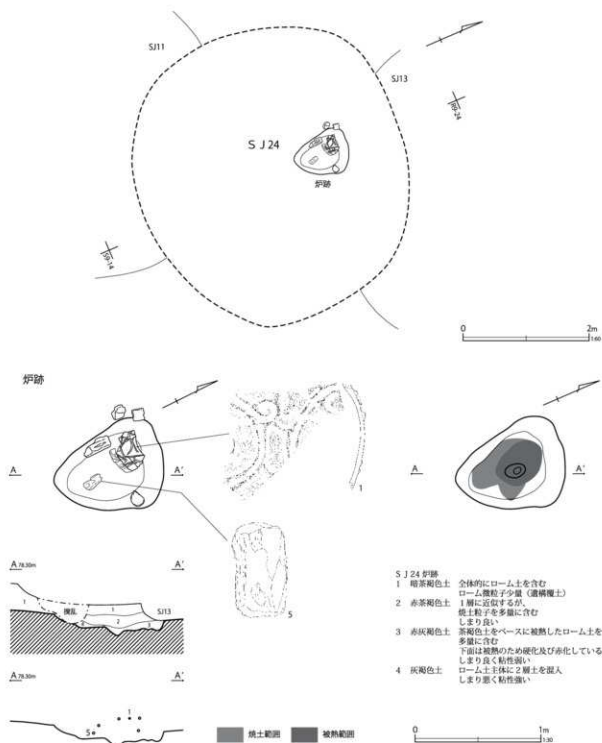
## 第25・26号住居跡 (第198図～第209図)

Q・R-11・12区に位置する。南側で第49号住居跡と重複するが、第49号住居跡は壁がなく、地床炉と柱穴のみの住居跡のため、新旧関係は不明であるが、本住居跡の方が古いと推定される。

平面形は長径5.85m、短径5.50mと北西方向にやや長い楕円形を呈し、床面までの深さは0.63mと本遺跡で二番目に深い。

壁溝は2本検出された。北側の半周が共通し、外側の壁溝1が第25号住居跡の壁に沿って全周し、本住居跡の最終段階のものと思われる。内側の壁溝2は第26号住居跡のもので、北側の内側に小さく巡るが、径4.7m程の不整形形を呈する。

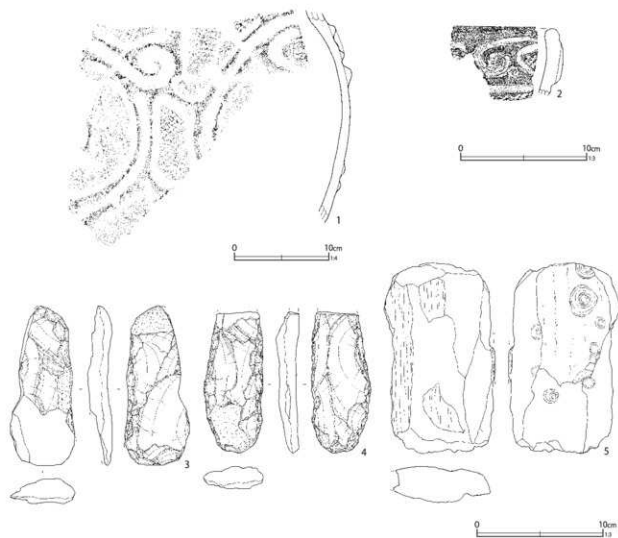
柱穴は11基検出された。覆土、重複状況、深さ及び配置から、壁溝1に伴う主柱はP1、10、3、5、7の5本であると想定される。内側の壁溝2に伴うと思われるのはP2、12、4、11、9の5本と思われる。いずれの覆土にもローム土を多



第196図 第24号住居跡

第82表 第24号住居跡出土石器観察表 (第197図)

番号	器種	分類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
197 - 3	打製石斧	V①イ	ホルンフェルス	[12.6]	[5.1]	2.0	101.9	
4	打製石斧	II 2②イ	ホルンフェルス	[11.2]	[4.7]	1.8	102.1	
5	石皿	IV②ア	緑泥片岩	[15.1]	[8.8]	3.3	615.6	



第197図 第24号住居跡出土遺物

く含む。特にP 2、9、11にはブロック状のローム土が多量に混入しており、埋め戻されたものと思われる。主柱穴の深さは、P 1=63cm、P 2=62cm、P 3=58cm、P 4=43cm、P 5=50cm、P 7=59cm、P 9=70cm、P 10=60cm、P 11=63cm、P 12=47cmである。

炉は中央部北西寄りに埋甕炉1基が検出された。底部を欠損する深鉢形土器を正位に埋設するもので、土器の外側に接する部分には被熱による焼土化が見られる。

埋甕は検出されなかった。

当所2軒分の住居跡として調査を進めたが、壁溝は二重に回るものの炉跡は単独であることから、

2軒の重複とするよりも、炉を共有する建て替え(増築)が考えられる。

住居跡は炉体土器から勝坂式終末期の所産と考えられる。

遺物は覆土中から吹上パターン状に多量に出土している。第202図1～第209図126の土器類や石器類が出土した。

土器類は1～89である。

1は炉体土器である。口縁部が直線的に開き、胴部が若干括れる深鉢形土器で、胴下半を欠いている。無文の口縁部を沈線で、細長い楕円状の蛙口状押圧を施した隆帯で頸部を区画している。地文に単節RLの縦走気味の縄文を施文する。



2はやや時期の異なる流れ込みの遺物と思われる、蓮華文を施す隆帯で、胴部の区画や鋸歯状の区画文を施文している。勝坂式中段階で藤内式の新しい段階のものと思われる。

3～6は勝坂式終末段階の土器群である。3は円筒形の深鉢で、沈線のみで懸垂文と上下対向の「U」字文を施文する。モチーフの間には三叉文を施文する。4は円筒形の器形と思われるが、胴部以下は不明である。口唇部外端に、突出する蛙口状の区画文を施すものである。

5は頸部で括れ、内湾する無文の口縁部に対向する大小の眼鏡状把手が付く深鉢である。どちらを正面とするかは難しいが、大きな山形の眼鏡状把手は左右非対称で、把手下の頸部にさらに眼鏡状把手を配している。この眼鏡状把手を中心に、左右に対称的なモチーフを描くが、文様構成が不明瞭である。対となる小形の眼鏡状把手は、側面から見ると動物の口状に見え、口唇部より上にこの口が突き出ている状況となっている。やはり、眼鏡状把手を取り囲むモチーフを施文するが、全体の構成が不明瞭である。眼鏡状把手間の胴部には、菱形状や弧状を描くモチーフを連結しており、人体文のようにも見える。

6は胴部で括れ、内湾する口縁部が大きく開き、底部が張り出す器形で、多喜窪タイプを變形させた器形となる。口縁部は4単位の波状を呈し、波頂部から垂下する隆帯で口縁部を4単位の区画している。区画内には菱形状の区画と波頂部からの蛇行隆帯を組み合わせたモチーフを描き、菱形文の先端部にハート形の口状モチーフを付加している。張り出した底部に文様はなく、胴部には条線文を施文している。

7は口縁部が大きく内湾して開く曾利式系の器形で、口縁部に渦巻文と組み合わせた隆帯の褶曲文を施文する。頸部は無文となっている。

8～11は加曾利EⅠ式キャリパー形深鉢形土器で、全て地文に燃糸文を施文する。8は短い無

文の口縁部が立ち、口縁部文様帯を刻み及び交互刺突文を施した隆帯で区画する。口縁部文様帯には2本隆帯の横「S」字状渦巻文を配し、交互刺突を施した横位隆帯で連結したモチーフを描いている。隆帯の接合部付近に交互刺突文を施文することを特徴とする。地文は燃糸文Lである。

10は口縁部文様帯に2本隆帯で「十」字状区画文を連結するモチーフを施文し、隆帯には刻みを施す。地文は燃糸文Lである。11も口縁部に「十」字状区画文を連結するモチーフを施文するが、不明瞭ではあるが、一端が剣先状を呈する可能性がある。地文は燃糸文Lである。

9は筒状の胴部破片であるが、半截竹管状工具による平行沈線で枠状文を構成する。地文は燃糸文Lである。

12～14は円筒形土器で、12は口唇部が内面に突出し、無文の幅広の口縁部を沈線で区画する。胴部の地文は燃糸文Lである。13は肥厚する口唇部を沈線で区画し、胴部地文に燃糸文Lを施文する。14は無文の幅広の口縁部がやや開く器形で、地文に燃糸文Lを施文する。15は口唇部直下から燃糸文Lを施文する。

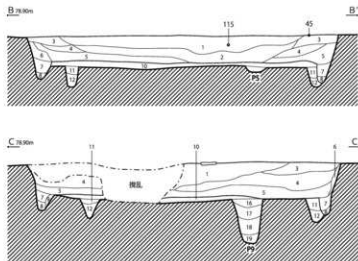
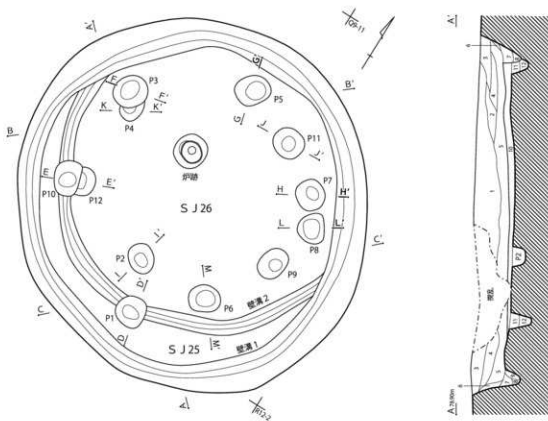
16～20は無文の浅鉢で、16、17、19は胴部が「コ」字状に、18は「く」字状に屈曲する浅鉢である。20は口縁部を欠損する。

21は円窓の空く台形土器で、脚部の一部が現存する。

破片では、22～30は角押文や三角押文を施文する勝坂式古段階の土器群で、22、23が雲母を含む。31、32は幅広の爪形文を施文するもので、31は雲母を含む。阿玉台Ⅱ式土器であろう。

33～35はキャタピラ文や連続押し爪形文、蓮華文等を施文する勝坂式中段階の土器群で、34は藤内式、33、35は藤内式新段階のものと思われる。

36～55は勝坂式新段階から終末段階の土器群で、大半は終末段階であろう。刻みを施す隆帯でモチーフを描き、隆帯脇に沈線文を施文するもの

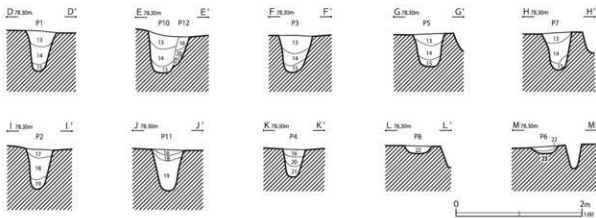


S J 25・26

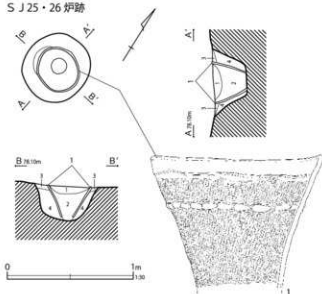
- 1 暗茶褐色土 黒味強め ローム粒子多量 炭化物・焼土粒子少量
- 2 暗褐色土 1層をベースにローム土を多く混入、ローム粒子多量  
炭化物・焼土粒子・小ブロック少量
- 3 暗茶褐色土 ソフトローム土混じり 黒味を帯び、ローム粒子少量含む
- 4 暗茶褐色土 3層よりローム土の混入多い  
ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子少量
- 5 暗茶褐色土 4層よりソフトローム土の混入多い  
ローム粒子・小ブロック少量 炭化物・焼土粒子微量
- 6 暗黄褐色土 ソフトローム土主体で暗茶褐色土を混入 炭化物粒子微量

- 7 暗茶褐色土 黒みを帯びる ローム粒子多量  
ローム小ブロック少量 (壁溝1)
- 8 暗茶褐色土 7層に近似するが、ソフトローム土の混入多く、  
黄色味が強い (壁溝1)
- 9 暗茶褐色土 8層に近似し、ローム土をブロック状に多く混入 (壁溝1)
- 10 暗茶褐色土 ローム粒子・炭化物粒子・焼土粒子多量、しまり非常に良い
- 11 暗黄褐色土 ローム土を多く含む、粒にローム小ブロック多量 (壁溝2)
- 12 暗茶褐色土 比較的ローム土の混入は少なく、黒みを帯びる (壁溝2)

第198図 第25・26号住居跡(1)



S J 25・26 炉跡



S J 25・26 ビット

- 13 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック少量 しまり悪い
- 14 暗褐色土 13層をベースに、ローム粒子及びローム小ブロックを混入
- 15 暗茶褐色土 ソフトローム上の混入若干あり、ローム粒子少量
- 16 暗褐色土 13層に近似するが、ローム上の混入多い、炭化物・焼土粒子少量
- 17 暗灰褐色土 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量
- 18 暗灰褐色土 ソフトローム上の混入多い、ロームブロック(径5cm以下)多量
- 19 暗灰褐色土 ソフトローム上・ローム粒子多量
- 20 暗褐色土 16層をベースに多量のソフトローム土を混入
- 21 暗黄褐色土 ソフトローム上主体に16層及び20層土を混入含む
- 22 暗茶褐色土 ソフトローム上多量、ローム粒子少量
- 23 暗茶褐色土 22層をベースにブロック状のローム土を混入

S J 25・26 跡

- 1 暗褐色土 ソフトローム土混じり、ローム土をブロック状に混入、ローム粒子少量、炭化物・焼土粒子少量
- 2 暗褐色土 ソフトローム1層より多い
- 3 暗茶褐色土 ローム小ブロック・炭化物・焼土粒子少量、ローム粒子少量、炭化物・焼土粒子少量
- 4 暗茶褐色土 3層よりローム粒子多い、ローム小ブロック・炭化物・焼土粒子少量

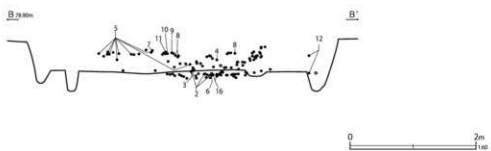
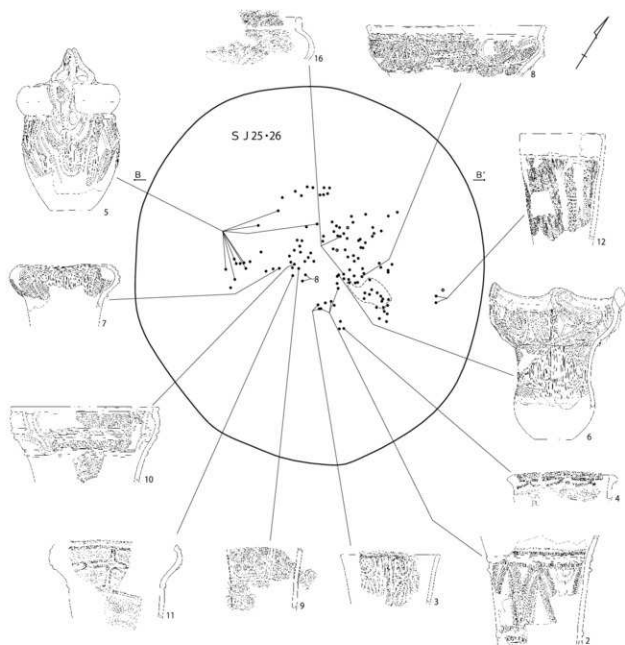
第199図 第25・26号住居跡(2)

第83表 第25・26号住居跡柱穴計測表(第198・199図)

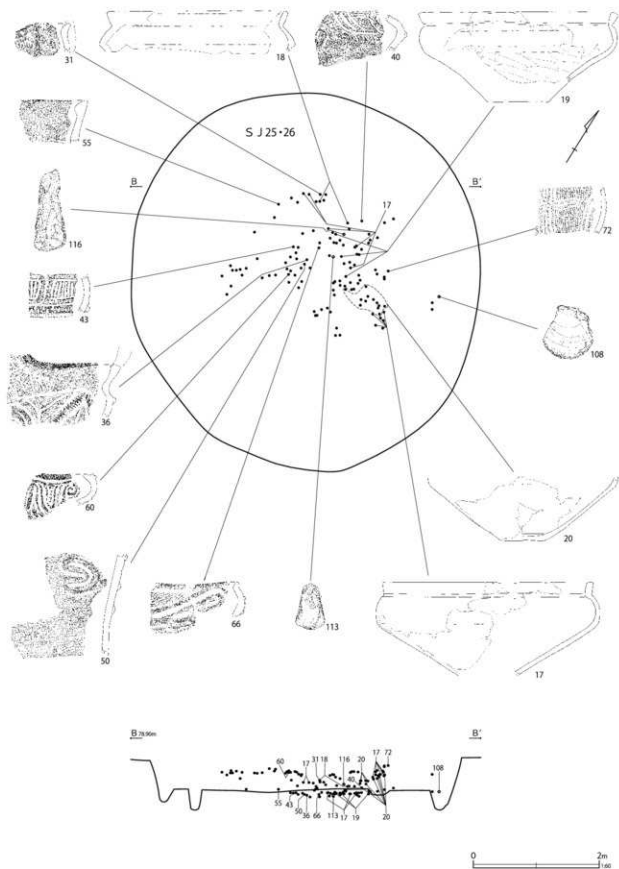
ビットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ビットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ビットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ビットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ビットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P 1	48.0	63.0	P 2	50.0	62.0	P 3	55.0	58.0	P 4	33.0	43.0	P 5	57.0	50.0
P 6	50.0	11.0	P 7	51.0	59.0	P 8	48.0	11.0	P 9	52.0	70.0	P 10	56.0	60.0
P 11	50.0	63.0	P 12	46.0	46.0									

第84表 第25号住居跡出土復元土器観察表(第202～204図)

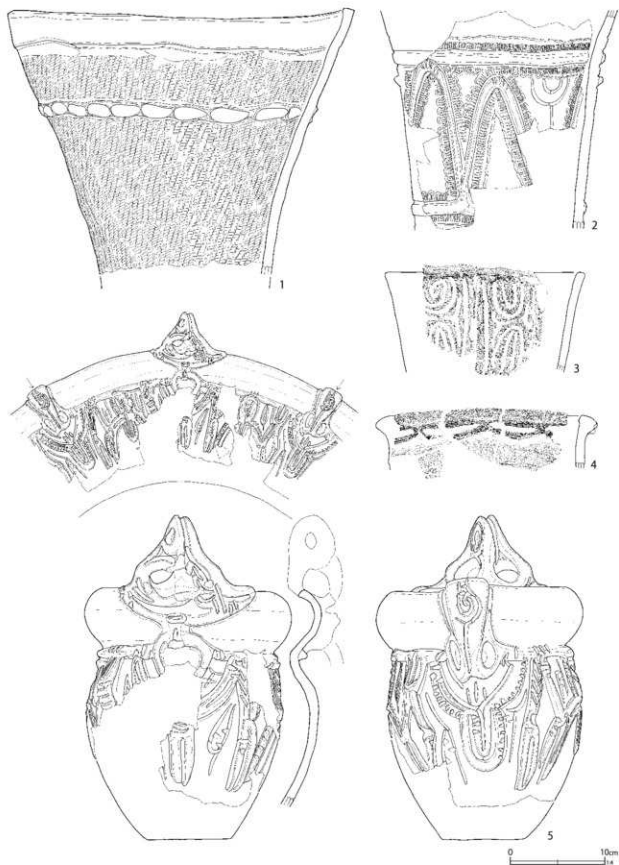
番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備考	番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備考
202-1	[27.9]	36.6	-	-	70%	204-12	[22.5]	(17.8)	-	-	40%
2	[22.9]	-	(25.0)	-	20%	13	[10.7]	(20.0)	-	-	20%
3	[10.6]	(21.2)	-	-	20%	14	[9.2]	8.9	-	-	40%
4	[5.8]	(23.4)	-	-	10%	15	[5.6]	(9.4)	-	-	20%
5	[30.6]	18.1	20.5	-	70%	16	-	-	-	-	10%
203-6	[26.6]	26.4	(27.0)	-	70%	17	[19.8]	(44.4)	-	-	40%
7	[9.8]	(18.1)	-	-	30%	18	[9.1]	(38.2)	-	-	30%
8	[10.8]	(37.8)	-	-	20%	19	[15.0]	(42.2)	-	-	30%
9	[13.2]	-	16.0	-	20%	20	[13.5]	-	[40.2]	-	50%
10	[16.0]	(31.6)	-	-	20%	21	[8.7]	-	-	(19.8)	20%
11	[14.9]	(27.0)	-	-	20%						



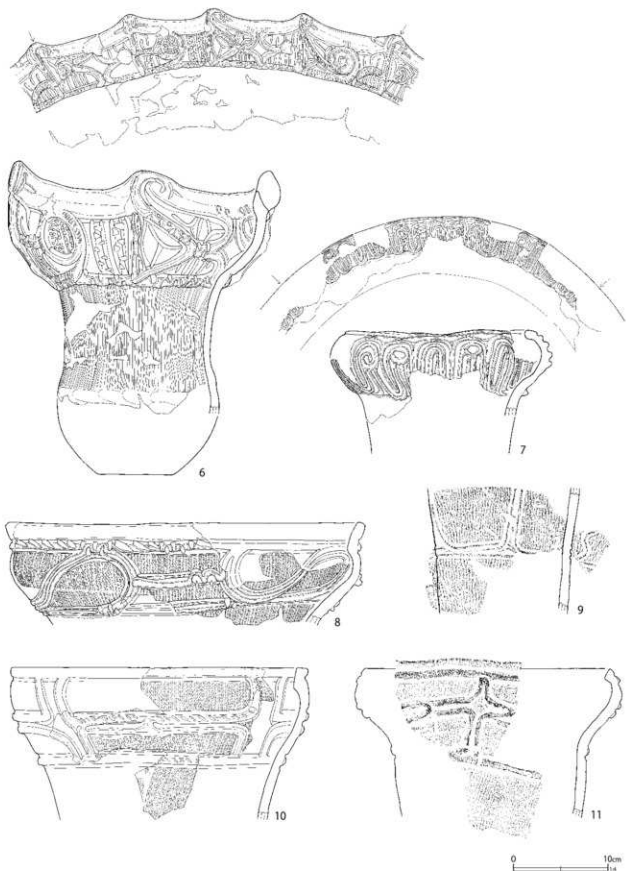
第200图 第25・26号住居跡遺物出土状況(1)



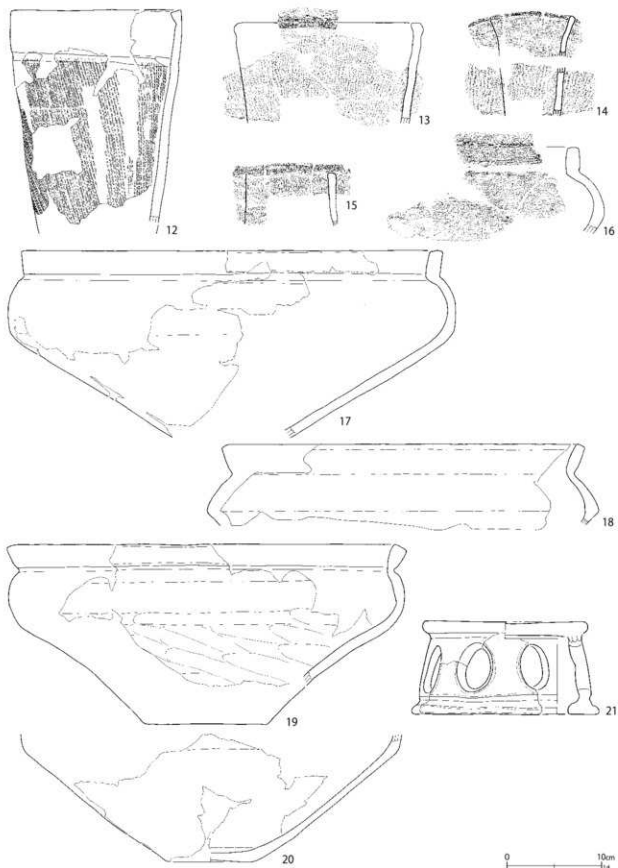
第201図 第25・26号住居跡遺物出土状況(2)



第202図 第25・26号住居跡出土遺物（1）

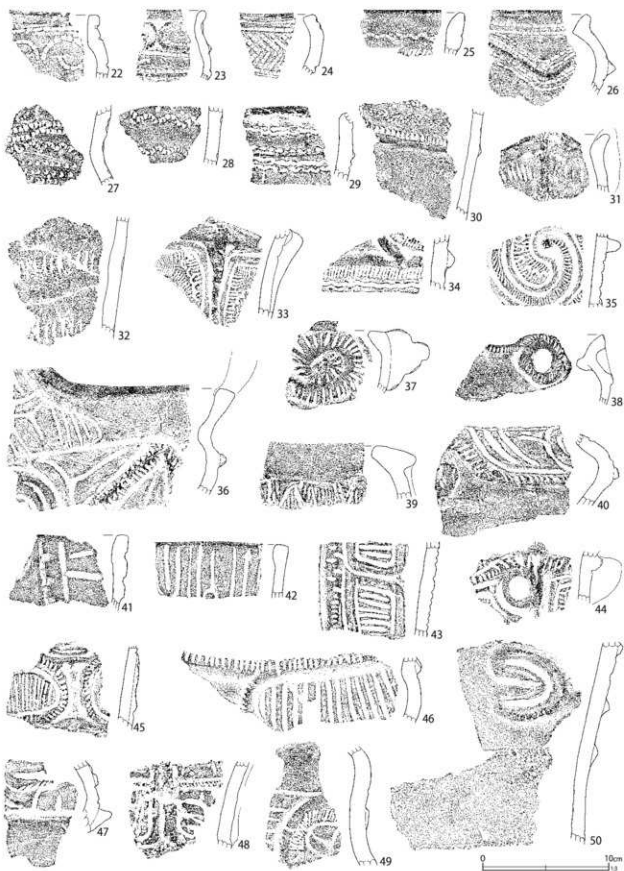


第203図 第25・26号住居跡出土遺物(2)



第204图 第25・26号住居跡出土遺物(3)

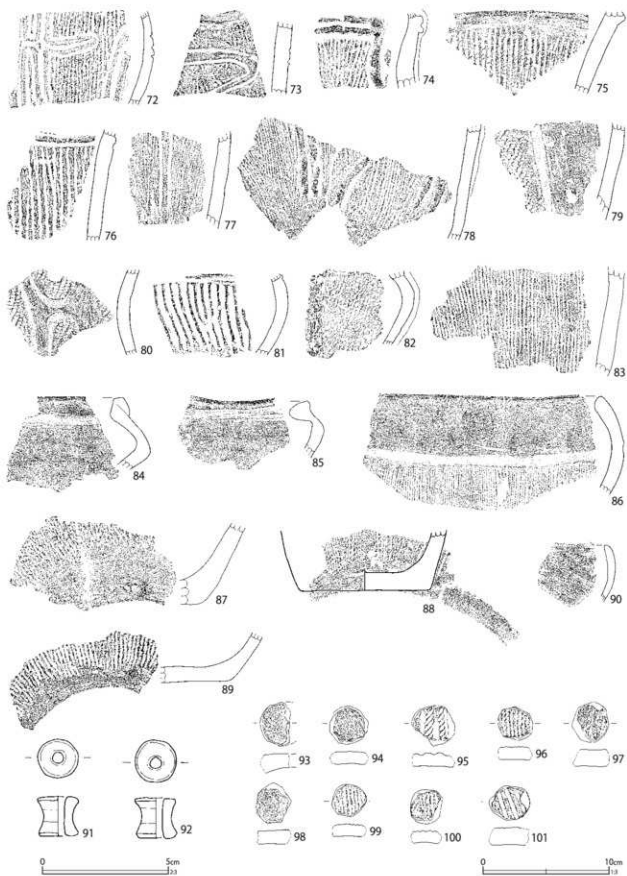




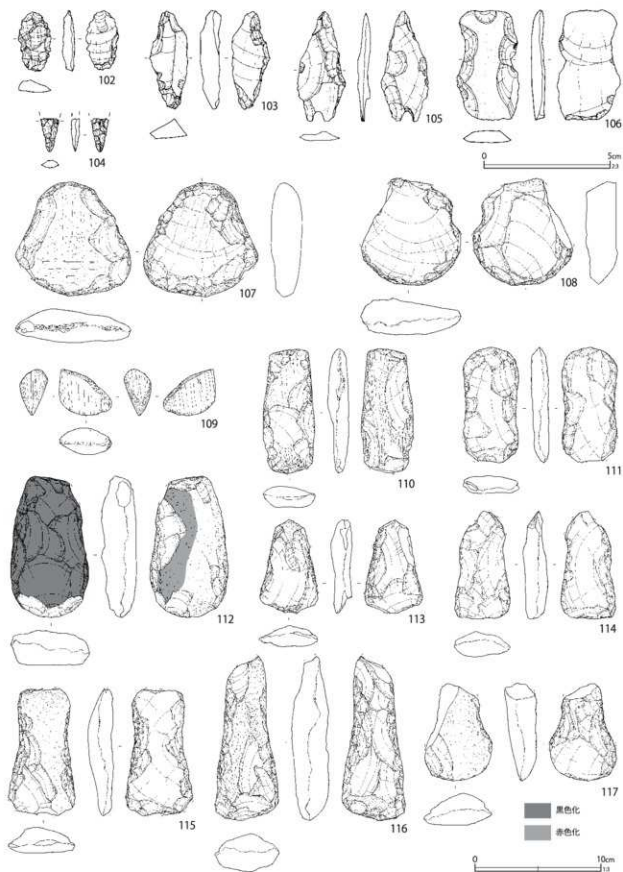
第205图 第25·26号住居跡出土遺物(4)



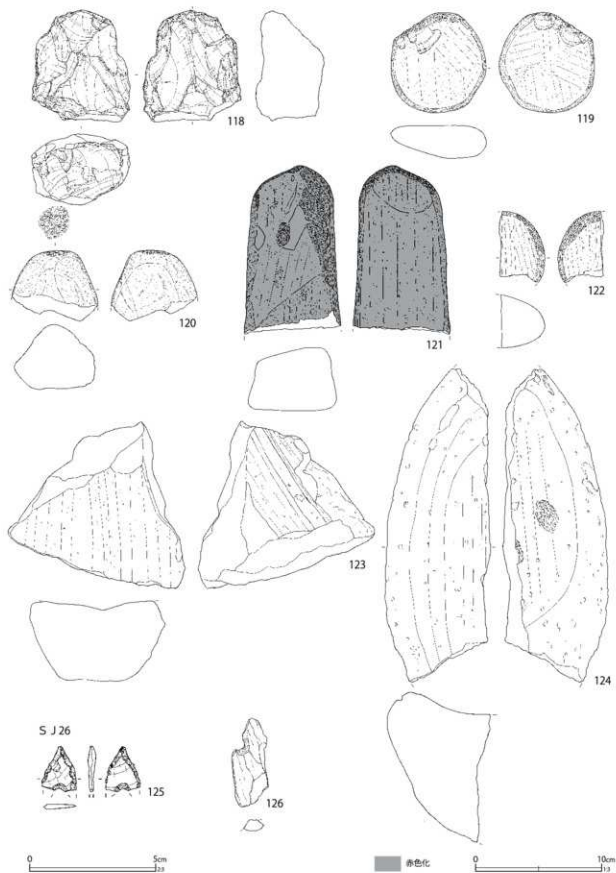
第206図 第25・26号住居跡出土遺物（5）



第207图 第25·26号住居跡出土遺物(6)



第208图 第25・26号住居跡出土遺物（7）



第209図 第25・26号住居跡出土遺物(8)

第85表 第25・26号住居跡出土石器観察表 (第208・209図)

番号	器種	分類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
208 - 102	スクレイパー	II 2①	黒曜石	2.4	1.3	0.5	1.3	
104	スクレイパー	II 2①	チャート	3.9	1.5	0.8	3.7	
103	石錐	IV ②	黒曜石	[1.3]	[0.8]	[0.3]	0.2	
105	石製品	①	緑泥片岩	4.4	1.9	0.5	3.1	
106	二次加工剥片	II ①	安山岩	4.4	2.5	0.6	7.6	
107	スクレイパー	II 1①ア	砂岩	9.1	9.1	2.7	247.7	
108	スクレイパー	II 1②イ	ホルンフェルス	8.5	[7.9]	2.9	214.0	
109	磨製石斧	V ②イ	閃緑岩	3.7	4.1	2.1	29.7	
110	打製石斧	II 2①イ	ホルンフェルス	9.8	4.1	1.7	81.2	
111	打製石斧	II 2②イ	ホルンフェルス	9.1	4.4	1.4	79.4	
112	打製石斧	III 2①ア	ホルンフェルス	11.1	6.2	2.8	256.4	表面一部黒色化 裏面一部赤色化
113	打製石斧	III 2②イ	頁岩	[7.3]	[4.6]	1.7	54.0	
114	打製石斧	III 2①イ	ホルンフェルス	8.5	4.4	2.0	74.8	
115	打製石斧	III 2①イ	ホルンフェルス	[10.0]	5.3	2.0	112.9	
116	打製石斧	III 1②イ	頁岩	[12.9]	5.1	3.0	202.5	
117	打製石斧	IV ②イ	ホルンフェルス	[7.7]	5.4	2.5	93.6	
209 - 118	磯碕	①イ	ホルンフェルス	8.8	7.8	5.6	433.8	
119	敲石	I 1-3①イ	砂岩	8.0	7.5	2.6	227.9	
120	敲石	V ②イ	砂岩	[5.6]	[6.8]	5.3	199.1	
121	磨石	III 1-3②ア	砂岩	[13.3]	[7.7]	5.2	754.8	表裏面全部赤色化
122	磨石	①1-3②ア	砂岩	[5.6]	[3.7]	[4.2]	108.8	
123	砥石	III ②イ	砂岩	[13.2]	[14.0]	[7.0]	978.1	
124	石皿	IV ②イ	安山岩	[24.7]	[8.4]	[12.7]	2730.8	
125	石鏃	I 2②	チャート	[1.8]	[1.4]	0.3	0.6	
126	石皿	IV ②イ	緑泥片岩	[7.1]	[2.9]	[1.2]	26.0	

で、爪形文を殆ど施文せず、区画内に沈線充填文を施文するのが特徴となる。隆帯上の刻みも36のように両端や49のように片側の縁に施すものがある。沈線モチーフは単純化した三叉文や、上下段違いの差し切り文などを特徴とする。地文は0段多条R Lの縦走縄文が多くなる。

54、55は無文の口縁部で、54は大きく内湾し、55は内面に内削状の突出を有し、開く器形である。

53は口縁部に区画文を有する浅鉢であろう。

56、57は4単位波状口縁を呈し、57は頭部で括れる器形を呈する。57は口縁部に刻みを施す隆帯を貼付して肥厚させ、地文に撚糸文Lを施文する中峠式系の土器である。58は口唇外端部に刻みを有する隆帯を巡らし、口縁上に沈線状の窪みが巡る。胴部は沈線で区画し、撚糸文Lを施文する。57とキャリパー形土器との中間的な様相を有する。

59～61は曾利式系の土器で、59は口縁部に沈

線渦巻文を施文する浅鉢と思われるが、胴部に単節R Lを施文することから、鉢形土器の可能性もある。60、61は強く内湾する口縁部に、隆帯の渦巻文や褶曲文を施文するものである。

62～80は加曾利E式のキャリパー形深鉢である。62～66、69は刻みを有する隆帯で渦巻文を連結する。70～72、76は撚糸地文上に半截竹管状施文の重複施文による平行沈線でモチーフを描くもので、73は地文が縄文である。74は隆帯の懸垂文を施文し、75は隆帯で頭部を区画する。以上は加曾利E I式に比定される。

67、68は加曾利E III式土器の口縁部で、79、80は磨消懸垂文を有する胴部破片である。

77、78は地文条線文上に沈線と隆帯の懸垂文を施文するもので、加曾利E II式段階の連貫文土器に伴うものと思われるが、E III式の可能性もある。

81、82は大きく膨れる胴部破片で、81は沈線が、

82は燃糸文L地文上に隆帯を垂下する。83は燃糸文Lを施文する深鉢の胴部破片である。

84、85は胴部が屈曲する浅鉢で、86は無文の口縁部を沈線区画し、条線文を施文する浅鉢である。

87～89は燃糸文を施文する底部破片である。

土製品では、ミニチュア土器、耳飾り、土製円盤が出土した。

90はミニチュアの口縁部が内湾する鉢形土器である。

91、92は鼓形の耳飾りで、ほぼ大きさが揃う。

93～101は土器片を利用した土製円盤である。

石器類は102～126が出土した。102～124は第25号住居跡、125、126が第26号住居跡からの出土として取り上げた石器である。

102、103はスクレイパーで、ともに縦長剥片を素材とし、両側縁に刃部を有する。

104は石錐の錐部先端である。断面形が凸レンズ状を呈しており、石錐の先端部とも思われるが、幅が狭く、細長いことから錐部の先端と判断した。

105は石製品で、末端に抉りを入れていることから、石錐を模した石製品と思われる。

106は二次加工剥片である。

107、108は粗粒の石材を素材として用いたスクレイパーである。107は上下両端に敲打痕を有し、敲石としても使用されていたと思われる。

109は乳棒状磨製石斧の刃部片である。

110～117は打製石斧である。110は短冊形を呈し、刃部が片刃である。111～117は撥形を呈する。このうち、117を除いて、全て両刃である。

118は礫器である。

119、120は敲石である。

121、122は磨石である。121は被熱により正面及び裏面が赤色化している。

123は砥石で、研ぎ面は不明瞭である。

124は石皿で、裏面に凹痕を有する。

125は石鎌で、脚部が両方とも欠けている。

126は石皿の破片で、凹痕を有する。

## 第27号住居跡（第210図～第213図）

N・O・9区に位置する。第21、22、28号集石土壇3基と重複するが、いずれも本住居跡より新しい。斜面肩部に作られた住居跡で全体的に掘り込みが浅く、最も深い南側で約28cm、北西側では立ち上がりは検出できなかった。したがって形状は明確ではないが、およそ径5.07m程の不整形円形を呈するものと思われる。

壁溝は検出されなかった。柱穴は13基検出されたが、覆土、重複状況、深さ及び配置から主柱穴と思われるものは2種類に分けられる。最も新しいと思われるのがP2、4、6の3基で、重複状況からそれより古く位置付けられるのがP12、1、7、3の4基であるが、いずれも配置的には不規則で、主柱を確定できない状況である。時期的には5本主柱と思われる。主柱穴の深さは、P1=56cm、P2=61cm、P3=29cm、P4=48cm、P6=49cm、P7=39cm、P12=55cmである。

炉跡は検出されなかった。位置的には第28号集石土壇によって壊されたものと推定される。

埋甕は検出されなかった。

住居跡北東側の床直上で43cm×22cm程の大形の石が出土している。第4・16号住居跡と同様に、床面上に置かれたような出土状況である。

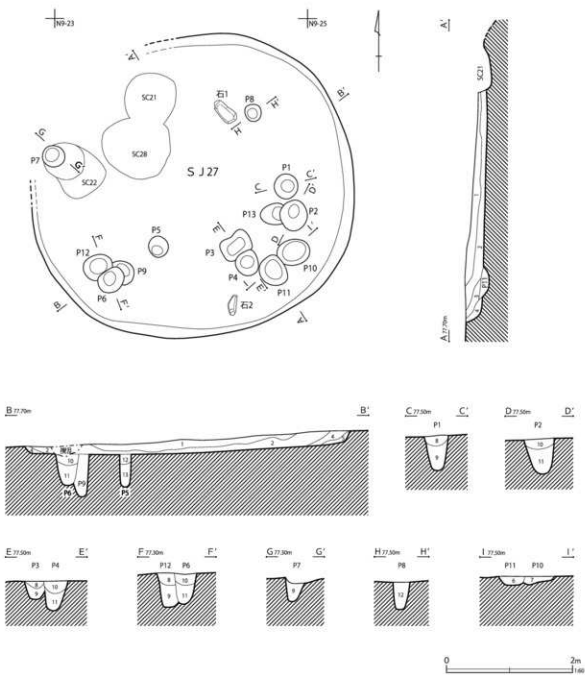
住居跡は出土遺物から、勝坂式新期段階の所産と思われる。

遺物は第211図～第213図の土器類、石器類が出土した。

土器は1～28である。覆土からの出土であり、時期的な混在も見られる。

1は頭部で大きく括れ、無文の口縁部と胴部が膨らむ器形で、胴部に刻み隆帯で渦巻文を連結するモチーフを描いている。モチーフの余白には集合沈線を施文する。渦巻隆帯の先端部は背割れ状の隆帯となっている。

2は1と同様な器形で、同一個体の可能性もあ

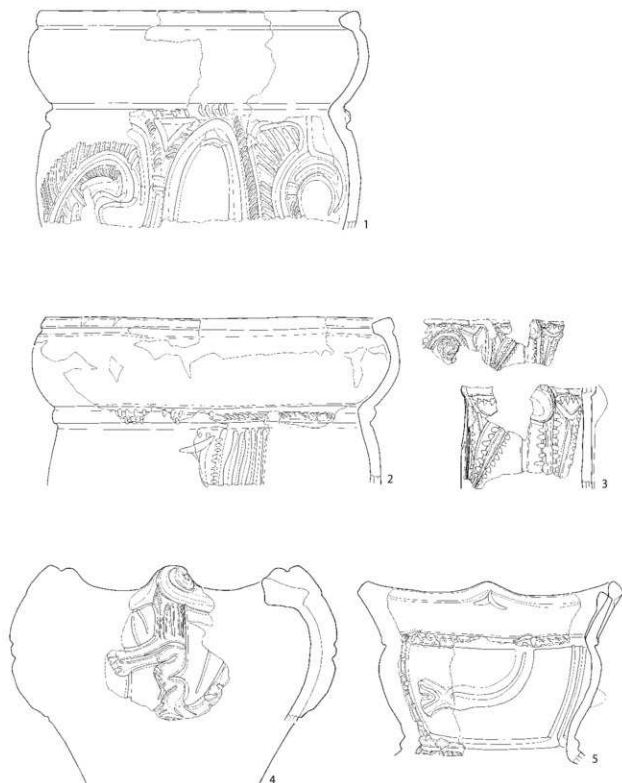


- S J 27
- 1 黒褐色土 炭化物微粒子微量 灰色粘土を小ブロック状に少量混入  
 2 暗灰褐色土 炭化物微粒子混入は1層より多い  
 灰色粘土の混入も1層より多い
- 3 暗灰褐色土 2層に近似するが灰色土の混入多量  
 4 灰褐色土 ローム土と灰褐色土との混土層で粒子類は少ない  
 比較的均質な層 粘性非常に強い
- 5 黄褐色土 ローム土を主体 3層土を混入  
 しまり非常にわるい 粘性非常に強い

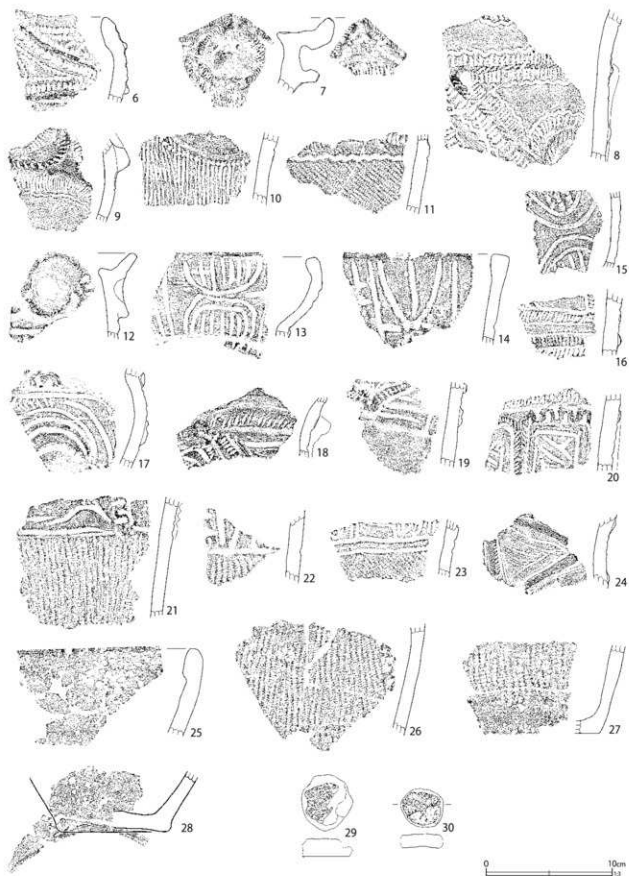
- S J 27 ビット
- 6 灰褐色土 3層に近似するが炭化物とローム土の混入多量  
 7 暗灰褐色土 3層土に近似し粘性非常に強い  
 炭化物微粒子を微量
- 8 暗灰褐色土 ソフトローム土を多量 炭化物・焼土粒子少量  
 9 暗黄褐色土 ソフトローム土主体 1層土を若干混入  
 炭化物粒子少量 均質
- 10 暗褐色土 黒み強め ソフトローム土混じる  
 ローム粒子・炭化物・焼土粒子少量
- 11 暗褐色土 10層に近似するが、ローム土の混入多く色調は明るい  
 12 暗黄褐色土 13層土をベースにローム土の小ブロックを多量  
 13 暗灰褐色土 黄褐色土とローム土の混土層  
 粒子類は含まずしまり非常に悪い

第210図 第27号住居跡

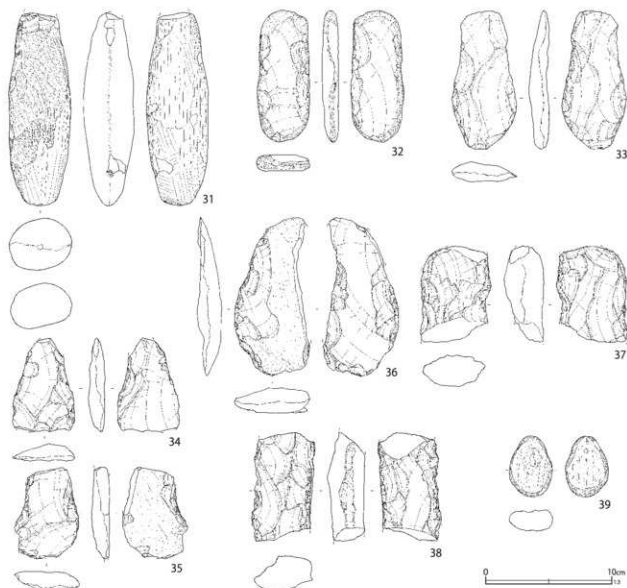




第211図 第27号住居跡出土遺物(1)



第212图 第27号住居跡出土遺物(2)



第213図 第27号住居跡出土遺物(3)

第86表 第27号住居跡柱穴計測表(第210図)

ピットNo	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo	長径(cm)	深さ(cm)
P 1	39.0	56.0	P 2	48.0	61.0	P 3	50.0	29.0	P 4	37.0	48.0
P 6	38.0	49.0	P 7	36.0	39.0	P 8	28.0	43.0	P 9	39.0	67.0
P 11	48.0	14.0	P 12	47.0	55.0	P 13	(35.0)	34.0	P 10	(52.0)	14.0

第87表 第27号住居跡出土復元土器観察表(第211図)

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備考
211-1	[22.7]	(33.8)	-	-	30%
2	[17.8]	(36.2)	-	-	30%
3	[11.1]	-	(14.3)	-	20%

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備考
211-4	[16.4]	(26.2)	-	-	10%
5	[18.4]	(25.8)	-	-	20%

る。口径がやや大きくなり、頸部区画隆帯に交互刺突文を施す点が異なっている。

3は円筒形の胴部で、隆帯の縁に押圧状の刻み

を施す低隆帯で、渦巻文や区画文を施す。

4は頸部が括れ内湾する口縁部が開く器形の、多喜窪タイプの土器である。4単位の波状口縁を

第88表 第27号住居跡出土石器観察表 (第213図)

番号	器種	分類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
213 - 31	磨製石斧	I②ア	緑色岩	[15.3]	5.0	4.1	392.9	
32	打製石斧	II②イ	砂岩	10.5	4.2	1.3	87.1	
33	打製石斧	III①イ	ホルンフェルス	11.0	5.1	1.6	84.2	
34	打製石斧	III②ア	ホルンフェルス	[7.4]	4.9	1.4	46.7	
35	打製石斧	III②ア	ホルンフェルス	12.6	[6.0]	2.0	139.1	
36	打製石斧	III②イ	ホルンフェルス	[7.7]	5.6	3.2	168.4	
37	打製石斧	III②イ	頁岩	[7.3]	5.2	1.5	67.4	
38	打製石斧	II②イ	頁岩	[8.7]	5.0	3.0	157.3	
39	軽石類	①ア	軽石	4.9	3.4	1.7	13.0	

呈し、波頂部から幅広の口唇部にかけて渦巻文を構成する。波頂下から頭部区画まで蛇行隆帯を垂下し、文様帯の隆帯と組んで蛇体状のモチーフを構成するものと思われる。

5は口縁部と胴部で2段に括れ、瓢状の器形を呈するものと思われる。4単位の波状を呈する無文の口縁部が開き、胴上半部に縦位区画と垂下する蛇頭状モチーフを施文する。胴下半部には単節R L縄文が施文されている。

破片では、6は角押文や三角押文を施文する勝坂式古段階の土器で、7～11は幅広のキャタピラ文や連続爪形文を施文し、折れ線状の鋸歯状沈線に沿わせる勝坂式中段階の藤内式並行の土器群と思われる。7は欠損するが眼鏡状把手で、口唇部が三角形に突出している。

12～24は勝坂式新段階から終末段階の土器群である。12は口縁部に捺りを加えた耳状突起を付け、周縁部に押圧状の刻みを施している。赤褐色を呈し、胎土に雲母を含むことから焼町式系の土器と思われる。

13～15は太沈線モチーフを描くもので、13、15は対弧状文を描き、13は集合沈線文、15は結節刺突文を充填施文する。14は口縁部に縦位区画文と「U」字状文を組み合わせた文様を描いている。

16～21、24は刻み隆帯で区画及びモチーフを描くもので、16、18は勝坂式新段階になる可能性がある。他は隆帯上に交互刺突文や「ハ」字状刻みを施すなど、終末段階の特徴を有している。

21～23の円筒土器の胴部にはO段多条R L縄文を施文しており、21、22は縦走縄文、23は横位施文の斜縄文を施文する。

25は内面に稜を有し、内湾して開く無文の口縁部破片である。26は胴部破片、27は底部破片でいずれもO段多条R Lの縦走縄文を施文する。28は無文の底部破片である。

土製品としては、29、30が土器片を利用した土製円盤である。

石器類は31～39が出土した。

31は乳棒状磨製石斧の未成品である。全面的に整形時の敲打痕が認められ、研磨が粗いことから未成品と判断した。

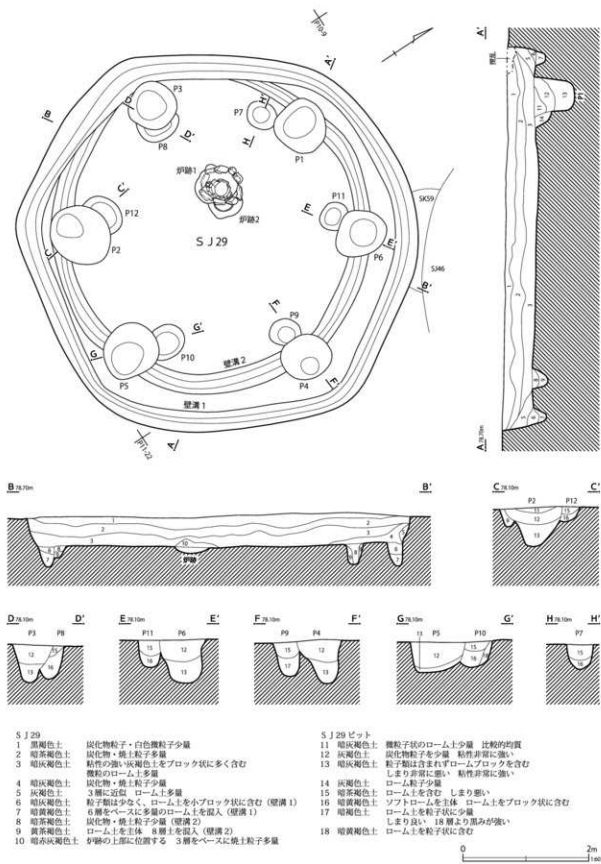
32～38は打製石斧である。32が短冊形を、33～35は撥形を呈する。このうち、33、35が両刃で、34は片刃である。36、37は基部片、38は片刃の刃部片である。

39は軽石類で、正面に凹痕を有する。

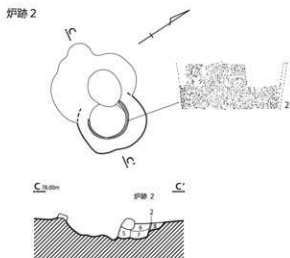
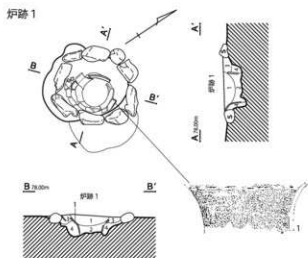
#### 第29号住居跡 (第214図～第219図)

P-10・11区に位置する。北側で第59号土壇と重複するが、本遺構の方が新しい。径6.30m程の六角形を呈し、掘り込みの深さも0.5mと深い。

壁溝は2本が検出され、西壁部分で重複する。外側の壁溝1は壁直下を全周するもので、本遺構の最終段階のものと思われる。内側の壁溝2は径5m程の不整形形を呈し、外側の壁溝に伴う柱穴によって壊されている。



第214図 第29号住居跡(1)

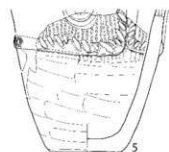
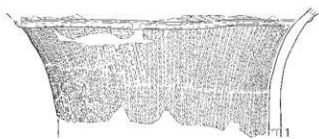
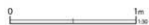


S J 29 炉跡 1

- 1 暗茶褐色土 ローム粒子・小ブロック多量 炭化物粒子・焼土粒子少量
- 2 暗褐色土 1層に近似 ローム粒子多量 炭化物粒子・焼土粒子少量
- 3 暗茶褐色土 ローム粒子多量 炭化物粒子・焼土粒子少量
- 4 暗茶褐色土 3層に近似 ローム粒子・小ブロック多量

S J 29 炉跡 2

- 5 暗茶褐色土 ローム土・焼土を小ブロック状多量 炭化物粒子少量
- 6 暗褐色土 ロームブロック含む 炭化物粒子・焼土粒子少量
- 7 暗褐色土 ローム土は粒子状に少量 炭化物粒子・焼土粒子少量
- 8 暗褐色土 5層より混みを増やす ローム小ブロック少量 焼土小ブロック多量



第215図 第29号住居跡(2)・出土遺物(1)

第89表 第29号住居跡柱穴計測表 (第214図)

ピット№	長径 (cm)	深さ (cm)	ピット№	長径 (cm)	深さ (cm)	ピット№	長径 (cm)	深さ (cm)	ピット№	長径 (cm)	深さ (cm)	ピット№	長径 (cm)	深さ (cm)
P 1	86.0	63.0	P 2	103.0	62.0	P 3	73.0	59.0	P 4	78.0	68.0	P 5	87.0	47.0
P 6	88.0	67.0	P 7	50.0	38.0	P 8	66.0	52.0	P 9	50.0	53.0	P 10	60.0	40.0
P 11	50.0	41.0	P 12	67.0	23.0									

第90表 第29号住居跡出土復元土器観察表 (第215図)

番号	器高 (cm)	口径 (cm)	最大径 (cm)	底径 (cm)	備考	番号	器高 (cm)	口径 (cm)	最大径 (cm)	底径 (cm)	備考
215-1	[12.9]	-	32.2	-	30%	215-4	[8.2]	(19.4)	-	-	10%
2	[15.3]	-	36.7	-	20%	5	-	-	16.2	7.4	40%
3	[5.4]	(15.2)	-	-	20%						

柱穴は12基検出されたが、覆土、重複状況、深さ及び配置から主柱穴と思われるものは新旧の2種類に分けられる。本遺構の最終段階のものは、P 5、2、3、1、6、4の6基で、外側の壁溝1に伴い、配置もそれぞれ六角形の頂点に対応している。また、P10、12、8、1、11、9の6基は、P 1～6に切られていることからそれらよりも古く、内側の壁溝2に伴うものと思われる。

主柱穴の深さは、P 1 = 63cm、P 2 = 62cm、P 3 = 59cm、P 4 = 68cm、P 5 = 47cm、P 6 = 67cm、P 7 = 38cm、P 8 = 52cm、P 9 = 53cm、P 10 = 40cm、P 11 = 41cm、P 12 = 23cmである。

炉跡は住居跡中央北西寄りに検出され、新旧2基の炉跡が確認できた。新しい炉1は、石垣埋甕炉で、9個の竪を一辺65cm程の方形に並べ、その内側の南東寄りに土器上半部が埋設されていた。奥側の石列の中央には、唯一直方体の赤色チャート礫が配されていた。古い炉2は、石垣炉の調査後に南東側で検出された。新しい炉跡と同程度の掘り込み中に土器を埋設するもので、西側は新しい炉跡のために壊されていた。また、覆土の5層としたものは、本来4層に相当すると思われるが、被熱のためか焼土ブロックを多く含む。

埋甕は検出されなかった。

住居跡は炉体土器から加曾利E I式期の所産と判断される。

遺物は第215図1～第219図76の土器類、石器類が出土した。

土器は1～55である。

1は炉跡1の炉体土器である。口縁部を欠損し、胴部のみ現存する。加曾利E I式キャリバー形深鉢形土器で、口縁部に斜位の胴部に縦位の燃糸文Lを施文する。

2は炉跡2の炉体土器である。大きな土器であるが、胴部のみが現存する。地文に燃糸文Rを施文する。

3～5は勝坂式系の土器である。3は口縁部が内湾する樽形の土器で、口縁部に半截竹管状工具の重複施文による3本平行沈線で、楕円区画文帯を構成する。

4は浅鉢と思われる。肩部の文様帯が鱗状に張り出している。沈線の楕円区画文内に、交互刺突を施している。

5は筒形土器の胴部と思われる。背合わせに垂下する刻み隆帯で胴部を区画し、地文に燃糸文Lを施文する。

破片では、6、7がP 1、8～10がP 2、11～13がP 4、14～18がP 5、19がP 7、20がP 10、21がP 11からの出土である。

22～28は胎土に雲母を含み、複数の押し連続刺突文や条線文を施文する阿玉台Ⅱ式土器である。

29、30はキャタピラ文や三角押文を施文する勝坂式古段階の新道式に、31、32は連続爪形文に折れ線状の沈線鋸歯状文を施文する中段階の藤内式に並行する土器群と思われる。33は眼鏡状把手を有し、幅広の爪形文を施文しており、36は口縁部の楕円区画内に蛇行する細かな連続爪形文を施文している。胴部破片では43が相当し、藤